埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第380集

東松山市

反町遺跡 II

大規模小売店舗建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告
（河川・古墳編）

2011

ユニー株式会社
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次

(集落編)
Ⅰ 発掘調査の概要 …… 1
1．発掘調査に至る経過 …… 1
2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
(1) 発掘調査 …… 2
(2) 整理・報告書の作成 …… 3
3．発掘調査・報告書作成の組織 …… 6
Ⅱ 遺跡の立地と環境 …… 7
1．地理的環境 …… 7
2．歴史的環境 …… 9
Ⅲ 遺跡の概要 …… 15
Ⅳ 集落跡の遺構と遺物 …… 25
1．弥生時代の住居跡 …… 25
2．古墳時代の住居跡 …… 51
3．奈良時代の住居跡 …… 341
4．溝跡 …… 351
5．土壙 …… 365
6．窯跡 …… 368
7．グリッド・表採 …… 369

(河川・古墳編)
Ⅴ 河川跡の遺構と遺物 …… 381
1．第48号溝跡 …… 381
2．第48号溝跡の堰 …… 410
3．第79号溝跡 …… 433
4．第48・79号溝跡出土木製品 …… 482
Ⅵ 古墳跡と遺物 …… 515
1．古墳群の概要 …… 515
2．古墳跡 …… 517
3．調査区出土遺物 …… 614
Ⅶ 科学分析 …… 619
1．反町遺跡出土木材の樹種 …… 619
2．反町遺跡出土馬銀の放射性炭素年代測定 …… 639
3．反町遺跡出土の動物遺体 …… 641
Ⅷ 調査のまとめ …… 643
1．調査の成果 …… 643
2．弥生時代の土器変遷 …… 648
3．古墳時代の土器変遷 …… 652
4．玉作とガラス小玉鋳型について …… 674
写真図版

V　河川跡の遺構と遺物

1．第48号溝跡

反町遺跡の第３次調査では、調査区域内から河川跡を２条検出した。

河川跡は、南北に延びる台地の北側と西側に検出した。北側に検出した河川跡は第48号溝跡で、西から東に向かって東流する。また、西側に検出した河川跡は第79号溝跡で、南から北に向かって北流する。両河川はＫ－57・58グリッドで合流している。

河川跡の流路は、南側から流れ込む第79号溝跡が、第48号溝跡に合流し、Ｙの字状に左右に分水する。本流は東方向に流れをとる一方、西側には、流水を調節する堰跡を検出した。

反町遺跡では、これまでの第１～３次調査において台地部分の周囲に河川跡を検出している（第９図）。河川跡からは、弥生時代後期末から古墳時代前期の土器や木製品を多く検出している。また、古墳時代中期、奈良・平安時代に至るまでの土器や木製品が出土した。今回検出した第48号溝跡をはじめ、第36号溝跡、第３号溝跡が河川跡と判断される。

第48号溝跡は、第２次調査で検出された河川跡である。今回の第３次調査において調査区北側に検出した溝跡は、この第48号溝跡につながるとみられ、同一であると判断し、遺構名を第48号溝跡とした。第２次調査の第48号溝跡は、水晶や碧玉による玉作工房跡の南側に検出され、溝跡の覆土中から玉類の剥片を多く出土した。今回の調査においても、覆土中から水晶の剥片が検出されている。

なお、調査区の北東に幅4.0ｍ～8.0ｍ、長さ50.0ｍにおよぶ南北のトレンチがある。このトレンチは、本調査区の東側にあたる第２次調査の際に検出された第36号溝跡（河川跡）のつながりを検出するために掘削したものである。その結果、本調査区では溝跡は検出されず集落域であった。

本溝跡は、調査区の北側、Ｉ～Ｌ－56～62グリッドに位置する。北西から北東方向に検出され、やや南側に湾曲する。湾曲した頂部は、第79号溝跡との合流部分である。この合流部分の西側走行方向は、Ｎ－63°－Ｅ、また、東側走行方向は、Ｎ－54°－Ｗを指す。規模は全長56.7ｍ、幅20.3～25.2ｍ、深さ1.00～3.65ｍを測る。

確認状況は、調査区北側に弧を描くように黒色土を検出した。確認面は標高18.20ｍ前後である。

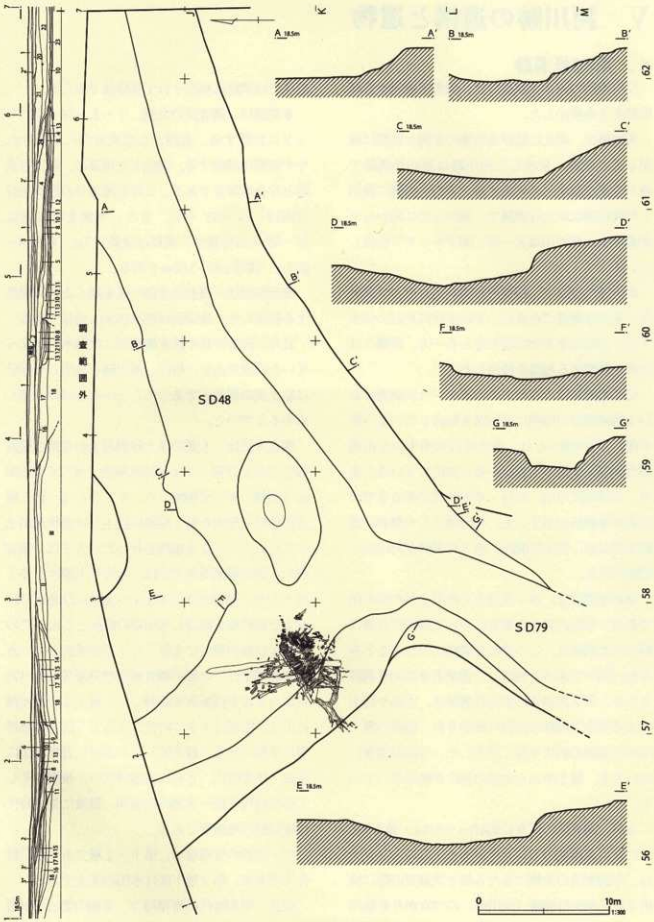
11月、秋雨が長く続き確認面には雨水が溜まっていた状況である。特に、河川跡を検出した部分は粘土質の黒色土であったことから水はけが悪くぬかるんでいた。

調査方法は、上面の第１層黒色土から第２層黄褐色土および第３・４層黒灰褐色土までの約0.50ｍは重機によって掘削した。そこからは、第５層青灰色粘土層から第７層黒灰色土では遺物が出土するため人力による掘削を行った。さらに、第10層から第13層黒褐色土では、木片や土器片を多く出土した。確認面から約1.50～2.00ｍの地点で砂および砂利層を確認し河川跡の底面とした。この砂および砂利層内にも多くの土器が混在していた。

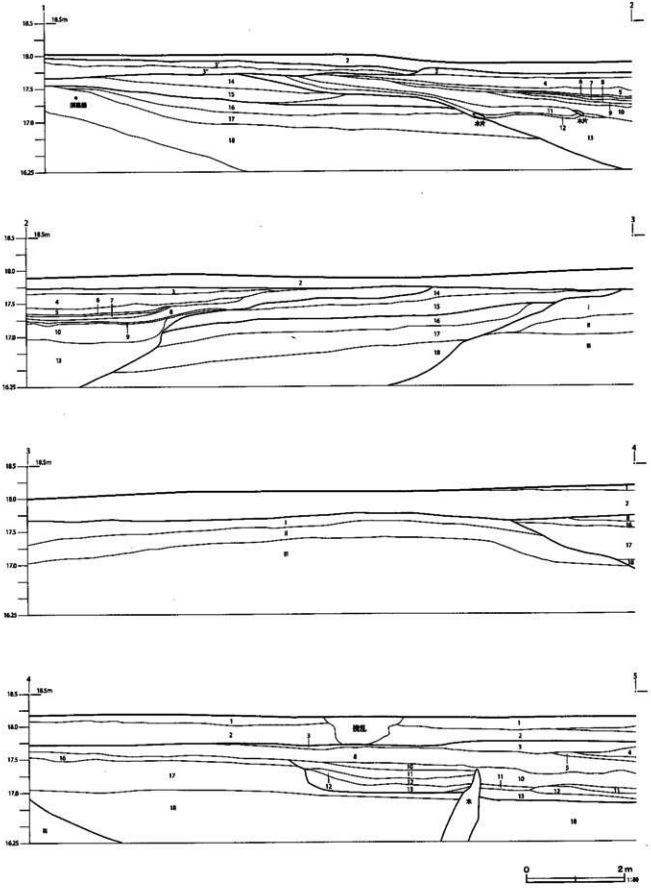
断面観察は、北側の調査範囲境界部分で延べ70ｍにおよぶ東西断面を記録した。覆土は自然堆積による。断面は大きく時代によって５区分の堆積層に分類できる。最も新しいのは中・近世、次に奈良・平安時代、さらに古墳時代中・後期、そして弥生時代後期～古墳時代前期、最後に弥生時代中期以前の堆積層である。

中・近世の堆積層は、第１・２層であり水田耕作土である。第２層下面は水田の床土である。

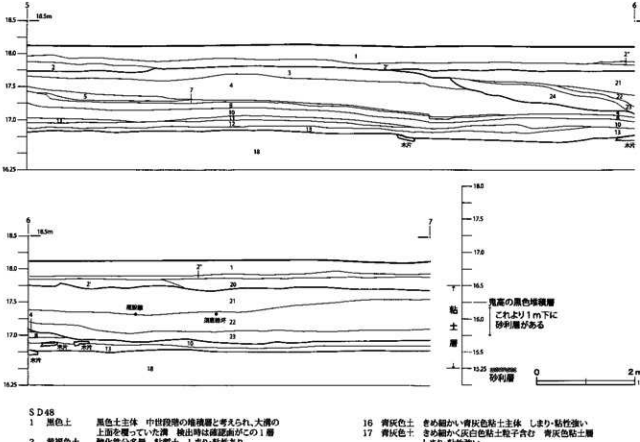
奈良・平安時代の堆積層は、東側の第21～24層である。黒灰色土を主体とする。覆土中の第22層



第399図　第48号溝跡全体図（1）



第400図　第48号溝跡全体図（2）



SD48
1　黒色土　黒色土主体　中世段階の堆積層と考えられ、大溝の上面を覆っていた流　検出時は確認面がこの1層
2　黄褐色土　酸化鉄分多量　粘質土　しまり・粘性あり
2'　黄褐色土　2層に比べ、黒褐色上多量　酸化鉄分層
2"　黄褐色土　2層に近似　酸化鉄分層
3　黒灰色土　酸化鉄分粒子含む
3'　黒灰色土　砂粒子・酸化鉄分粒子多量
3"　黒灰色土　砂粒子・酸化鉄分粒子多量
4　黒灰色土　酸化鉄分粒子・砂・黒灰色粘土粒子含む　しまり・粘性ややあり
5　青灰色土　青灰色粘土・砂粒子多量　砂質層
6　暗青灰色土　黒色炭化物粒子・砂質層　しまり・粘性強い
7　黒灰色土　黒灰色粘土主体　砂含む　しまり・粘性ややあり
8　暗青灰色土　黒色炭化層・青灰色砂層　しまり・粘性強い
9　黒褐色土　青灰色粘土粒子・砂少量　粘質土　しまり・粘性やや強い
10　黒褐色土　青灰色粘土粒子・砂・木片粒子含む　粘質土　暗いしまり・粘性ややあり
11　黒褐色土　青灰色粘土粒子・砂含む　木片多量　粘質土しまり・粘性あり
12　黒褐色土　青灰色粘土粒子・砂・木片含む　粘質上しまり・粘性あり
13　黒褐色土　青灰色粘土粒子・砂・炭化粒子含む　粘質土しまり・粘性強い
14　暗青灰色土　青灰色粘土半体　やや暗い　しまりややあり　粘性あり
15　暗青灰色土　青灰色粘上主体　暗い　しまりややあり　粘性あり
16　青灰色土　きめ細かい・青灰色粘土主体　しまり・粘性強い
17　青灰色土　きめ細かく灰白色粘土粒子含む　青灰色粘土層しまり・粘性強い
18　青灰色土　きめ細かく灰白色粘土粒子含む　青灰色粘土層　やや明るいしまり・粘性強い
19　青灰色土　きめ細かく灰白色粘土粒子含む　青灰色粘土層　明るいしまり・粘性強い
20　黒褐色土　黒褐色土多量　酸化鉄分層
21　黒灰色土　黒灰色土主体　白色粒子・酸化粒子含む　しまり・粘性あり
22　黒灰色土　20層に比べやや暗灰色土　木片含む　しまりややあり粘性やや強い
23　黒灰色土　黄褐色粒子含み暗灰色土　白色粒子・炭化粒子含むしまり・粘性あり
須恵器坏の口縁部破片出土
24　黒灰色土　炭化粒子やや多い　暗灰色粘土粒子含む　しまり・粘性あり

SD48　地山層
Ⅰ　青灰色土　青灰色粘土主体　砂粒子含む　やや暗い　しまり・粘性あり
Ⅱ　青灰色土　青灰色粘土主体　砂粒子やや多い　やや暗いしまり・粘性あり
Ⅲ　青灰色土　青灰色粘土主体　砂粒子多量　やや暗いしまり・粘性ややあり

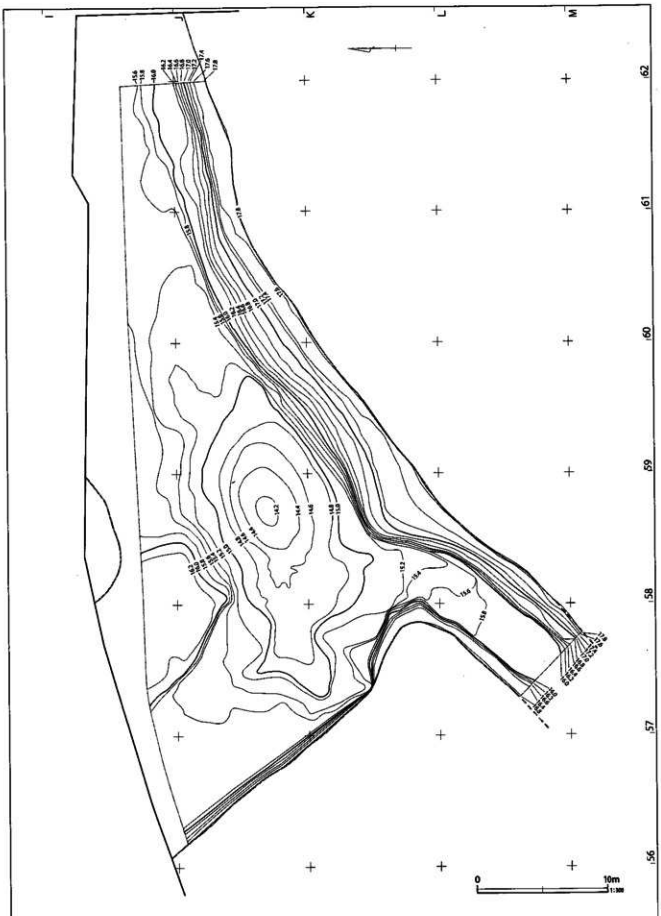
第401図　第48号溝跡全体図（3）

上面から須恵器坏、雁股鏃が出土した。

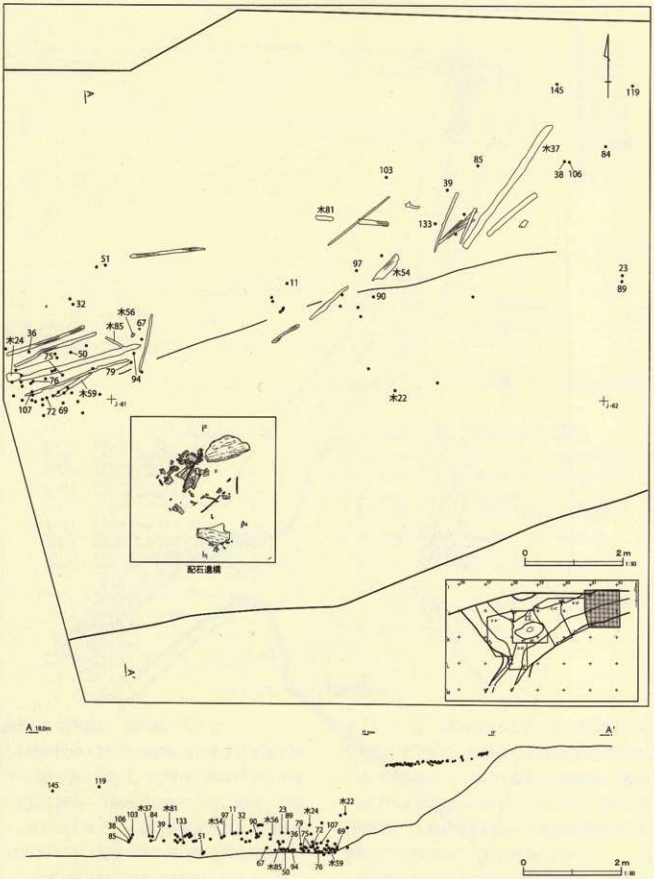
古墳時代中・後期の堆積層は、第3～8層と第10～13層である。第3～8層は、黒灰色土を主体とする。第3～5層は粘土質の土層に砂質土が混在している。第6・8層は砂質粘土層に炭化物が堆積している。間層の第7層は粘土質の砂質土が混在する。繰り返し起こる洪水砂と粘土質土砂が堆積している。第10～13層は、黒褐色土を主体とし、青灰色粘土粒子と砂粒を含む粘質土で木片を多く混在する。河川の流水などにより滞留し堆積した木くずである。木製品や土器などが混在する。

弥生時代後期～古墳時代前期の堆積層は、第14～18層である。青灰色粘土を主体とする。河川跡の堆積層で木製品や土器などの遺物を混在させる。堰跡はこの堆積層の中から検出された。

第18層を掘り下げると砂利層に達する。河川跡の河床面であるが、この砂利層の中からも土器片が多く出土する。河床面は、確認面から約2.50～

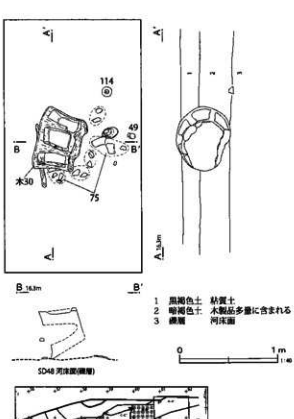


第402図　第48号溝跡等高線図



第403図　第48号溝跡遺物分布図（1）

第404図　第48号溝跡遺物分布図（2）



第405図　第48号溝跡遺物分布図（3）

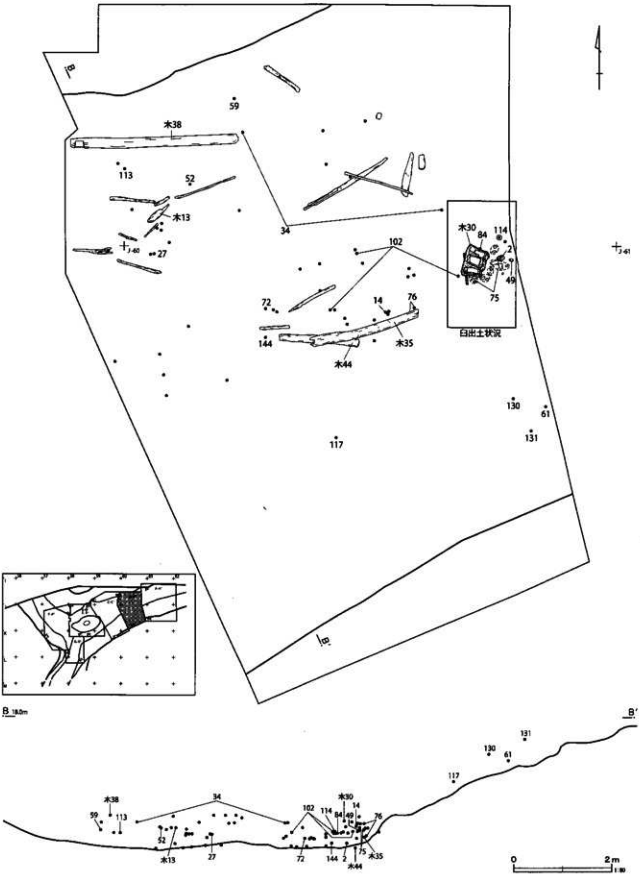
3.00m下がった地点である。

第48号溝跡は、Ⅰ－58グリッド付近で地山が露呈する。地山は、青灰色粘土層で、わずかに砂を混在させている。また、第79号溝跡との合流部では、河床面が大きく窪み、深くなっている。

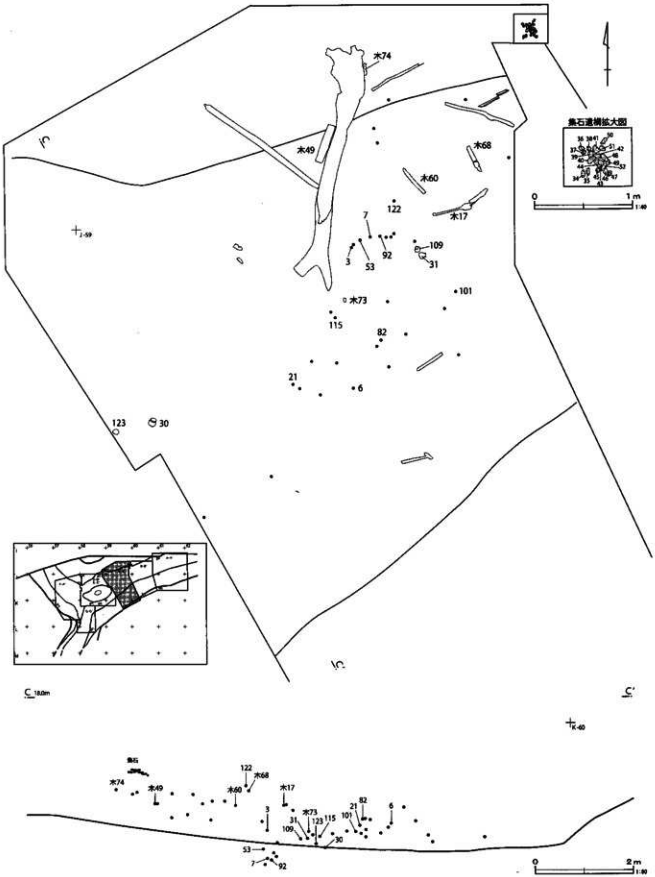
確認面での標高は18.00m、第79号溝跡との合流部分で15.20m、「Y」字状に分岐し、西側堰付近で15.00m、さらに北側のJ－57グリッド付近で16.00mである。一方の東側の窪んだ部分では14.20mと深く確認面からの比高差は3.80mである。さらに、東寄りのⅠ－61グリッド付近では、15.60mである。

溝跡の形態は、河床に砂利が厚く堆積することから河川跡と考えられる。北側は調査区外に伸びるが、J－60グリッド付近では、南側の壁面がかなりの急勾配で壁面の角度約30～40度、比高差2.60mである。

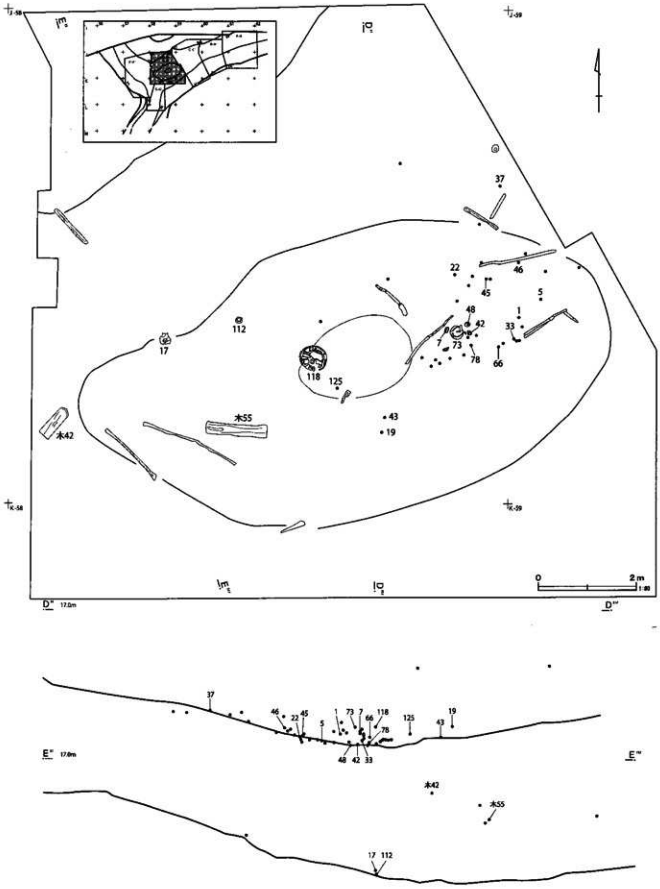
遺物の出土状況は、東側から見ていくと、J－61グリッド確認面から配石遺構を検出した。緑泥片岩の破片が散在し、棒状木製品や中央に円形の穴が開いた板状製品（第482図84）、さらにその傍らに人物埴輪の頭部（第421図153）が横たわった状況で出土した。この溝跡の肩部が埋まった段階の配石である。奈良・平安時代には、溝跡の中央部分が河道として機能していたと考えられることから、奈良・平安時代もしくはそれ以降の中世段階までの遺構である。近接した位置に奈良時代の住居跡が検出されていることから古墳跡からの廃



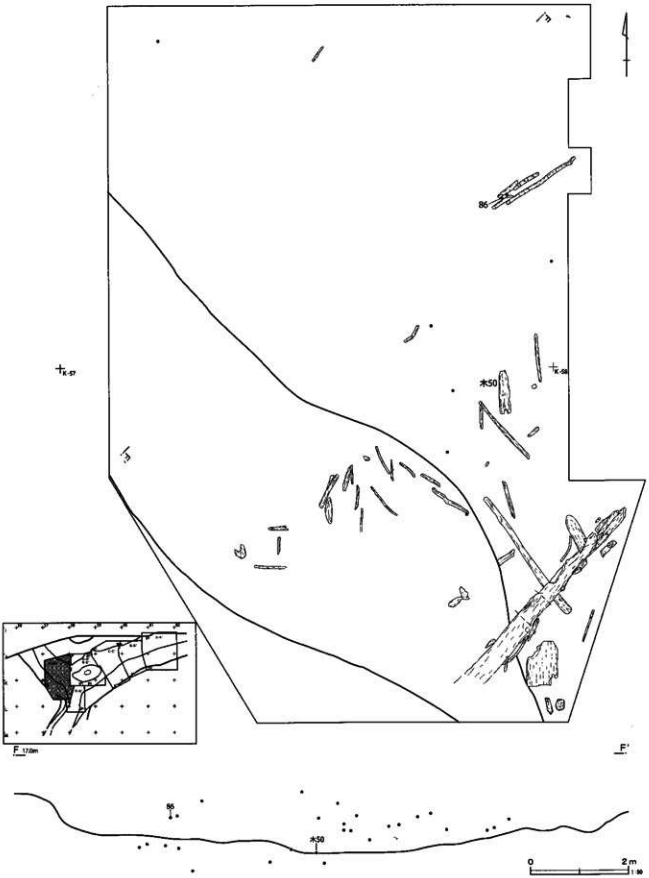
第406図　第48号溝跡遺物分布図（4）



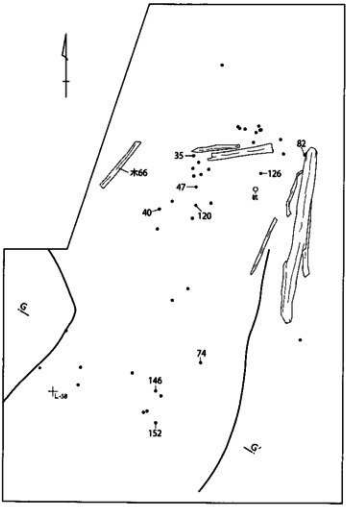
第407図　第48号溝跡遺物分布図（5）

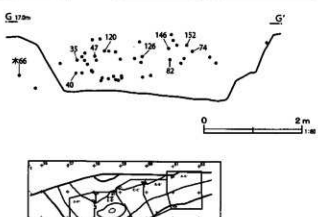


第408図　第48号溝跡遺物分布図（6）



第409図　第48号溝跡遺物分布図（7）





第410図　第48号溝跡遺物分布図（8）

棄物を河川付近に片づけたもので奈良時代の所産と考えたい。溝跡の河床付近から多くの土器、木製品が出土した。土器は古墳時代前期の壺・甕・高坏・装飾器台・器台・坩などである。また、吉ヶ谷系の土器が検出された。

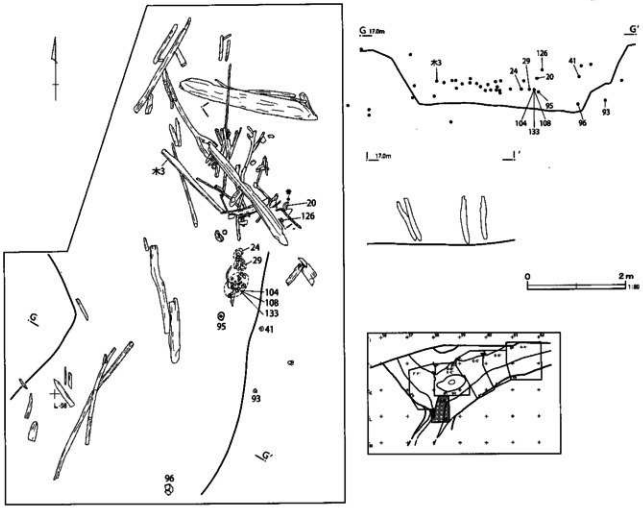
J－60グリッドからは砂利層の直上から木製臼を検出した。臼は横向きの状態で出土し、非常に残りがよくほぼ完形の状態である。周囲からは古墳時代前期の土器も共伴することからこの時期の臼と判断した。溝跡の肩部からは、第418図130・131の平瓦を検出した。河床面では、古墳時代前期の土器とともに第419図144の吉ヶ谷系の壺が出土している。木製品は木器第475図38・第477図44などの建築部材が出土している。

I・J－59グリッドの上面から大きさ10cm前後のぐり石が20個ほど集中している集石遺構を確認した。遺構の性格は不明である。また、河床面付近からは第412図3・6・7の壺の口縁や第413図30の丸底壺などが出土している。

J・K－58グリッドでは上層から第476図42・第479図55の木器が出土した。55は床材である。また、多くの土器を検出した。覆土やや高い位置からは、第412図1の複合口縁壺、第414図66・第415図73の甕、第417図118の大型壺を検出した。この他、河床面付近では、第413図48の鉢や42・43の坩も出土した。

K－57グリッドの第79号溝跡合流部付近からは、杭状の木製品を多く検出した。いずれも、流された状態であるが、この合流部付近に設置されていた施設の残骸の可能性がある。おそらくこの付近に堰跡のような土木灌漑施設があった可能性がある。

K－58グリッドにあたる合流部付近からは多くの土器や木製品が検出された。特に、覆土の上層からは、第418図120の須恵器蓋、



第411図　第48号溝跡遺物分布図（9）

126の赤彩が施された坏、さらに、第419図146の鉄製鎌が出土しており、古墳時代中期の遺物と判断される。この他、杭や先端がY字状の堰に使われる支保工などがあげられる。長尺の第470図3の木材も検出された。この付近に堰跡のような施設が存在していたと考えられる。これらは覆土やや下層からの出土であり、共伴する土器は、第412図20・24・29の壺底部や第413図40・41などの坩、第416図93・95・96・104などの高坏が出土しており、この付近一帯の遺物は古墳時代前期の物であることがわかる。

J－56・57、K－56・57グリッドにかけては、遺物の出土量が少なくなり遺物出土状況がこれまでの地点とは大きく異なっていた。特に、J－57グリッドでは、堰跡が検出され、堰跡の北側からの遺物出土が極端に減少した。溝幅がやや狭く、河床面も浅く、合流部の河床面よりも高い位置にある。

堰跡は、南面を正面として構築された構造になっている。これは、南側から流れ込む第79号溝跡からの水流を受けて、水圧を和らげ後背部に流す施設とみられる。また、水流の主方向を東側に変え、水量の多くを第48号溝跡に向け東流させるものと考えられる。

第48号溝跡出土遺物（第412～第521図）

出土土器について各説する。1～29は壺である。1・2・4は二重口縁の口縁部である。1・2は頸部から直立して立ち上がり、上部で水平に短く開き、その端部に口縁部を接合するものである。1は破片のため確実ではないが、二重口縁の上段部分の下位に径1㎝ほどの円形浮文が貼付されている。4は径が小さく、直立気味である。3・5～8・12は複合口縁を呈するものである。3は内面に段があり、二重口縁と複合口縁の中間の口縁部を持つものである。頸部から直立気味に立ち上がった端部の外側に分厚い幅広の粘土帯が貼付されている。5・7・8・10～12は口縁部の外側に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出すもので、5は口縁部が長めで器肉が薄く、7・8は口縁部が短めで厚いものである。5・10は複合部外面に指頭痕が良く残っている。10・11は小ぶりのものである。10の複合部は幅が狭い。11の複合部は薄く、12は分厚い。6・9は端部に粘土帯を2段継ぎ足すことによって複合部風に仕上げるものである。6は下の段が外側に出る形で複合部が表現されている。13は口縁部が短く、中位が厚みを持ち、短頸壺とでも言い得るようなものである。15は口縁部が短く、外反するもので、二重口縁の上段部分の可能性がある。14・18は単口縁のものである。いずれも頸部の屈曲が緩やかで、直線的に開いている。

16・18は東海地方東部系のものである。18は横ナデとナデ調整のみのもので、特異である。特に頸部内面にまで及ぶ横ナデが特徴的である。在地のものに比べて器肌がザラッとした感があり、搬入品である可能性がある。16は外面に刷毛目、内面に同様の横位のナデが施されている。頸部下位の外面にヘラによる太い沈線が入れられ、その下位は単節RLの粗い縄文が施されている。非常に焼成が良く、褐色で焼き締まり、胎土にパミス由来と思われる大粒の白色粒子を含む。搬入品と考えられる。

17・19～22は胴部下半から底部にかけてのものである。17は内面の中位にヘラ磨きが加えられている。19は底径16.4㎝で大型のものと考えられる。底面までヘラ磨きが施されている。20は底面が輪台状になっている。21は長胴になり、底部の外周に丁寧なナデが加えられていることから、岩鼻式のものであると考えられる。17・20・22は内外面に煤が付着している。

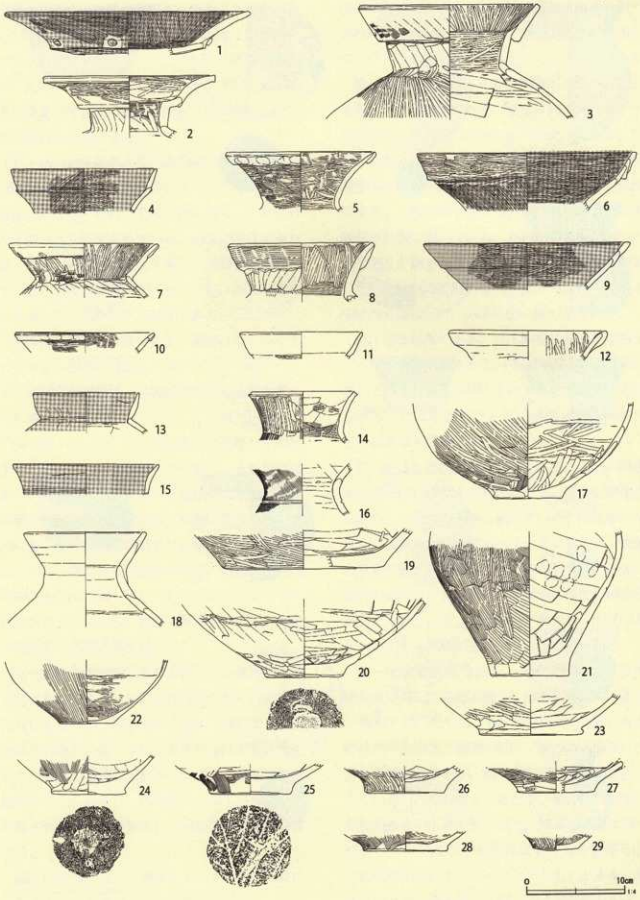
23～29は底部である。29の底部は突出する。23は胎土に3～8㎜の石英を多く含む。底面は24は輪台状になっており、25は木葉痕が残る。26・28・29はヘラ磨き、23・27はヘラケズリが施されている。29はやや小型である。

30～36・38・49～52は小型壺である。30～36・38は口縁部が長く、胴部が球形である。49～52は口縁部が短く胴部が長めである。49～51は底部が大きく、厚手である。

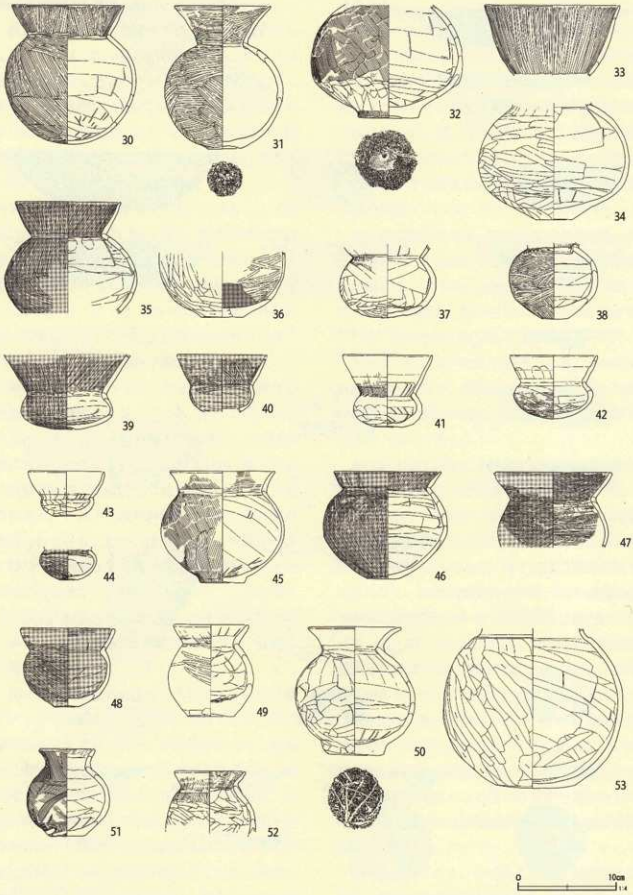
30～36・38は法量によりおよそ3つに分けられる。32～34がやや大型で扁平な球形胴、30・31・35・36が中型で球形胴、38は小型である。口縁端部が30は直線的、35は外反し、いずれも尖り気味になる。30は丸底である。31・33は口縁部が長く、31は外反し、33は内湾気味である。31の底面には木葉痕が若干残っている。32の底面は輪台状になっている。33・34は内外面に、35は外面に煤が付着する。36は内面に漆が付着し、漆パレットの可能性がある。31・36は胎土に片岩を含んでいる。

49～52は、鉢と区別がしにくいが、器高があり、頸部がしっかりしているものを小型壺とした。大型（50）のものと小型（49・51・52）のものがある。調整は刷毛目もしくはヘラナデを基本としている。50の底面には木葉痕が残る。50・51はほぼ完形である。

39～44は坩である。いずれも口縁部が直線的に長く、扁平な体部のものである。39はやや大型、43・44はやや小型である。41は径に対する器高の



第412図　第48号溝跡出土遺物（1）



第413図　第48号溝跡出土遺物（2）

比率が大きく、体部の調整もヘラケズリでやや新しい印象を受ける。口縁部はいずれも上位が横ナデにより若干内湾している。外面の調整は39・40・44がヘラ磨き、41・43がヘラケズリ、42が刷毛目後ナデである。底面は39が中央が凹むもので、それ以外は平坦である。

37・45～48は鉢である。球形胴に短い直線的な口縁部が「く」の字状に接合するものである。口縁部は47がやや長めで端部に面を持つ。それ以外のものは丸く収められている。45は刷毛目のみだが、それ以外はその上に丁寧なヘラ磨きが施されている。底部は45がやや大きく、46・48は小さめである。37はやや扁平な胴部である。

53は甕の胴部で丸底である。頸部は強いヨコナデである。胴部は外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。古墳時代後期のものと考えられる。

54～65・67～70・75・76は甕の口縁部から胴部上半である。口縁部は55・75が長く、それ以外は短い。屈曲が緩やかなものと直線的なもの、端部が更に外反するものがある。頸部の屈曲が弱いもの（54・60）は胴部の刷毛目も横位であることから、古い一群である可能性がある。端部は面を持つ59・60・64・69・75と、丸く収められているそれ以外に分けられる。頸部は基本的に「く」の字に屈曲し、内面に稜を持つ。

54～57は口縁端部にキザミ目もしくは押捺が施されるものである。54・57は左方向からの刷毛目工具による押捺、55は上から棒状工具による押捺、56は左方向からのヘラによるキザミ目が施されている。外面の調整は56がヘラナデである他は、外面斜め方向の刷毛目、内面横位の刷毛目後横ナデが施される。54は内外面に、56は外面に煤が付着する。

55は口縁部が長く、押捺も上からの棒状工具によるもので、岩鼻式のものと考えられる。

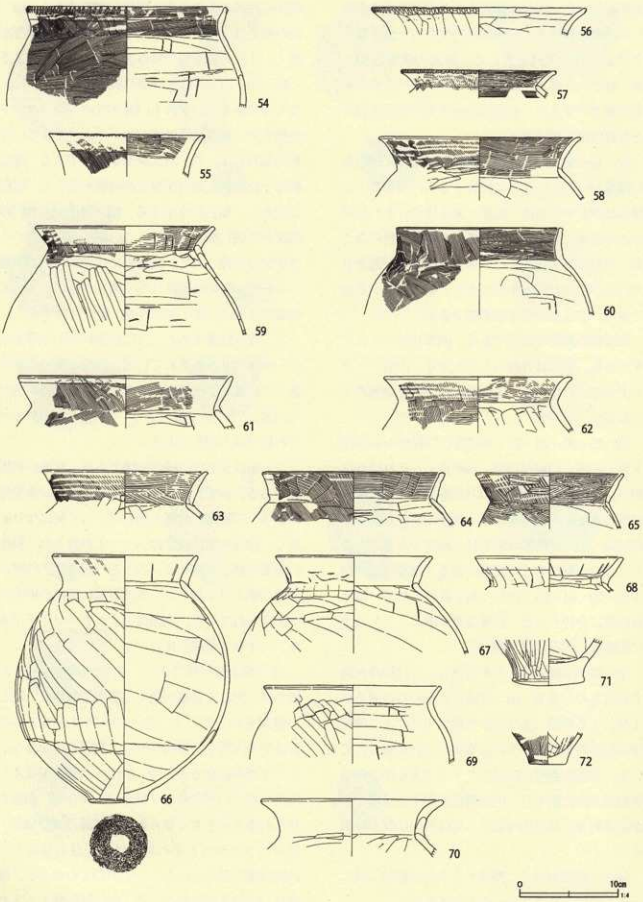
61～65・75・76は外面刷毛目調整のものである。端部に押捺があるものと同様の調整である。64・65の刷毛目は、太目のものである。75は口縁部が長く、3段の粘土帯の積み上げによるものである。

66～70・73・74は、外面の調整がヘラナデによるものである。いずれも口縁部は内外面ヘラナデ後横ナデ、胴部は内外面ともヘラナデである。全形の知れる66・73・74は胴部が長めである。66は胴部下位に粘土帯の明瞭な接合痕が見られ、底部は突出し、輪台状を呈する。73・74は66より口縁端部が外側に開いている。73の胴部下半は弱いヘラケズリが施されて、底面は2次加熱のため剥離している。74の外面にはヘラ磨きが施されている。68は内外面に、67・69は外面に煤が付着する。

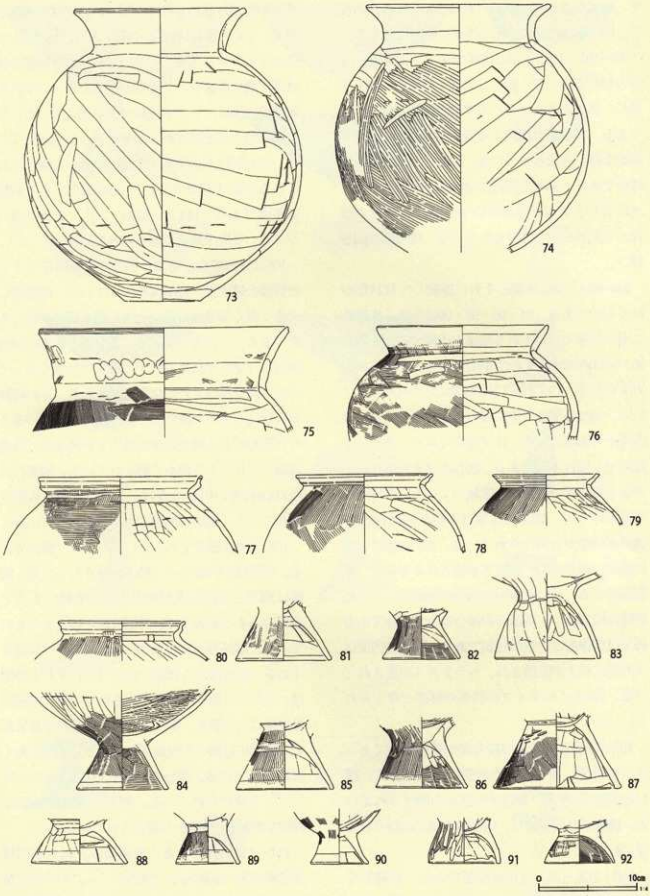
71・72は底部である。71は胴部外面から底面までヘラケズリが施されている。内面に厚く煤が付着している。弥生後期のものである可能性が感じられる。72は小型甕である。底面はヘラケズリ、それ以外は不明瞭である。

77～80はS字状口縁台付甕である。在地の模倣品である。いずれも在地の胎土で、厚手、重量感があり、口縁部の形態も崩れている。80は作りが良く、頸部内面に横位のヘラナデが施され、模倣の意識の高さが窺える。78・79の胴部は、外面に羽状の刷毛目が施され、77は肩部に横位の刷毛目が加えられている。内面はいずれもヘラナデである。いずれも焼成が良い。

81～92は脚台部である。大小が認められるが、概ね径に対して器高が低く、器肉も薄めで、新しい様相を示している。88～92は特に小型である。87はやや大型で、器肉が厚い。胴部の内面はヘラナデを基本とするが、82・84はヘラ磨きが加えられている。いずれもホゾ接合で、接合部に剥離が見られるものも多く見られる。外面の調整は83・88がヘラナデだがそれ以外は刷毛目を基本とし、内面は刷毛目のものとヘラナデのものがある。端部はいずれも面を持つ。81・88は胴部側から入れた臍の粘土が剥離しており、その部分に81は指ナ



第414図　第48号溝跡出土遺物（3）



第415図　第48号溝跡出土遺物（4）

デ、88はヘラナデが認められる。87・90は内外面に、83・84は内面に、85は外面に煤が付着する。

93～105・107・110は高坏である。93は唯一全形の知れるもので、軽い。大きく直線的に開く坏部に、高さのある「ハ」の字形の脚部が付くものである。坏端部は内傾する面を持ち、最下位に不明瞭な稜が表現されている。脚部との接合はホゾ接合である。脚部の天井には粘土が充填され、ヘラによりナデつけられている。径1.3cm程度の透穴が3孔外側から開けられている。脚端部は面を持つ。

94～99・102は坏部とそれに連続して柱状部が付くものである。94・96・98・99は大きく直線的に開く坏部で、いずれも端部が内傾する面を持つ。95・97は内湾するもので小型である。小型高坏と考えられる。いずれも口縁端部は丸く収められている。95は坏部の下位に緩い稜を持ち、太目の接合部から脚部に至る。ホゾ接合である。透穴は2箇所で、径は不明である。割れた後も使用されていようで脚部の割れ口が摩耗している。97は更に坏部が小さく、脚部には数は不明だが径1.0cmの透穴が外側から開けられている。101・102は一面に細かい横方向のヘラ磨きが施されるもので、精製品である。浅い直線的な椀形の坏部で、下位に明瞭な段を持つ。脚部との接合はホゾ接合である。脚部は直線的な中空の柱状である。脚部の内面は天井部に粘土が充填され、ヘラケズリが施されている。105もこのタイプの高坏の脚部と考えられる。

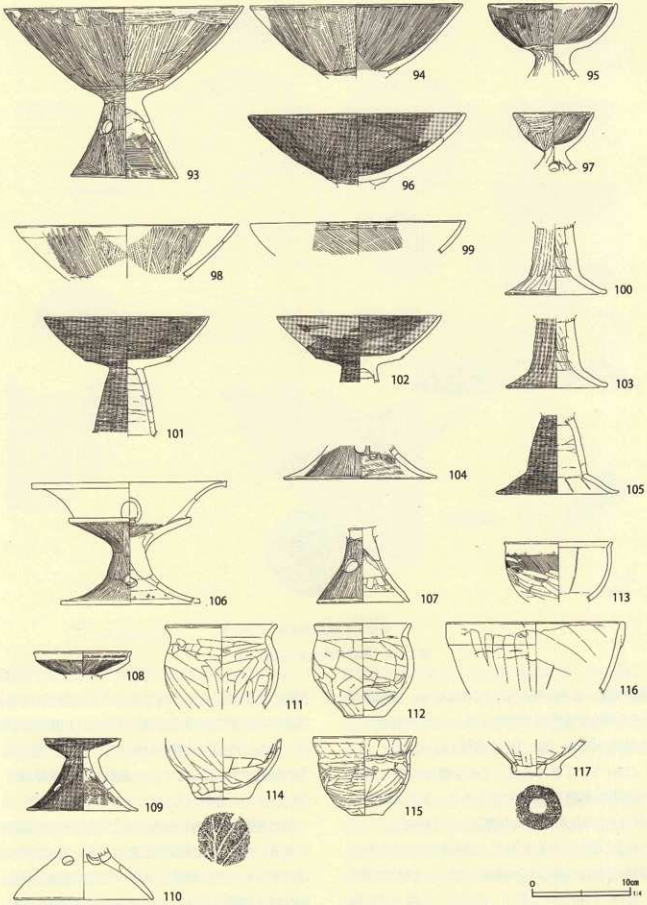
107は坏部と柱状部の接合部が残る脚部である。ホゾ接合で、臍をはめた状態で割れている。径1.5cm程度の透穴が3箇所外側から開けられている。脚端部は面を持つ。内面の上位には絞り目が見られる。

100・103～105・110は脚部である。直線的で「ハ」の字状のもの(110)と裾が大きく開くもの(104)、柱状のものがある。100・103・105は直線的な中空の柱状のもので、短いハの字状の裾部が付く。100・103は脚部の内面に絞り目が見られ、その上にナデを加えている。105は101と同様の柱状部で横位の密なヘラ磨きが施される。いずれも裾部の内面はヘラナデ後横ナデを加えている。天井部に粘土が充填され、ヘラケズリが施されている。104は径1.1cm程度の透穴が外側から開けられているが数は不明である。110は風化により調整は不明である。径1.2cm程度の3孔、2段の透穴が3孔、2段千鳥状に開けられている。

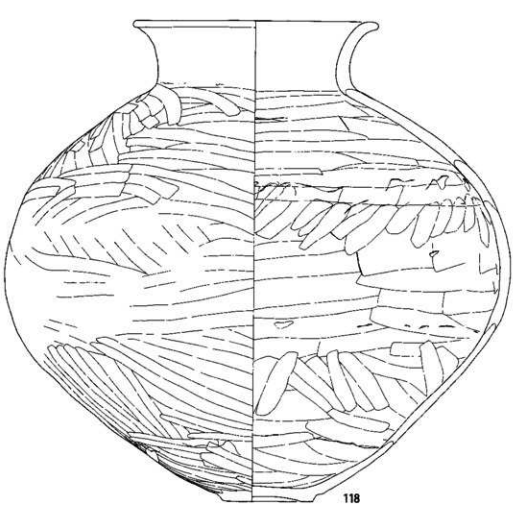
106は装飾器台である。器受部の鍔の部分までと脚部の破片で、裾端部を欠いている。直線的に大きく開く器受部に裾が大きく開く脚部が付くものである。ホゾ接合である。器受部と脚部の接合箇所には穿孔が認められず、中実で分厚くなっている。器受部はきれいに剥離しており、その痕跡から形は不明だが透穴が4箇所開けられているものと思われる。鍔の端部は横ナデが施され、外面は細い工具により細かく磨かれている。脚部には径1.0cm程度の円形の透穴が4孔、外側から開けられている。脚部の内面はナデが施されている。

108・109は器台である。いずれもホゾ接合である。器受部の内面もヘラ磨きが施されている。脚部は両者とも浅い直線的な器受部を持つもので、端部のみをつまみ上げ、外周に面を持たせるものである。端部外面は108が横ナデ、109がヘラ磨きである。器受部から脚部にかけて、いずれも外面はヘラケズリ後ヘラ磨きが施されている。内面は器受部はヘラ磨き、脚部はナデ後刷毛目が施され、更に端部には横ナデが施されている。端部は丸く収められている。接合部の穿孔は径1.2cmでヘラによって開けられている。脚部の透穴は径1.0cm程度で3箇所、外側から開けられている。

111～115は鉢である。前掲の37・45～48同様、球形胴に短い直線的な口縁部が「く」の字状に接合するものだが、こちらの方が分厚く、調整がヘラケズリ、もしくはヘラナデである。113は口縁



第416図　第48号溝跡出土遺物（5）



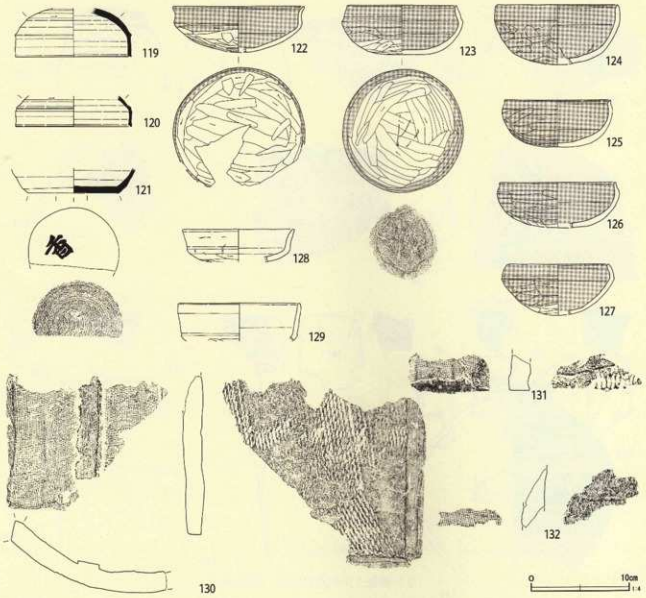
第417図　第48号溝跡出土遺物（6）

部が短く、器高が低いもので埦に近い。口縁部は、115が長めで指頭痕が明瞭に残る。114の底面には木葉痕が残る。112・115は完形に近い。

116・117は甑である。116は複合口縁を呈し、内外面の調整はヘラナデである。117は底部で、径2.0cmの単孔が内側から開けられている。

118は超大型の壺である。球形胴に直立する口縁部が付き、器肉は全体的に分厚く、底部は突出しない。口縁部は分厚く、内外面とも横ナデが施されている。胴部の外面には焼成前にひび割れを補修した痕跡がある。内外面ともヘラナデである。底面には木葉痕が残る。内外面とも二次加熱を受けており、内面には煤が付着する。出土状況も完形の状態であったことから、破損前に二次焼成を受けたものと思われる。

第418図は古墳時代後期および奈良時代の遺物である。119・120は須恵器蓋である。119は天井部に張りを持ち口縁部が内湾し内側に沈線が巡る。陶邑TK47段階である。120は口縁部が内傾し外反する。陶邑MT15段階である。121は奈良時代中葉



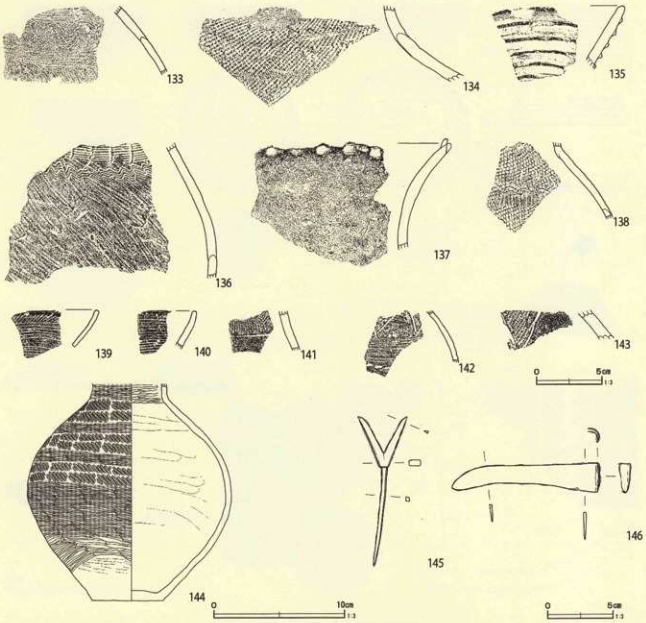
第418図　第48号溝跡出土遺物（7）

段階の南比企産の須恵器坏である。底部外面に「香」の墨書が見られる。130～132は平瓦である。凹面には布目が見られ模骨痕が残る。凸面は縄叩きが施されている。奈良時代前半の瓦である。

第419図には、破片の内代表的なものを図化した。弥生時代中期から古墳時代前期のものが含まれる。133・134・138・141・142は古墳時代前期の壺である。133・142は東海地方西部の壺に施文される櫛描文様、パレス文様が施文されている。138は東海地方東部のものである可能性がある。134・144は吉ヶ谷系の壺である。136・137・143は弥生土器である。136は岩鼻式の壺、137は宮ノ台式の甕、143は宮ノ台式の壺である。139・140は古墳時代前期のもので、パレス文様が施されている。破片のため確実ではないが、瓢壺、もしくは小型高坏の坏部と考えられる。

133は球胴形を呈する壺の胴部である。櫛描直線文と櫛描波状文を交互施文している。また、ハケ調整が行われている。134は壺の頸部から胴部にかけてである。ＲＬ単節縄文を連続施文している。

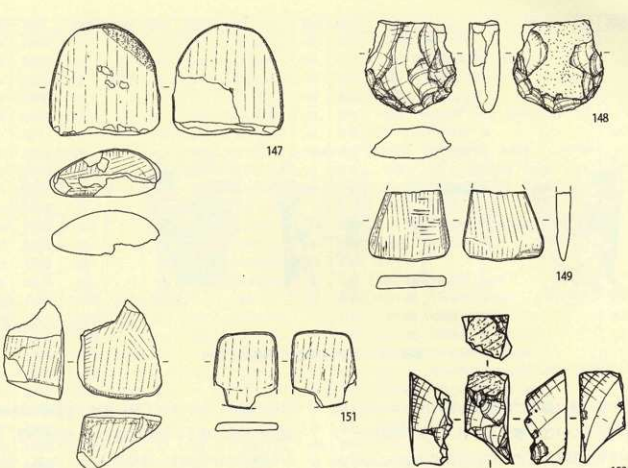
135は直線的に外反する吉ヶ谷式土器の壺の口



第419図　第48号溝跡出土遺物（8）

縁部である。貼付突帯を5段設けている。口唇部を赤彩している。136は甕の胴部である。櫛描簾状文とその下に櫛描波状文を施文している。胴部はハケ調整が行われている。内面にもハケ調整が行われている。137は大きく外反する甕の口縁部である。口端部は工具による押捺を廻らしている。口縁部以下は無文である。内面にハケ調整が残る。138は球胴形を呈する。S字状結節文2段を挟んでLR単節縄文を施文している。139・140は甕形の壺の口縁部である。ハケ状工具による斜位の刺突と直線文、山形文を施文している。141は壺の頸部である。沈線区画内にRL単節縄文とLR単節縄文を施文している。142は球胴形を呈する壺の胴部である。ヘラガキの山形文とその下に櫛描直線文を施文している。143は壺頸部である。下向きの鋸歯文を施文しRL単節縄文を充填している。無文部に赤彩痕跡が認められる。

144は吉ヶ谷系の壺である。やや長めの球形胴に屈曲の弱い頸部から直立する口縁部に至るものである。底部は突出せず、円板状である。見込みの中心が盛り上がり、その周囲は強くナデられている。胴部上半に単節RL2段の文様帯が3段施



第420図　第48号溝跡出土遺物（9）

文されている。文様帯の間はヘラ磨きが施され、赤彩されている。ヘラ磨きが縄文の上に施されている。

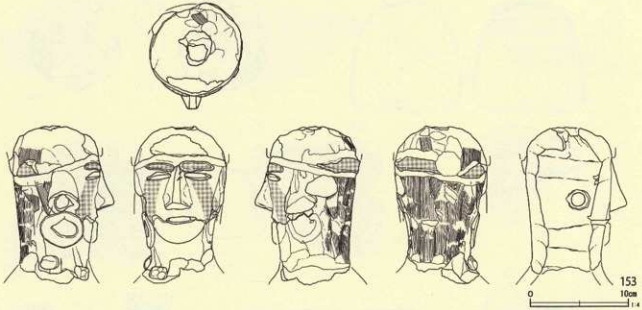
145は鉄製雁股鏃である。鏃の先端部は、Y字状の形態である。基部は断面方形で細い。第1・2次調査の第3号溝跡からも鉄製雁股鏃が三本出土している。その際、周囲から「神矢」・「弓」と墨書された須恵器坏が検出されたことから河川祭祀に伴う鏃と見られている。

今回の第3次調査で、検出された雁股鏃は、奈良・平安時代の堆積層から出土していることから、前回の調査と同じ性格の所産と考えられる。

146は鉄製鎌である。鎌は、刃部がやや磨り減った柄に装着する部分はL字状にわずかな折り返しが見られる。

147～152は出土した石製品である。152は黒曜石を石材とする石核である。玉作関連の遺物が出土する古墳時代前期の住居跡からも、黒曜石の剥片が出土しており、黒曜石が玉作に関連する石材である可能性が考えられる。

153は配石遺構から単独で出土した男子人物埴輪の頭部である。頸部より下側を欠損する。頭部には鉢巻き状の被り物をつけていたと推定されるが、剥落のため詳細は不明である。頭頂部には円形の透孔が開いている。平らな顔面で、下顎を欠損する。目は細長く切り込まれ、眉はわずかに隆



第421図　第48号溝跡配石遺構出土遺物

起する。鼻は鼻梁に平坦面を作り出している。側面のナデつけは丁寧であるが、口側下端のナデつけはやや粗雑である。鼻孔の表現はない。口は大きく真一文字に開けられる。耳は円孔を穿孔し、下端に接するように大きめの耳環を貼付する。剥落しているが、耳孔および耳環を隠すように美豆良を貼付していたようである。頸部には空豆形の頸飾りを貼付しており、2個のみを残す。本来は6個ほど貼付していたものと考えられる。後頭部は目の細かいハケメを丁寧に施す。内面には粘土紐痕が明瞭に残る。赤彩は被り物と顔面の眉、目から頬にかけて施す。残存高16.0cm。なお、今回調査した古墳からは本例に類似した人物埴輪は検出されていない。おそらく周辺の未知の古墳に樹立されていたものが、二次的に廃棄されたものであろう。緑泥片岩を意図的に敷き詰めた場所から、埴輪が出土した意味を明らかにすることは至難であるが、古墳以外の埴輪出土例として興味深い。

第170表　第48号溝跡出土遺物観察表（第412～420図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(24.8)	4.4	－	BHIJM	20	良好	にぶい黄橙	赤彩　円形浮文　№317	
2	土師器	壺	17.6	6.3	－	ABHIJM	70	良好	にぶい黄橙	外面黒斑　№60	
3	土師器	壺	18.0	11.8	－	ACHJ	70	普通	にぶい黄	外面黒斑　№284　SD48・79	91-3
4	土師器	壺	(15.0)	4.5	－	BEHI	5	良好	にぶい黄橙	赤彩	
5	土師器	壺	(15.2)	6.1	－	BEHIJM	30	良好	にぶい黄橙	外面黒斑　№321	
6	土師器	壺	(22.4)	5.9	－	EHIJ	25	良好	にぶい黄橙	赤彩　№252	
7	土師器	壺	(15.2)	5.6	－	CEHIJM	50	良好	にぶい橙	黒斑　№281・331	
8	土師器	壺	(14.5)	6.0	－	CEHI	20	良好	にぶい黄橙	J61G	
9	土師器	壺	(21.1)	4.8	－	CEHIJ	10	良好	にぶい橙	赤彩　煤付着	
10	土師器	壺	(14.1)	2.1	－	EHI	10	良好	にぶい橙		
11	土師器	壺	(12.4)	2.7	－	CJ	10	良好	にぶい橙	№24	
12	土師器	壺	(15.8)	3.0	－	BEH	25	良好	灰黄	外面黒斑　SD48・79	
13	土師器	壺	(10.9)	4.2	－	ACI	20	普通	浅黄	赤彩　外面煤付着	
14	土師器	壺	(10.6)	5.3	－	ACHIJ	40	良好	橙	№123	
15	土師器	壺	(15.0)	3.1	－	EHIJ	10	良好	にぶい黄橙	赤彩　SD48・79	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
16	土師器	壺	—	5.5	—	BCHI	20	良好	にぶい褐	風化	
17	土師器	壺	—	9.8	6.8	HIJM	60	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№334	
18	土師器	壺	(12.0)	9.6	—	CHIM	40	普通	浅黄	SD79合流部	
19	土師器	壺	—	4.0	(16.4)	EHI	30	普通	灰黄褐	№273	
20	土師器	壺	—	8.0	(8.0)	CEHJM	30	普通	浅黄	輪台状　№429　SD79合流部	
21	弥生	壺	—	14.7	8.0	BGHIJ	80	普通	にぶい黄橙	外面黒斑　堰	80-7
22	土師器	壺	—	6.5	5.6	ACEHIM	50	普通	灰黄褐	内外面煤付着　№315	
23	土師器	壺	—	4.1	10.7	ABEHI	75	普通	淡黄	石英多　外面黒斑　№172	
24	土師器	壺	—	4.0	7.6	AEH	80	良好	にぶい黄橙	外面黒斑　輪台状　№408	
25	土師器	壺	—	3.1	8.3	BHIM	70	普通	橙	木葉痕	
26	土師器	壺	—	2.2	8.1	EHI	100	良好	にぶい橙	外面黒斑　SD48・79	
27	土師器	壺	—	3.2	(8.0)	CEHIJ	30	普通	灰黄	外面黒斑　№237	
28	土師器	壺	—	2.0	8.6	BCHJM	50	良好	にぶい橙		
29	土師器	壺	—	1.6	4.6	BCHIJM	90	良好	にぶい黄橙	外面黒斑　№407	
30	土師器	小型壺	11.5	14.0	—	BHIM	95	良好	にぶい橙	外面黒斑　№285	94-8
31	土師器	小型壺	(9.8)	14.5	3.4	BCHIM	95	普通	にぶい橙	木葉痕　№275	94-7
32	土師器	小型壺	—	11.5	6.2	ACEHI	90	普通	にぶい橙	外面黒斑　輪台状　№7	
33	土師器	小型壺	(13.9)	7.7	—	ACHI	25	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　№306	
34	土師器	小型壺	—	11.8	3.7	CEHI	80	普通	にぶい橙	内外面煤付着　№112・138	
35	土師器	小型壺	11.8	11.3	—	BCHM	60	良好	にぶい黄橙	赤彩　外面煤付着　№347	
36	土師器	小型壺	—	6.7	(4.3)	BCIJ	25	良好	にぶい褐	内面漆付着　黒斑　№217	
37	土師器	鉢	—	7.4	—	CEHIJM	60	良好	灰黄	黒斑　№287	123-8
38	土師器	小型壺	—	7.7	2.8	BCHIJM	100	良好	にぶい橙	№75	
39	土師器	坩	—	7.7	1.8	ACIJ	50	普通	にぶい黄橙	赤彩　№78	
40	土師器	坩	—	5.4	—	CGHIJ	25	良好	浅黄橙	赤彩　№366	
41	土師器	坩	(9.2)	7.3	2.8	ABCEJ	60	良好	灰黄	黒斑　№431　SD48・79	138-7
42	土師器	坩	8.9	6.4	—	EHI	100	良好	にぶい橙	外面黒斑　№328	138-8
43	土師器	坩	7.7	4.5	2.8	ACEHI	80	普通	にぶい黄橙	№295	138-9
44	土師器	坩	—	3.1	1.3	AHI	100	普通	灰黄	赤彩　SD79合流部	
45	土師器	鉢	(10.8)	11.3	4.6	BCIJM	30	良好	橙	№314	
46	土師器	鉢	(11.0)	10.9	3.3	CHIJM	75	普通	にぶい黄橙	赤彩　黒斑　№311	124-1
47	土師器	鉢	(11.8)	7.6	—	ACEHI	25	普通	にぶい橙	赤彩　№354	
48	土師器	鉢	9.6	8.0	3.7	CEIJ	95	普通	にぶい黄橙	赤彩　黒斑　№329	124-2
49	土師器	小型壺	(7.5)	9.3	(4.8)	EHIJ	50	普通	灰黄褐	風化　№59	95-1
50	土師器	小型壺	(9.5)	13.0	5.8	CEHIM	90	良好	にぶい黄橙	木葉痕　№205	95-2
51	土師器	小型壺	5.5	8.8	3.7	BEIJM	95	良好	にぶい黄橙	外面黒斑　№94	95-3
52	土師器	小型壺	(7.3)	6.3	—	BEGIJ	90	良好	にぶい黄橙	№186	
53	土師器	甕	—	16.2	8.1	GHJ	90	良好	灰褐	外面黒斑　№282	
54	土師器	甕	(20.7)	10.3	—	AEM	25	良好	にぶい橙	内外面煤付着　SD48・79	
55	土師器	甕	(15.9)	4.3	—	EHI	20	普通	にぶい橙	SD48・79	
56	土師器	甕	(21.6)	2.8	—	CEHI	20	良好	灰黄褐	外面煤付着　SD79合流部	
57	土師器	甕	(15.9)	2.8	—	EI	20	良好	灰黄褐	黒斑　№406	
58	土師器	甕	(20.2)	6.4	—	CEHI	25	良好	にぶい黄橙	外面煤付着　砂利層	
59	土師器	甕	(18.0)	11.1	—	ACHIJ	20	良好	褐灰	№139	
60	土師器	甕	(17.0)	8.9	—	AEHI	25	良好	灰黄	一括	
61	土師器	甕	(21.6)	5.4	—	BEGI	10	普通	褐灰	外面煤付着　№14	
62	土師器	甕	(18.9)	5.7	—	CEGHJ	20	良好	灰黄褐	SD79合流部	
63	土師器	甕	(17.0)	4.9	—	EHIM	25	良好	褐灰	SD79合流部　SD48・79	
64	土師器	甕	(18.6)	5.4	—	BEGHI	20	普通	灰	煤付着　SD48・79	
65	土師器	甕	(14.9)	5.6	—	CHIM	25	良好	にぶい黄橙	煤付着　SD48・79	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
66	土師器	甕	14.7	25.3	6.0	CHJM	50	良好	にぶい黄橙	煤付着 輪台状 №293・294	115-3
67	土師器	甕	(15.6)	10.0	—	CEHIJM	30	良好	にぶい黄橙	外面煤付着 №208	
68	土師器	甕	(15.2)	3.6	—	BEHI	25	良好	浅黄	内外面煤付着 SD79合流部	
69	土師器	甕	(17.7)	8.0	—	IJM	10	良好	灰黄褐	外面煤付着 №102	
70	土師器	甕	(18.4)	5.9	—	BEIM	20	良好	灰黄	SD48・79	
71	土師器	甕	—	4.8	7.4	ACEHI	60	良好	褐灰	内面煤付着 №403	
72	土師器	小型甕	—	3.3	3.7	CEHI	60	普通	にぶい黄橙	外面黒斑 №104・134	
73	土師器	甕	17.3	29.9	7.7	CEHI	90	良好	にぶい橙	内面煤付着 №444	115-4
74	土師器	甕	18.7	25.3	—	ACEM	60	良好	にぶい橙	外面黒斑 №368	
75	土師器	甕	25.3	10.8	—	CHIJM	30	普通	にぶい橙	№54・58・199・203	
76	土師器	甕	(17.3)	11.8	—	CEHI	30	普通	にぶい橙	№119・120・228	
77	土師器	台付甕	—	7.8	—	CEGHI	20	良好	にぶい黄橙	S字甕 SD48・79	
78	土師器	台付甕	(14.0)	8.1	—	AEI	20	良好	にぶい黄橙	S字甕 外面煤付着 №302	
79	土師器	台付甕	(10.9)	5.2	—	AEI	25	良好	にぶい黄橙	S字甕 外面煤付着 №207	
80	土師器	台付甕	(12.9)	4.0	—	EHI	20	良好	灰黄褐	S字甕 SD48・79	
81	土師器	台付甕	—	6.1	(9.8)	BCEG	75	普通	にぶい橙		
82	土師器	台付甕	—	5.2	8.1	BHIJM	95	良好	にぶい橙	№250・398	
83	土師器	台付甕	—	8.7	(10.7)	BCEHI	50	良好	灰黄褐	胴部内面煤付着 SD48・79	
84	土師器	台付甕	—	10.2	(9.4)	CHIJM	50	良好	灰褐	内外面煤付着 №33・73・131	
85	土師器	台付甕	—	6.7	(10.0)	BCEI	70	普通	にぶい褐	外面煤付着 №76	
86	土師器	台付甕	—	7.2	(9.5)	BHIJM	50	良好	灰黄褐	№69	
87	土師器	台付甕	—	7.2	13.2	BCHIJ	90	良好	灰黄褐	内外面煤付着	
88	土師器	台付甕	—	4.5	(9.9)	ACEHIM	60	普通	にぶい黄橙	№377	
89	土師器	台付甕	—	4.8	6.1	HIJM	70	普通	にぶい褐	№72	
90	土師器	台付甕	—	5.6	5.9	CHIJ	90	良好	にぶい黄橙	内外面煤付着 №4	
91	土師器	台付甕	—	4.6	7.3	BCHIJ	100	良好	にぶい黄橙	SD48・79	
92	土師器	台付甕	—	4.3	7.2	AI	90	良好	橙	№280	
93	土師器	高坏	24.5	17.4	10.9	EHI	75	普通	にぶい橙	三孔 №432 SD79合流部	131-4
94	土師器	高坏	(21.7)	7.3	—	BCEHI	25	良好	灰黄褐	№54・221	
95	土師器	高坏	13.0	7.4	—	ACHIJ	75	良好	にぶい黄橙	№405	
96	土師器	高坏	21.7	7.3	—	EHIJ	75	良好	にぶい橙	赤彩 黒斑 SD79合流部	
97	土師器	高坏	8.3	5.9	—	BCHIJ	90	良好	にぶい黄橙	№83	
98	土師器	高坏	(23.0)	5.4	—	EM	10	普通	にぶい黄橙	内面煤付着	
99	土師器	高坏	(22.0)	3.3	—	CEHI	5	普通	にぶい橙		
100	土師器	高坏	—	8.9	11.9	ACEHI	95	良好	にぶい黄橙	SD79合流部	
101	土師器	高坏	16.9	12.2	—	HIJ	70	普通	灰黄	赤彩 №276	
102	土師器	高坏	16.8	6.8	—	CHIJM	50	普通	にぶい橙	赤彩 №33・117・128	
103	土師器	高坏	—	7.1	10.4	CEHIM	95	良好	にぶい黄橙	赤彩 №81	
104	土師器	高坏	—	3.4	(15.6)	HI	20	良好	にぶい黄橙	№406	
105	土師器	高坏	—	8.0	12.6	HIJ	90	良好	にぶい黄橙	赤彩 SD48・79	
106	土師器	装飾器台	—	8.7	—	ACEHIJ	60	良好	にぶい黄橙	脚部四孔 №74	
107	土師器	高坏	—	7.1	9.5	AHI	60	普通	にぶい橙	三孔 №229	
108	土師器	器台	10.0	2.6	—	AHI	95	良好	にぶい褐	外面黒斑 №406	
109	土師器	器台	7.9	7.3	11.4	CEHI	95	普通	橙	赤彩 三孔 №274	136-4
110	土師器	高坏	—	5.2	14.2	CHI	20	不良	橙	風化 三孔二段	
111	土師器	鉢	(11.3)	8.6	—	CGHIJ	25	良好	黄灰	外面黒斑 SD79合流部	
112	土師器	鉢	9.7	9.5	4.4	CEG	95	良好	浅黄	外面黒斑 №333	124-3
113	土師器	鉢	(11.1)	6.6	—	EIJM	20	良好	灰黄褐	№243	
114	土師器	鉢	—	6.2	5.5	EHIJM	90	良好	浅黄	木葉痕 №62	
115	土師器	鉢	10.5	8.0	3.4	BCEHIJM	95	良好	にぶい黄橙	№255	124-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
116	土師器	甑	(18.2)	7.3	—	CEIJM	10	普通	にぶい橙	外面黒斑	
117	土師器	甑	—	3.6	4.8	EHIJM	80	普通	浅黄	№18	
118	土師器	壺	24.7	49.0	9.3	CEIM	60	良好	にぶい橙	木葉痕　内面煤付着　№445	91-1
119	須恵器	蓋	(11.9)	4.9	—	IK	20	良好	灰白	外面自然釉　№23	
120	須恵器	蓋	(11.9)	3.1	—	IK	10	良好	黄灰	№348	
121	須恵器	坏	—	2.5	9.3	CEIJ	60	普通	灰黄	墨書「香」	147-4
122	土師器	坏	13.4	4.7	—	CEHIM	75	良好	にぶい黄橙	赤彩　№11	145-8
123	土師器	坏	11.2	5.0	—	CHIJM	100	良好	にぶい橙	赤彩　木葉痕　№286	145-9
124	土師器	坏	(12.4)	6.0	—	CHI	25	良好	にぶい黄橙	赤彩　№309	
125	土師器	坏	10.9	4.8	—	EHIJM	75	良好	にぶい黄橙	赤彩　№19	145-10
126	土師器	坏	11.9	4.6	—	HIM	60	良好	にぶい黄橙	赤彩　№355・430	146-1
127	土師器	坏	(10.2)	5.1	—	CHIJM	25	良好	灰黄褐	赤彩	
128	土師器	坏	(11.5)	3.3	—	CEHI	25	普通	にぶい橙	SD48・79	
129	土師器	坏	(12.6)	3.9	—	CEHI	10	良好	橙	砂利層	
130	瓦	平瓦	長さ17.1	幅15.8	厚さ2.0	EIK	30	普通	灰	模骨痕　№13	148-3
131	瓦	平瓦	長さ4.0	幅8.3	厚さ2.0	EIK	10	普通	灰	№231	
132	瓦	平瓦	長さ6.6	幅6.4	厚さ2.3	EIK	10	普通	灰	J66G	
133	土師器	壺	—	5.3	—	CEHI	5	良好	にぶい黄橙	パレス文様　№406　SD48・79	
134	土師器	壺	—	5.7	—	ABCE	5	普通	にぶい橙	砂利層	
135	土師器	壺	—	4.8	—	CEHIM	5	普通	にぶい黄橙	赤彩　砂利層	
136	弥生	甕	—	10.3	—	CIJM	5	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
137	弥生	甕	—	—	—	BCEHI	5	普通	にぶい橙		
138	土師器	壺	—	5.8	—	IJM	5	普通	灰黄褐		
139	土師器	壺	—	2.8	—	BCHI	5	普通	にぶい橙	SD48・79	
140	土師器	壺	—	2.9	—	AI	5	普通	橙		
141	土師器	壺	—	3.0	—	I	5	普通	灰黄褐	赤彩	
142	土師器	壺	—	4.0	—	CEI	5	良好	にぶい黄橙	パレス文様　赤彩　SD79合流部	
143	弥生	壺	—	—	—	BCHI	5	普通	灰黄	赤彩	
144	弥生	壺	—	22.0	7.3	EI	60	良好	にぶい橙	赤彩　№171	82-2・3
145	鉄製品	雁股鏃	長さ11.2　鏃身部＋頸部3.8　茎部7.4　重さ8.92							№1	149-3
146	鉄製品	鎌	長さ11.2　幅2.2(最大)　背幅0.2(最大)　重さ15.19							№384	149-4
147	石製品	砥石	長さ8.5　幅8.4　厚さ3.7　重さ367.1　石材　閃緑岩							SD48・79合流部	154-1
148	石製品	打製石斧	長さ7.1　幅6.9　厚さ2.4　重さ151.4　石材　ホルンフェルス							№147	154-1
149	石製品	砥石	長さ5.5　幅6.2　厚さ1.2　重さ29.3　石材　砂岩								154-1
150	石製品	砥石	長さ7.6　幅6.5　厚さ4.6　重さ228.2　石材　砂岩							SD48・79合流部	154-1
151	石製品	砥石	長さ5.9　幅5.0　厚さ0.8　重さ31.0　石材　凝灰岩								
152	石製品	石核	長さ2.4　幅1.2　厚さ1.1　重さ3.1　石材　黒曜石							№381	151-19

第171表　第48号溝跡配石遺構出土形象埴輪観察表（第421図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備考	図版
153	人物　男子頭部	DEHIK	A	D	ナデ・ハケメ　16	ナデ	SD48　配石　№1　顔面赤彩	202-6

2．第48号溝跡の堰

(1) 堰堤の概要

第79号溝跡と第48号溝跡の交錯する地点に堰堤が築かれた。堰堤は、第48号溝跡の川底に東西6m、南北3mの大きさで築かれた。堰の骨組みは、二本の堰芯材、支保工、棟木等の骨材と三組の矢板群で構成されていた。いわゆる後方支持型の堰である。堰は、草木や粘土、砂などで覆われ堰堤が形成されていた。本堰は、材木を露出させたいわゆる「洗い堰」ではない。

堰堤からの出土遺物はなく、構築時期を直接知ることはできないが、第48号溝跡の川床から、集落の始まりに近い土器が出土しており、この堰堤もそのころに構築されたと考えられる。

なお、河川は、南西の台地縁辺から流れ、堰付近で北流していた河川に堰を設置し、東流させたと考えた。

以下、調査の経過、使用材の図化基準、使用材の分類、構築工程について述べていくこととしたい。

調査の経過

大形掘削機械によって、近現代、平安時代に自然堆積した土層を除去する作業中、堰の芯材1の北端を確認した。この芯材1は、当初は、流木の一つと考えていたが、真南に向かい、斜めに深く地面に突き刺さるように出土したこと、樹皮や枝の無いこと、周囲を人力で掘り進むと他の構造材、矢板、杭などが、まとまって出土したことから、堰の部材と判断した。

さて、堰跡の調査は、まず、芯材1の周囲を掘りさげ、棟木より北側の構造材の検出を行い、支保工や支保工を止める杭、芯材2を検出した。あわせて、棟木より前面の堰の被覆材を露出させる作業を行った。堰の全面には、小枝や粗朶が複雑に覆っており、そのベールを一枚剥がすと、前と後、二つの矢板列が姿を現した。

ただし、矢板列の上には、板材や丸太材、杭などを置き、それらを粗朶や小枝などで被覆していたことから、それぞれの出土状態を写真、図面で記録した。

その後、最上部の堰構築材のうち、取り外せる支保工や止め杭などの構造材、堰全体を覆っていた粗朶やそれを止めるための杭などを取り上げた。そして、前列の矢板を露出させようとしたところ、粗朶の下から矢板列に直交して、1m前後の小枝を敷き並べた面が現れた。なお、この小枝の敷き並べは、他の矢板列上に確認できず、ここが構築にあたり重点の置かれた場所だったとわかった。

さて、この小枝群を取り除くと、下から前列矢板群が現れた。枕木（棟木）の上に矢板の上部をそろえて、地中に向かって水平やや斜めにその杭先を打ち込んでいた。また、南側の粗朶群も次第に取り除いていくと、下面から矢板群が現れた。矢板群は、枕木（棟木）からやや離れていたが、それは上部が腐朽したためと考えられる。

なお、矢板群の下にも巨大な横木、枕木を支える支保工、それを止める杭などが現れた。そこで、さらにそれらの記録を取り、矢板、枕木を外していくこととした。

すると、前列枕木の南端に接して巨木の根が出現した。この根を覆う土を取り除いていくと、切り株が現れた。当初、この切り株と根は、堰の南端に植えた樹木ではないかと考えたが、堤に木を植えると堤が根によって傷むので、それはありえないこと、根の先端二本が、切断されていることなどから、根の付いた切り株をそのまま堰の構造材として埋設したと判断した。

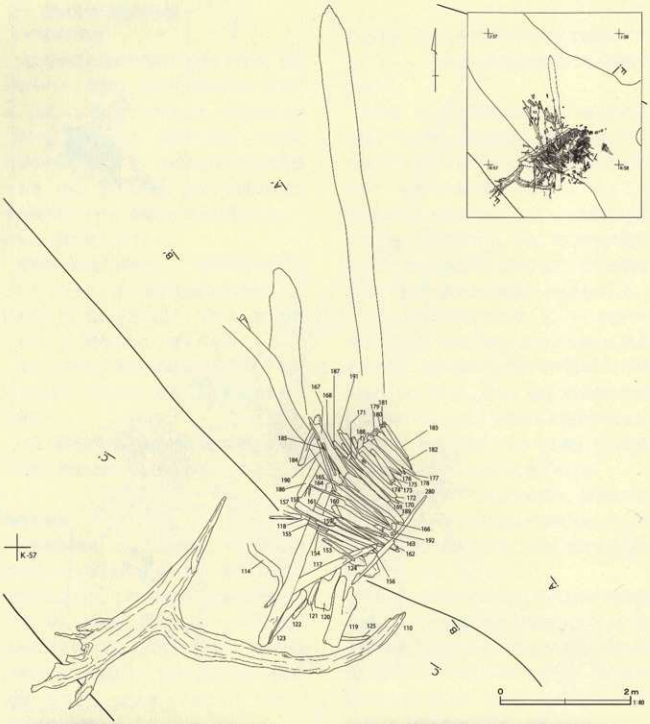
なお、この根に巻き込まれる形で大形の伐採材が、根と支保工の間に入れられていた。また、この切り株は、河川の縁辺に生育していた樹木で伐採後、河川の浸食によって倒れた流木（自然木）と考えられる。

さて、この前列の矢板群や支保工、杭などの記

(1)－a－①

(1)－a－②

第422図　第48号溝跡　堰（1）



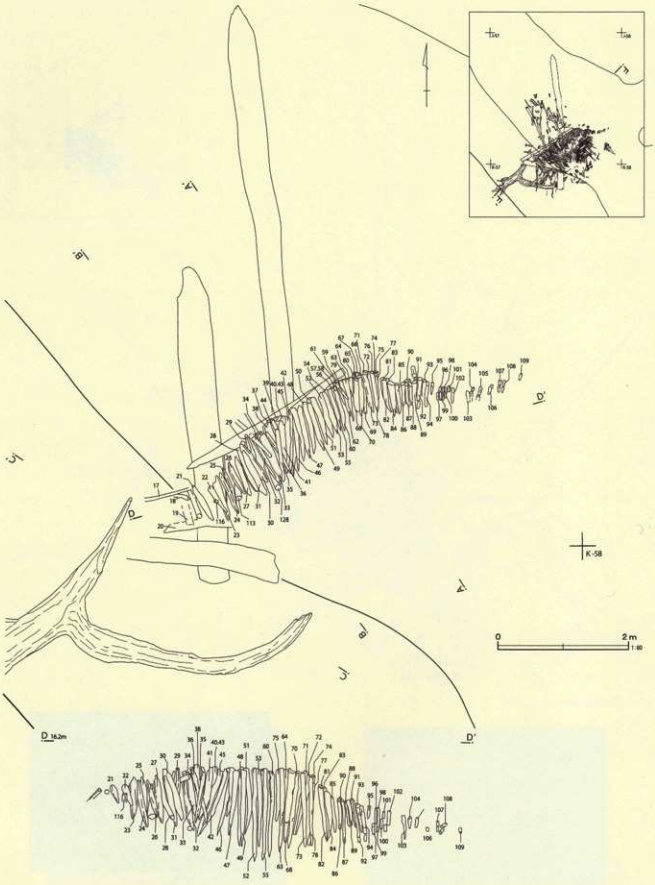
(2)－①

(2)－②

第423図　第48号溝跡　堰（2）

(3)－①

第424図　第48号溝跡　堰（3）



第425図　第48号溝跡　堰（4）

録を行った後、それらを取り上げた。そして、後列矢板群上面に堆積する砂と粘土の互層を取り除くと、ふたたび後列矢板群を覆う敷葉群が現れた。この敷葉群をさらに撤去すると、後列矢板群が姿を現した。

後列矢板群も上部を枕木に添え、地中深く斜めに打ち込んでいた。ただし枕木の無い東半分は、丸木杭を打ち込み、それに添わせるように矢板群を打ち込んだ状況が明らかとなった。

(2) 使用材の図化基準と分類

堰を構成した構築材については、加工の有無を問わず、そのすべてを遺物として取り上げた。しかし、ここでは、加工の認められる部材について図化を行った。なお、極端に残存状態の悪い一部の部材は、図化を行わなかった。その部材をもっともよく表現できる一面と、任意の切断面を図化することとした。

なお、断面の年輪状の表現は、割れ口や木取りを基に想定した年輪である。

また、挿図の上下は、矢板ならば地中に刺さっていた天地を上下とし、棟木は、正面（南側から）向かって左を上、支保工は、側面（東側から）向かって左を上とした。

使用材の分類

堰は、木材、粗朶、草、粘土、砂などを巧みに組み合わせて作っている。なかでも木材は、使用する場所に合わせ、応力を考慮した部材の選択、加工、配置がされていた。ここでは、堰の部位と部材の加工について分類を行い、堰の構築工程と部材、及び樹種の選択について述べることとする。

Ⅰ．構造材

堰の芯となる構造材は、最初に設置された一本の巨木とそれと平行した巨木、及び根巻状の切り株、矢板を置き並べるための棟木、棟木を支える支保工などからなる。

Ⅱ．矢板

河川の水圧を平面で受け、流水方向を制御する矢板は、調査時は、二列と認識していたが、図面整理の過程で三列、または三重に構築されていたことが分かった。矢板は加工方法や形状によって５類に分類できる。基本的には、丸太材を縦にみかん割りして幅広の平面を作り出し、この平面を流水方向と直角に打ち並べるため、先端が鋭利に削り込まれる。

１．幅広矢板

長さ1.8ｍ前後、径400㎜前後の丸太材をみかん割りし、先端300㎜を尖らせて矢板とする。断面は、細い扇形となる。樹皮は、残らず削り取られる。縦割りの単位は一定せず、厚さは不揃いである。

２．幅狭矢板

長さ1.5ｍ前後、径250㎜前後の丸太材を幅広矢板同様、みかん割りして先端を尖らせて矢板とする。幅広矢板よりも厚手である。やはり扇形に作るが、三角形矢板と区別するため中心角60度未満を幅狭矢板とした。

３．三角形矢板

長さ1.2ｍ前後、径200㎜以下の丸太材を縦に四分割した矢板である。扇型の中心角は、90度前後となる。厚手の作りで、前二者より作りが粗い。

４．三面割矢板

長さ1.2ｍ前後、径200㎜以下の丸太材を縦に半切、または四分割したのち、中心部分を割き取った矢板。または、丸木材の三面を割り出して作った矢板。

５．四面割矢板

長さ1.2ｍ前後、径200㎜以下の丸太材を半裁、または四分割した後、四面をそぎ落とした矢板。断面が、四角に成形される場合もある。

このほか、小枝を落とした枝払い材や丸木の杭が、矢板として並べられた箇所もある。

Ⅲ．杭

杭には、丸木の先端を鋭利に加工した丸木杭と、

矢板と同様の割り材を用いた杭がある。ただし、後者は、とくに細分を行わなかった。

(3) 堰堤の構築工程について

第48号溝跡に設置された堰堤について、その構築工程、使用された木材、その加工方法、樹種等について述べる。第426～436図を用いるが、図の左、または上に構築工程図、右、または下に使用した構築材を掲載した。構築工程図の小さな番号は、図化していない部材である。なお、堰堤の構築材は、すべて取り上げたが、図化は、残存率の高い部材を優先した。

ところで、堰堤の構築工程を述べる前に、堰堤を設置した場所の選定について述べておきたい。本来、堰を設置した第48号溝跡（河川跡）は、反町遺跡の南方、高坂台地の縁辺に沿って流れた河川、あるいは湖沼から分かれて北流した小河川である。この小河川に、堰を設置し、流水方向を東に大きく曲げ、取水した水は北方へ流したと考えたい。

[第1工程]（第426図）堰堤（1）

堰堤は、まず、モミ属の巨木〈1〉（〈 〉の番号は図化していない部材）とヤナギ属の巨木〈2〉を河川の流水方向に並行するように設置した。川底の砂層を大きくえぐり、地中深く13度の傾斜角で斜めに突き刺さるように設置されていた。

残念ながら、湧水と砂層の崩壊を止められず、堰堤の芯材となったこの二本の巨木を取り上げることはおろか、設置の基点すらも確認することはできなかった。しかし、現状では、地表面から1mまで埋没していたことが分かっている。なお、巨木〈1〉は径450mm、長さ10.5m、巨木〈2〉は、径500mm、長さ5mである。

この二本の巨木を砂層中に埋没させ、その上に押さえの丸太材〈3〉が置かれ、砂と粘土で被覆された。

なお、モミ属は、日本特産の常緑針葉樹で高さ40m、径2mにもなる。

[第2工程]（第426図）堰堤（1）

矢板を打ち並べる棟木（枕木）やそれを支える支保工、その楔や枕木、沈降防止の杭を設置する段階である。

まず、棟木〈8〉と（9）が、堰芯材〈1〉と60度の角度をもって斜めに据えられた。この2本は、堰芯材〈2〉の上で継がれ、一体化した棟木として用いられた。なお、両者の重複部に継ぎ手の加工はない。棟木〈8〉と（9）は、コウゾ属が用いられた。

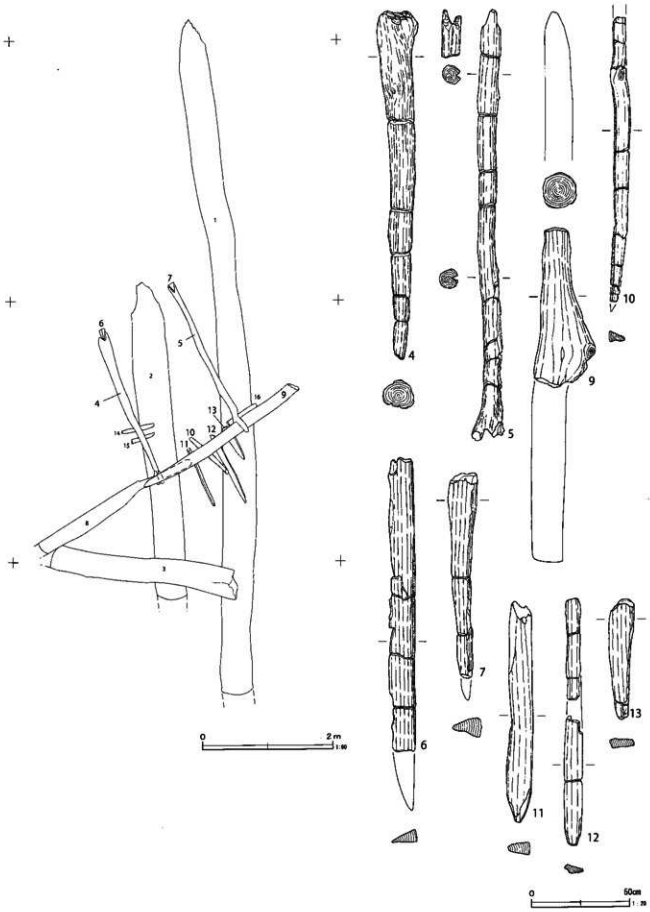
この棟木は、支保工（4）と（5）によって水圧を支えた。支保工は、堰芯材と棟木が重なる左側、流水荷重のかかる側に設置された。堰芯材との間に枕木〈14〉・〈15〉・〈16〉が置かれ、支保工が、堰芯材よりも右にぶれることを防いでいる。支保工の根元には、楔（6）と（7）が、地中深くにそれぞれ打たれていた。

支保工は、二股に枝分かれした枝を10cmほど残し、棟木（9）の中央、そして〈8〉と（9）の重複部に咬ませ、棟木と直交する方向に支持し、棟木から長さ1.5mの位置に楔を打ち込み、ここを支点とした。また、楔を掘えるため、支保工の基部は、弭状の加工が施されている。支保工は、（4）がコウゾ属、（5）がカエデ属を用いた。

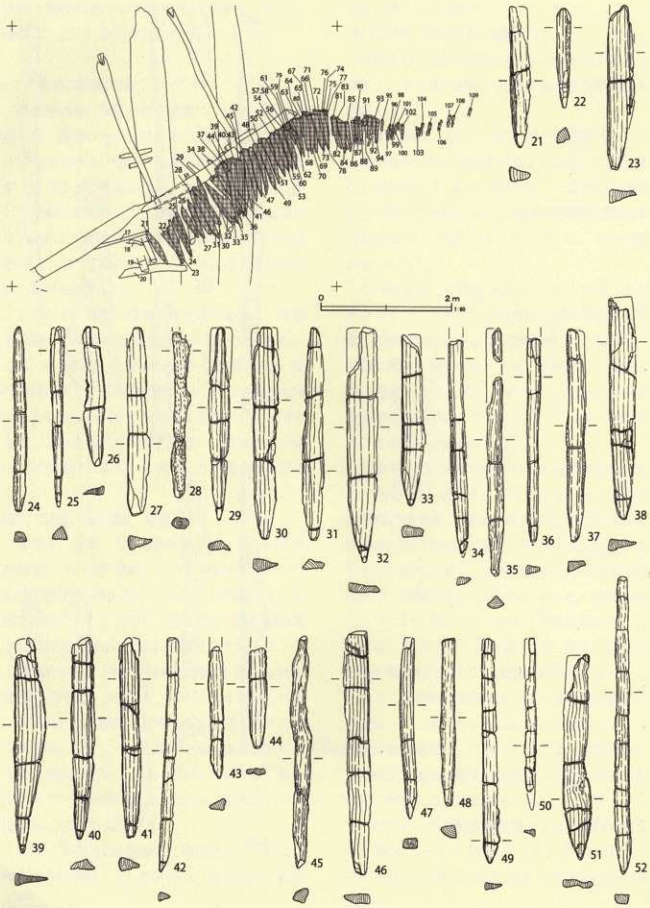
なお、棟木〈8〉の左側には、支保工が無い。矢板も堰芯材〈2〉より左側に打たれなかったことから、当初から支保工は（4）より左に設置されなかったと考えたい。おそらく、棟木〈8〉を設置した段階では、支保工（4）より左に平行して支保工を数本設置する予定だったが、何らかの理由で変更したためと考えたい。

そのため、矢板列も堰芯材〈2〉の場所で留まり、棟木〈8〉には棟木（9）の杭（11）・（12）・（13）や枕木（10）のような沈降防止の材が無い。

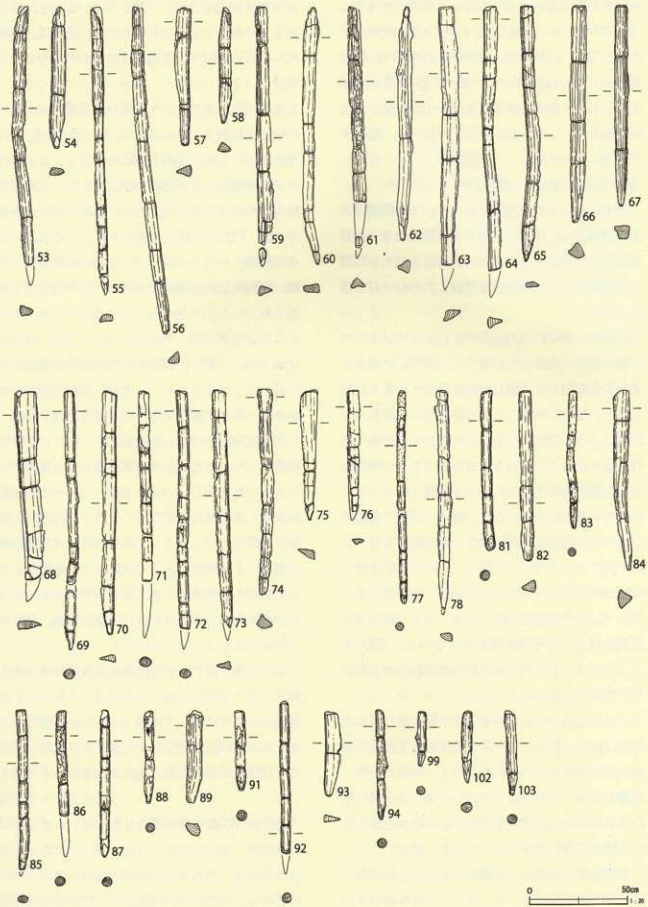
支保工や棟木以外で用いられた材は、支保工を



第426図　第48号溝跡　堰堤（1）



第427図　第48号溝跡　堰堤（2）



第428図　第48号溝跡　堰堤（3）

支持する楔（6）と（7）がムクロジ、枕木では（10）がキハダ、〈14〉がコナラ、〈15〉がオニグルミ、〈16〉がヤナギ、沈降防止の杭では（11）がムクロジ、（12）がコナラ属、（13）がキハダである。また、棟木の枕木となった（10）は、三面割矢板を用い、杭（11）・（12）・（13）は、幅広矢板が用いられた。

[第3工程]（第427・428図）堰堤（2・3）

棟木に沿って矢板を打ち並べていった段階である。挿図では、棟木に矢板を立て掛けたように表現されているが、あくまでも矢板は、棟木を設置した粘質土上から堰芯材を埋設した砂層に打ち込んでいる。

矢板は、地中に打ち込みやすいように、すべて先端を鋭利に尖らせていること、頭部は、腐食による劣化が激しく、敲打痕跡を確認することは難しいが、地中に刺さっていた先端部は、折れたり、屈折したり、割れたりしていることから、地中に打ち込んだことは明らかである。なお、矢板群は、30度の傾斜角で4mにわたって打設された。

残存する矢板の並び方は、棟木（9）の右端で「く」の字に折れ、1.5mほどで再び屈曲する。全体が同じ長さの矢板を用いているわけではなく、（21）から（26）に向かっては小さく、（26）から（32）に向かっては大きく、（32）から（51）は多少大小はあるが平均的である。しかし、（52）から（74）は、大きな矢板が揃って用いられ、（75）から再び小さくなる。

また、矢板の打ち込みも一列に揃って打たれたのではなく、棟木（9）の中央付近と左端付近が、最も込んで打っている。ところで、矢板と一概に表現したが、（69）から（103）には、丸木材が用いられ、打ち込み方向も（95）より右は垂直に近く、杭と表現したほうがよいかもしれない。

矢板の長さや幅は、不揃いである。これは打ち込む箇所や場所によって、あらかじめ準備していた矢板や杭を選択して用いていたか、その場で長さや幅を調整、加工して用いたと考えられるが、おそらく前者であったと考えたい。それは、矢板列の打ち込み順序を復元することで明らかとなった。

矢板列は、まず、①矢板列の最下層にムクロジの幅広矢板群を打ち込み、②その上に棟木（9）の左端から矢板・杭列東端に向かって、コナラ属アカガシ亜属の丸木杭群を重ねて打ち、③さらに棟木中央から矢板・杭列中央にコナラ属クヌギ節の三面、四面割矢板群を重ねて打つ。そして、④その隙間にハンノキ属ハンノキ節の幅狭矢板、三面、四面割矢板群を重ねて打つという四段階で構築されている。

なお、矢板（28）のチドリノキ、（75）のカエデ属、（44）のコナラ属コナラも隙間を埋めるのに用いたと考えられる。しかし、矢板（29）のキハダは、第5工程の矢板群の可能性を残す。

この四段階を詳しくみると、①のムクロジの矢板群は、左、または右から順序良く打ったのではなく、（54）・（47）・（43）・（25）といった短い幅狭矢板をまず打ち、その上にムクロジの幅広矢板群を隙間なく打ったようである。ムクロジの幅広矢板が、1m前後であることは、この矢板が、打ち込み深さを考慮し、あらかじめ準備していた部材と考えたい。ムクロジは、山地に生え、高さ15～20mになる。

②のコナラ属アカガシ亜属の丸木杭群は、最も棟木（9）に近い（69）を最大（1.2m）とし、次第に小さくなり、〈109〉は、1mに満たない。東に向かうに従って頭部が欠損または腐食している可能性が高く、本来もう少し大きかったと考えたい。

（69）と匹敵する長さのコナラ属アカガシ亜属の矢板が、（64）・（65）・（70）・（71）・（72）・（77）と6本あり、うち（64）・（65）・（70）は、三面割材である。また、（93）を除いて（77）から（103）にかけては、径も小さく割り材には適さない。杭

に用いたのは、コナラ属アカガシ亜属の枝と考えられる。非常に硬く弾力性に富むことから、丸木杭として用いたと考えたい。

コナラ属アカガシ亜属は、山地に自生し、屋敷や神社などに見られる。大木では高さ25m、直径2.5mにもなる。

③のコナラ属クヌギ節の矢板群は、(68) の幅広矢板、(73) の三面割矢板を除き、幅狭矢板である。(52) を最大1.4mとし、左、または右に行くにしたがって小さくなる。(45)・(53)・(60)・(74)・(84)・(89) のように材が途中で湾曲するのは、コナラ属クヌギ節の特徴である。肉厚の幅狭矢板は、矢板群の主に屈曲部に用いられた。

なお、コナラ属クヌギ節は、山地に自生し、高さは15mになる。樹皮は灰褐色で厚く、縦に不規則な裂け目がみられる。

最後に隙間を埋めたハンノキ属ハンノキ節の幅狭矢板、三面、四面割矢板は、矢板群の屈曲部、コナラ属クヌギ節の矢板の補完材として用いられたようである。ハンノキ属ハンノキ節は、低地の湿った所によく生え、高さは20mになる。やはり割材が用いられた。

以上のように矢板群は、ムクロジ→コナラ属アカガシ亜属→コナラ属クヌギ節→ハンノキ属ハンノキ節の順に矢板が打ち込まれたことが分かった。

このことから、まず径40cmを超えるムクロジの丸太材から幅広矢板を作成して打設、続いてコナラ属アカガシ亜属の枝打ち材を杭に加工して打設、さらに径15cmのコナラ属クヌギ節の丸太材を幅狭矢板に加工して打設、そして最後に同径のハンノキ属ハンノキ節の丸太材を幅狭矢板に加工して打設したと考えられる。

本来ならば、矢板と矢板の接合関係を確認しなくてはならない。しかし、実測図に示したように一本の矢板が、数個の破片に割れていることから、接合関係の確認は、実質的に不可能であった。

[第4工程] (第429・430図) 堰堤 (4・5)

第1矢板群の上に第2、第3矢板群を打設するための骨組みを設置した段階である。まず第1矢板群の上に支保工 (111) を乗せる。この支保工は、杭〈113〉・(116) によって固定され、かつ第2矢板群の棟木となる (115)、および (127) を支える。

棟木 (115) の上端は、二股となり、支保工 (111) で止められ、また杭 (116) によって上部へ動きも止められた。棟木 (127) は、支保工 (111) を止める杭〈113〉・(116) の間を縫い、楔によって支持されている。さらに、その先端は二股に分かれ、第3矢板群の棟木 (129) の中央を支える。

この棟木 (127) の先端が、上部にはねないように支保工 (130) で抑えられていた。ただし、この支保工 (130) の支持方法は明らかにできなかった。以上をまとめると、棟木 (127) と (115) が、支保工 (111) と120度の角度で支えることで、矢板列を大きく湾曲させていたことが分かる。

支保工は、上端を二股、下端を弭状に加工する。弭状の内側には、楔 (112) が打ち込まれた。楔は、とくに異なった加工を施した部材ではなく、矢板を用いている。

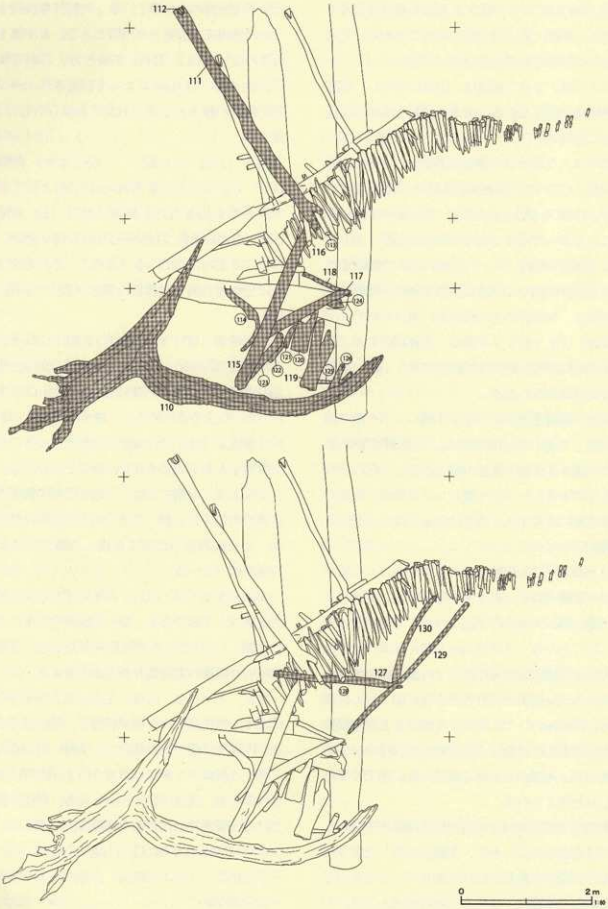
なお、支保工は、(111) がキハダ、(130) がコナラ属コナラ節である。第1矢板群の (4) のコウゾ属、(5) のカエデ属をふまえると、支保工に特別な樹種の選択はなかったと考えたい。

なお、キハダは、山地に生え、高さ25mくらいになる。樹皮はコルク層が発達し、縦に浅くさける。内樹皮は鮮やかな黄色で、染料に用いられる。

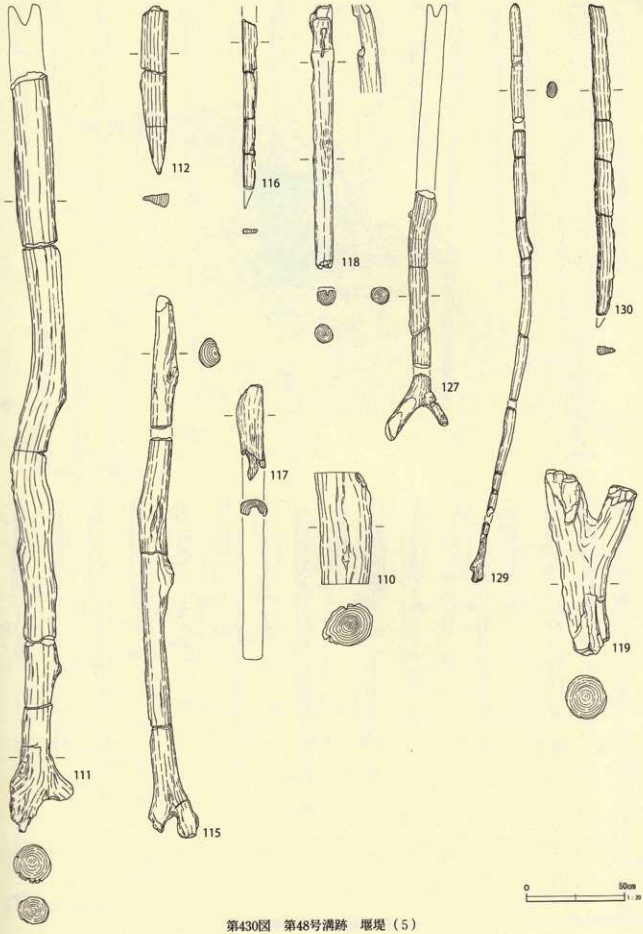
コナラ属コナラ節は日当たりのよい山野にふつうにみられ、高さが15～20mとなる。樹皮は縦にさける。雑木林の代表的な樹種の一つである。

コウゾ属は、人家に近い山地に自生し、高さ2～5mになる。カエデ属は、山地に生え、高さ5～10mになる。

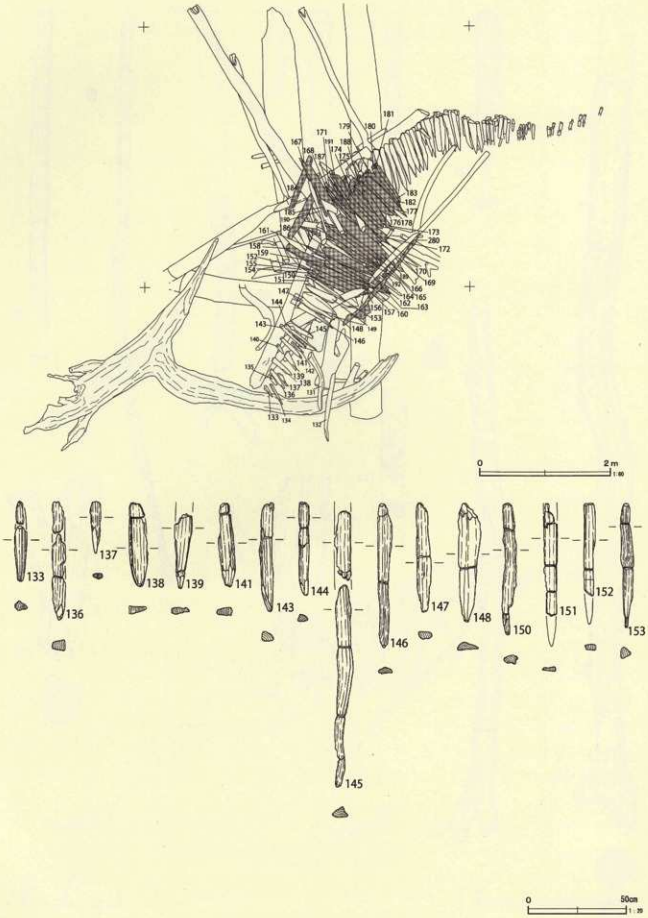
このなかでコウゾ属の支保工 (4) とカエデ属



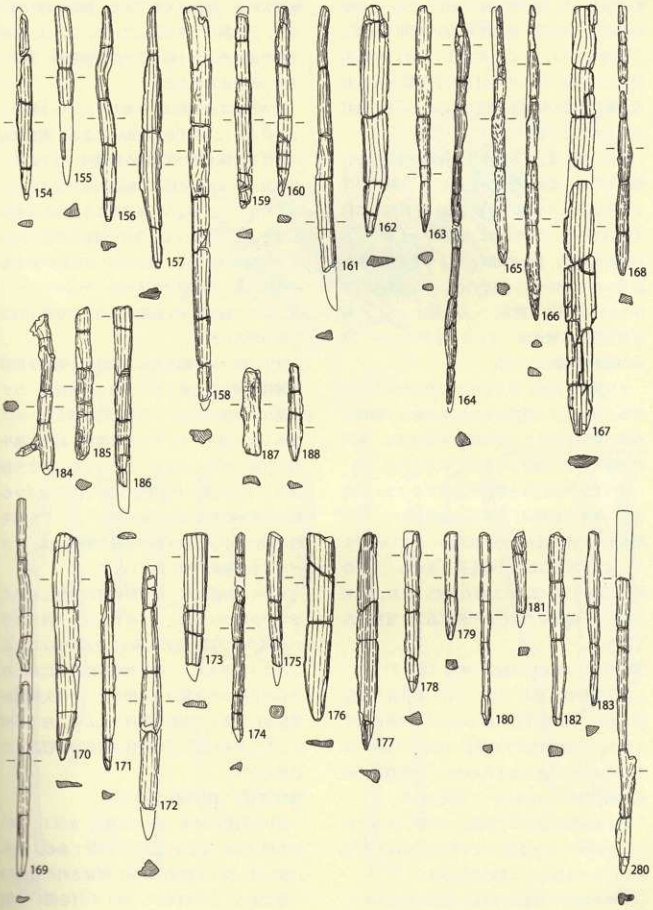
第429図　第48号溝跡　堰堤（4）



第430図　第48号溝跡　堰堤（5）



第431図　第48号溝跡　堰堤（6）



第432図　第48号溝跡　堰堤（7）

の支保工（5）が、樹幹部を伐採して用いた可能性が高く、ほかは、樹枝部を巧みに活用し伐採したと考えたい。とくに支保工（111）や棟木（115）・（127）は、中央付近に屈曲部がみられ、数か所に小枝の節跡を確認できることから、枝打ち材と考えられる。

第4工程では、これら第Ⅱ矢板列の骨組みを設置したのち、またはそれと前後して、矢板列全体を覆うようにクワ属の巨木（110）を横倒しに据え置いている。この巨木は、根本から1mで四方に小枝が伸び、それを切断したようである。また、根方から二方向へ太い根がのび、一方は矢板群全体を3.5mほど取り囲み、一方は棟木（8）や堰芯材を押える構造材〈3〉などを押えこみ、1.8mの場所で切断している。

クワ属は、山地に広く自生し、高さ10～15mになる。(110) は、径25cmもの巨木であり、樹根や多数の樹枝が残ることから伐採木ではなく、河川の崖際などから崩落した倒木と考えられる。

このクワ属の巨木と堰芯材を押える〈3〉の間には、雑木の端材が、矢板列の基礎として、クワ属やトチノキなどがその中に沈められていた。また、(110) の右にのびた根を押えるため、二又の杭〈126〉と杭〈125〉が打たれた。なお、棟木（115）は、基部をこの巨木の根にあて、支持されていた。

[第5工程]（第431・432図）堰堤（6・7）

第2矢板群を棟木（115）に沿って打設した段階である。図上左下から右上にかけて次第に大きくなる。矢板（145）・(158)・(167)・(169) は、丈の長い矢板で他とはそろわない。矢板群は、60度の傾斜角で4mにわたって打設された。

第2矢板群には、コナラ属コナラ節、オニグルミ、キハダ、コナラ属クヌギ節などがみられる。とくにコナラ属コナラ節の矢板が多い。

コナラ属コナラ節の矢板に幅広矢板は少なく、僅かに（157）・(158)・(167) に限られ、ほかは幅狭矢板か三面割り矢板である。幅広矢板の場合も二、三分割して作り出している。これは、矢板を作り出したコナラ属コナラ節の樹径が、30cm以下だったためと考えたい。

コナラ属コナラ節は、日当たりのよい山野にふつうにみられ、高さが15～20mとなる。樹皮は縦にさける。雑木林の代表的な樹種の一つである。

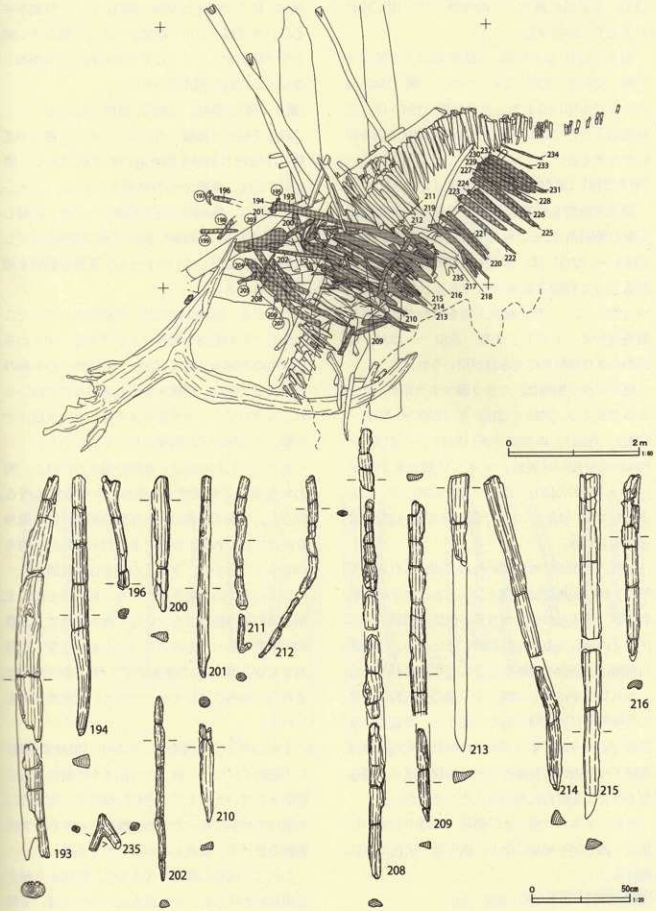
一方、キハダの矢板は、幅広矢板で長さもそろっている。こちらはムクロジのようなみかん割りとなる。オニグルミは、短い矢板に用いられた。コナラ属クヌギ節は、大小ありふぞろいである。そのほか第1矢板群で主体となったムクロジが2点、コナラ属アカガシ亜属が1点、クワ属1点などが少数みられる。

コナラ属クヌギ節を含め、これらを第1矢板群の残材を用いたと考えると、第2矢板群は、コナラ属コナラ節の矢板が、万遍なく打設され、オニグルミは、図上左下、キハダは中央、右上に集中的に打設したこととなる。この点から、第2矢板群は、コナラ属コナラ節を主体に打設しつつも、幅広矢板が必要な部分にあっては、キハダを集中的に用い、小ぶりの矢板が必要な個所には、オニグルミを積極的に用いたといえる。

そして、隙間には、第1矢板群の残材ともいえるコナラ属クヌギ節、ムクロジ、コナラ属アカガシ亜属、クワ属などの矢板を打設したのである。このように考えると、第2矢板群の設置にあたり、あらかじめコナラ属コナラ節やキハダの矢板群が準備され、第1矢板群の残材とともに、左下が短く、左上が長くなる三角形状に矢板群を打設したと考えたい。

[第6工程]（第433図）堰堤（8）

第3矢板群の棟木（129）・(280)、支保工（193）、その楔（194）などを設置した段階である。棟木（129）は、第4工程で一体的に構築された骨材の一部である。この棟木に（280）の材を継いで第3矢板群の棟木とした。その継ぎ目には、支保工



第433図　第48号溝跡　堰堤（8）

(193) を直角に置き、この支保工は、楔 (194) によって止められる。

棟木 (129) はクワ属、(280) はコナラ属コナラ節、支保工 (193) はオニグルミ、楔 (194) はムクロジが用いられた。とくに楔 (194) は、1mを超す長さである。第3矢板群の幅狭矢板を用いたと考えたい。

[第7工程] (第433・434図) 堰堤 (8・9)

第3矢板群を打設した段階である。矢板群は、70度の傾斜角で2mにわたって打設された。矢板 (208) ～ (215) は、第2矢板群と第3矢板群を渡るように打設された矢板である。矢板 (216) ～ (225) は、一部に幅狭矢板を含むが、幅広矢板を用いる。しかし、矢板 (226) ～ (234) は、径の小さな枝打ちの丸木材が用いられた。

使用された樹種は、コナラ属コナラ節が (208)、オニグルミが (209)・(216) と (226) ～ (231)・(232)・(234)、ムクロジが (213) ～ (215) と (218)・(219)・(223)、トネリコ属シオジ節が (220)・(221)・(224)・(225)、ほかにキハダ (217)、トネリコ属 (222)、コナラ属クヌギ節 (232) などがみられる。

一見、さまざまな樹種の矢板が用いられたようだが、第3矢板群は、図上左からムクロジの幅広矢板群、トネリコ属シオジ節の幅広矢板群、オニグルミの枝打ち丸木杭群の順にまとまる。その他の樹種は、隙間を埋めるように打ち込まれていた。

ムクロジやトネリコ属シオジ節の矢板群は、第2矢板群の打設以降に新たに加工し、準備された矢板であろうが、オニグルミの枝打ち丸木杭群は、支保工や矢板の製作過程で出た廃材に近く、堰を作るうえで最終的に埋め込んだと考えたい。

なお、トネリコ属シオジ節は、山地の谷沿いに生え、高さ20～30mになる。樹皮は、灰色で縦に割ける。

[第8工程] (第435図) 堰堤 (10)

第3矢板群の上に様々な端材、小枝などを敷き並べ、粘土で覆った段階。端材には、クワ属を中心にコナラ属アカガシ亜属、トネリコ属シオジ節、ヤナギ属、オニグルミなどがみられる。矢板群と直交する方向に据え置かれた。

[第9工程] (第435・436図) 堰堤 (10・11)

雑木を粘土で被覆したのち、その上に樹皮や芝草、羊歯状の植物を敷き詰めた工程である。第434図では、破線でその範囲を示した。しかし、この範囲は、敷物の存在を認識したのち、記録した範囲である。矢板群の検出以前に敷物をはがした部分は、記録していないため、正確な範囲を知ることはできない。

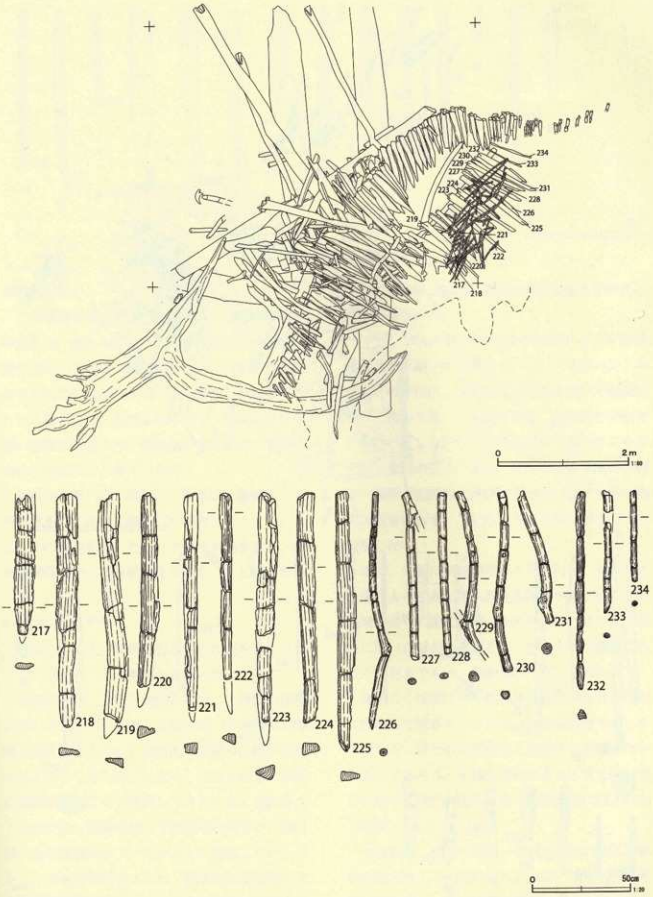
けれども、敷物の端には、杭が打たれていたことから、その範囲を知ることができる。すなわち、支保工の外側をめぐる (269) ～ (279) の小形の杭である。杭は、幅狭矢板や丸木材などが用いられ、ムクロジ、コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節、クワ属などの樹種が用いられていた。

また、これらの杭は、敷物の端止めのほか、失われた支保工を支持する楔だった可能性も残る。ただし、支保工の楔は、支保工の鉛直方向に鋭角を向けて打たれる。けれどもこれらの杭は、別方向を向くことから、支保工の楔とは考え難い。

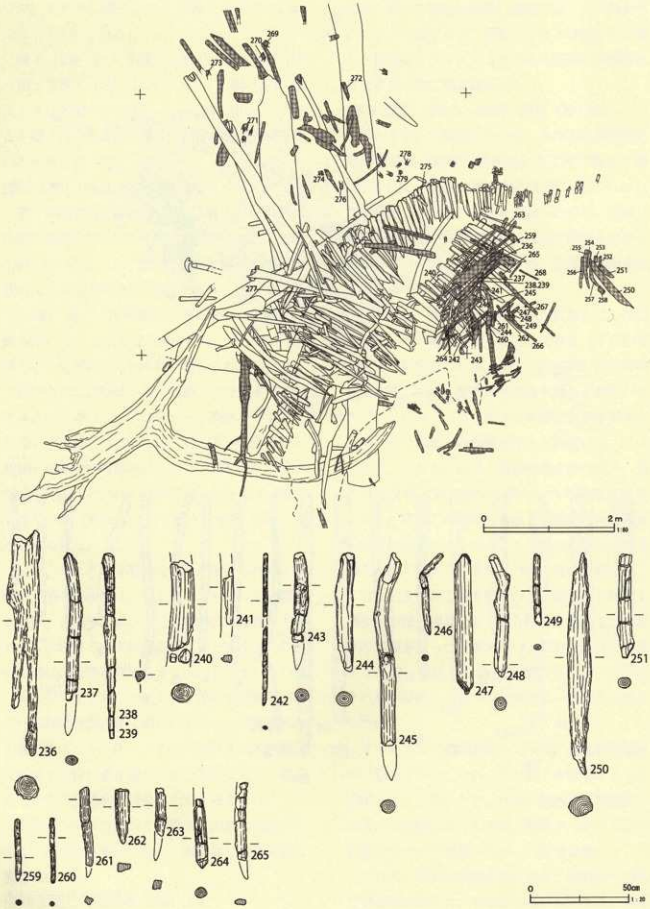
以上、九つの工程を経たのち、粘質土と砂質土、植物質の覆い物などを、交互に塗り籠めて、土塁状の堰堤を作ったと考えたい。なお、支保工や棟木などが、現在まで腐食せずに残っていたのは、それらが堤内にパッキングされていたためと考えられる。

すなわち、この堰堤が、小河川 (第48号溝跡) の川底近くにつくられ、かつ粘土や砂層によって密閉されていたことで、空気に触れず、恒常的に水漬けの状態にあったため、酸化やバクテリアの影響を受けず、腐食しなかったのである。

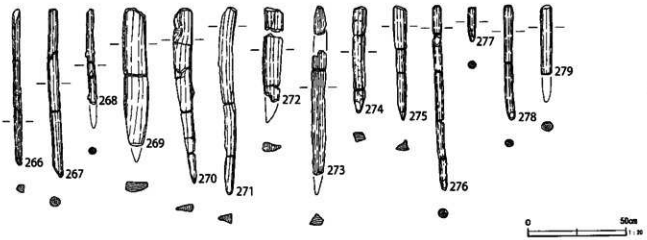
これは、堰堤の構造を考えると、川底から頑丈な構造物が作られ、その最も高いレベルは、支保工の楔、堰芯材の頂部が常時帯水線よりも低かっ



第434図　第48号溝跡　堰堤（9）



第435図　第48号溝跡　堰堤（10）



第436図　第48号溝跡　堰堤（11）

たことを示す。

この堰堤を築くことで、小河川（第48号溝跡）の流れは、南から北流して堰堤にあたり、本流を東に流し、支流を堰堤北側に設けた取水口から、おそらく北に広がる水田へ水を供給したと考えられる。取水口は、本流よりも浅く、堰堤よりやや低い位置に設置され、堰堤をかすめながら北西に向かって流れたと考えられる。

矢板から東へ続く杭列は、取水口を補強し、北西に水を引く高さを調節した装置と考えたい。また、この堰堤を築いたことで流水が渦を巻き、第48号溝跡の地山の砂層を深くえぐったと考えたい。

（4）まとめ

堰堤について、構築工程の復元作業を行ったことで、以下のことが明らかとなった。

堰堤の芯材、支保工、棟木等は、7種類の樹種が用いられていたこと、矢板に用いた樹種も10種類を超えることから、選択的に近隣の山林から材木を入手してきたのではなく、区切られた一か所の範囲から根こそぎ伐採してきたと考えられる。

そのため、樹種の統一や伐採木の大きさ、径の統一などは取られていなかったと理解したい。しかし、矢板の製作にあたり、幅広矢板を必要とする場合には、ムクロジとキハダの径50cmを超える伐採木が用いられた。この木を楔でみかん割りし、厚み5cm前後、幅25cm前後の幅広矢板を作りだしたのである。

一方、コナラ属コナラ節や同属アカガシ亜属、同属クヌギ節、オニグルミ、ハンノキ属ハンノキ節などの樹種は、径30cm以下の木を用いて幅狭矢板、三角形矢板、三面割り矢板、四面割り矢板などを作りだした。とくにオニグルミやハンノキなどは、樹高が低く、また、ほかのコナラ属の矢板は、樹幹が曲線的に伸びて節が多いことから、幅広矢板を作れず、上記のような矢板に留まったと理解したい。

なお、矢板に割材が用いられたのは、丸木のまま使うよりも表面積（低抗面積）が増やせること、先端を鋭利に加工し易いためである。ただし、割材に用いた材が枯渇すると、枝打ち材や割材で生じた端材までもが、矢板として用いられた。

おそらく堰堤は、一般の建築物と異なり、地中に埋設して流水をコントロールする装置であったことから、見た目の景観など意識する必要がなかったのであろう。多様な樹種のさまざまな部材が、その場で大雑把に加工され、順次構築に回されたと理解したい。

すなわち、樹木の伐採→骨材や矢板の加工→骨材の組み立て→矢板の打ち込みが、別々の作業単位で行われ、一連の協業で堰堤を構築していたのである。まず、異なった樹種の原材が、伐採順に

部材の加工場所（ストックヤード）に送られ、骨材や矢板に加工した部材を順次組み立て、あるいは打ち込み、堰堤を作り上げたと考えられる。

だから、共通した樹種の矢板が、一定の幅でまとまって打設されていたのである。なお、骨材、とくに支保工は、枝を払い、基部を弭状に加工し、先端をさすまた状に加工する。また、矢板は、原木を楔でみかん割りして割材を作り、使用箇所に合わせて長さを調節、先端をとがらせるなどの加工を施したと考えられる。

以上から、堰堤を構築した部材は、あらかじめ準備していたのではなく、順次伐採し、その都度支保工や矢板などに加工し、堤として組み立てていったと考えられる。このいわば「現地合わせ」で作業が進められたと考えたい。しかし、矢板が、短い矢板から長い矢板へと並べられ、また全体が湾曲するように打たれていたことは、この堰堤が、一定の規範に基づいた技術で構築されていたといえよう。

今後は、この堰堤の分析を踏まえ、その技術的な系譜、集落や耕地とのかかわり等を明らかにしていくことが課題である。

3．第79号溝跡

調査区の北側から南側西寄り、L－57・58、M－56～58、N・Q－56・57、R－55～57、S－54～56、T－54・55、U－53・54、V－51～53、W－51・52、X－50グリッドに位置する。

走行方向はN－46°－E、N－24°－Eを指す。規模は全長117.3m、幅9.15～12.75m、深さ142.0～196.0cmを測る。南西から北に向かって流路をとる溝跡で規模や堆積層、河床面の状況などから河川跡と判断した。

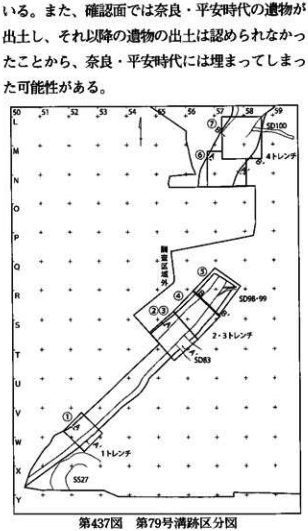
溝跡は、遺跡範囲の境界部分にあたり、試掘調査では確認できなかった。このため、発掘当初は集落部分までが遺跡範囲であると判断し、西側は台地が切れて低地に変化し、谷地形を形成していると判断した。しかし、第48号溝跡を検出した際に、合流部分を確認し、第79号溝跡の存在を認識した。このため、調査方法や調査範囲を検討し、トレンチ調査により溝跡の範囲を確認、断面調査を行うことになった。断面調査は、重機により幅1.5mの掘削発掘方法とした。南側から1・2・3・4トレンチの順で4ヶ所にトレンチを入れ、溝跡の位置と範囲を確認した。その結果、集落跡の西側を南北方向に緩やかに蛇行しながら伸びていることが判明した。溝跡の覆土中からは土器や木製品が出土することから、可能な限りの面的調査を行った。

溝跡は、現地表面から1.0～1.2mの耕作土を除去した標高17.80m前後で検出された。検出面は青灰色粘土で、わずかに底部回転糸切りの残る須恵器坏や須恵器蓋が出土していた。

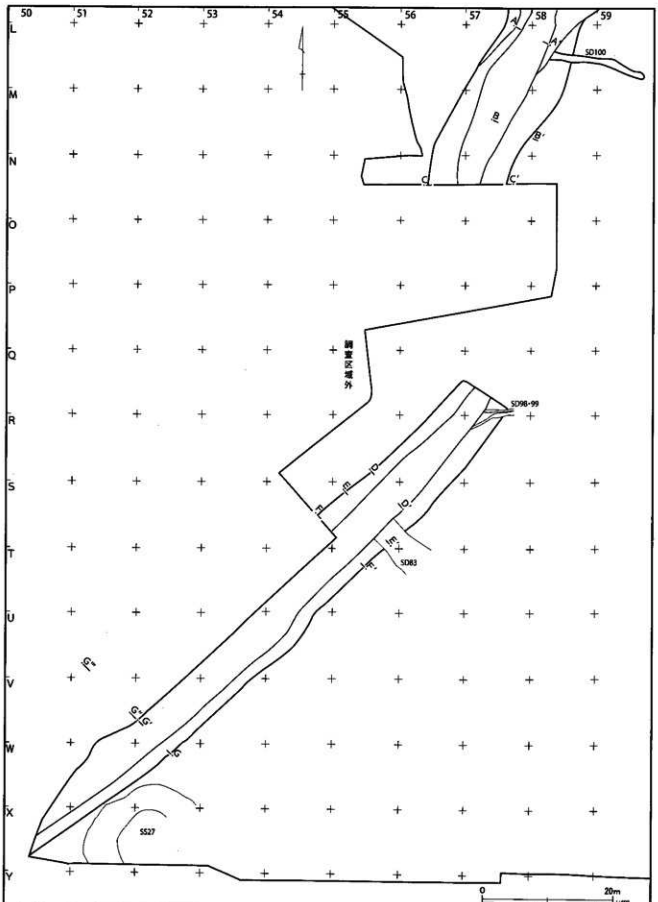
1トレンチは南側V・W－52グリッドに位置し、断面観察はG－G′である。集落跡の存在する東側の立ち上がりを確認した。河床面は約16.7mである。覆土は粘性の強い灰黒色土および木片を含む黒色土が堆積していた。2トレンチはT－54・55グリッドに位置し、断面観察はE－E′、F－F′である。河床面は砂礫層である。3トレンチは、Q・R－56・57グリッドに位置し、断面観察はD－D′である。粘土層を主体とする。4トレンチはM・N－55～57に位置する。断面観察はC－C′である。Ⅰ～Ⅲ層は耕作土である。Ⅳ・Ⅴ層は黒色鉄分マンガンを多く含み粘性が高いことから水田の床土と考えられる。第Ⅵ層が溝跡の覆土確認面にあたる。古墳時代の溝跡覆土は中央の第1～7層と第8・9層、第10・11層である。第1～4層は粘土層である。第5層は砂質土、第6層は粘土層、第7層は砂利層である。

第10～12層は地山粘土に近い土層であるが河川跡起源の堆積層である。

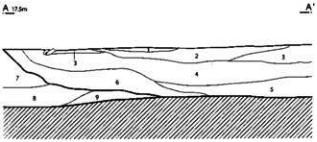
溝跡から出土した遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした時期のものが多く、一部溝跡の肩部などで古墳時代中期の遺物を検出している。また、確認面では奈良・平安時代の遺物が出土し、それ以降の遺物の出土は認められなかったことから、奈良・平安時代には埋まってしまった可能性がある。



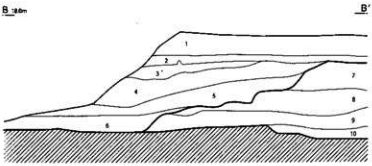
第437図　第79号溝跡区分図



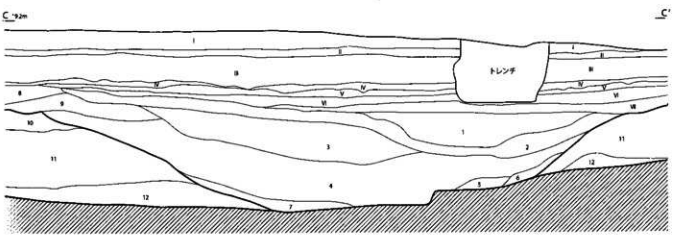
第438図　第79号溝跡全体図（1）



S D79 A-A'
1 黒褐色土　木片を多く含む　しまりやや弱い
2 黒褐色土　流木・木片・土器を混入　炭化粒子(横微圧)混入
3 青灰色土　青灰色粘土を主体　炭化粒子を混入
4 暗褐色土　木片を多く含む　流木混入　しまりやや弱い
5 暗褐色土　木片・砂粒を含む　やや粘質
6 灰褐色土　砂利層を主体とする
7 青灰色土　粘土層　炭化粒子を混入
8 青灰色土　粘土層　炭化粒子微量

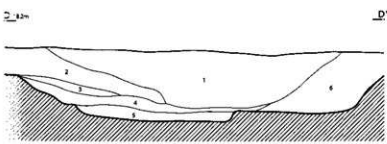


土層註記なし
1 暗褐色土　粘土層　白色粒子　炭化物粒子含む
2 暗褐色土　粘土層　白色粒子　炭化物粒子含む
3 暗褐色土　粘土層　白色粒子　炭化物粒子含む
4 青灰色土　粘土層　青色粘土を主体とする
5 暗褐色土　木片を多く含む砂利層
6 暗褐色土　木片を含む粘土層
7 暗褐色土　砂礫・砂利を含み木片を含む
8 暗褐色土　木片を含む粘土層
9 青灰色土　粘土層
10 褐色土　砂利層



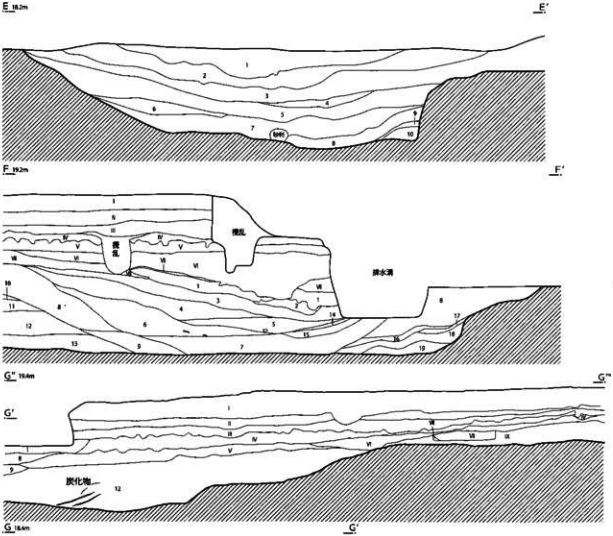
S D79 C-C'
I 黄褐色土　耕作土
II 黄褐色土　耕作土(暗緑十)　黄褐色粘質土
III 黄褐色土　耕作土(暗緑土)　黄褐色粘質土
II層よりやや灰褐色系で明るい
IV 黒褐色土　黒褐色土主体　炭化粒子
黒色鉄分マンガン粒子含む
V 灰褐色土　黒色鉄分マンガン粒子・黄褐色粒子含む
灰褐粘土層
VI 暗褐色土　褐鉄層土　木片含む　砂粒子少量
粘性ややあり
VII 暗褐色土　褐鉄層土　きめ細かく腐食土・木片含む
しまりやや弱い

1 暗褐色土　粘土層　白色粘土・炭化物粒子を含む
2 青灰色土　粘土層　青色粘土を主体とする
3 暗褐色土　粘土層　木片を含む
4 青灰色土　粘土層
5 青灰色土　砂質土
6 黄褐色土　粘土質
7 褐色土　砂利層
8 黒色土　木片を含む　しまり弱い
9 黒褐色土　木片を含む　粘土層
10 暗褐色土　粘土層　しまりもつ
11 青灰色土　粘土質
12 青灰色土　砂質土



S D79 D-D'
1 暗褐色土　粘土層　灰色粘土ブロック　砂質
2 暗褐色土　粘土層　灰色粘土ブロック　木片含む
3 青灰色土　粘土層　粘土ブロック
4 青灰粘土　粘土層　粘土ブロック　木片含む
5 青灰粘土　粘土層　粘土ブロック
6 青灰色土　粘土層　粘土ブロック

第439図　第79号溝跡全体図（2）



S D79 F-F'

I	黄褐色土　耕作土
II	黄褐色土　耕作土(暗渠土)　黄褐色粘質土
III	黄褐色土　耕作土(暗渠土)　黄褐色粘質土
	II層よりやや灰褐色系で明るい
IV	黒褐色土　黒褐色土主体　炭化粒子　黒色鉄分マンガン粒子含む
V	灰褐色土　黒色鉄分マンガン粒子・黄褐色粒子含む　灰褐粘土層
VI	暗褐色土　礫層覆土　木片含む　砂粒子少量　粘性ややあり
VII	暗褐色土　礫層覆土　きめ細かく腐食土・木片含む　しまりやや弱い
1	黒褐色土　灰褐粘土・黒褐色主体　炭化物・植物泥炭層含む
2	暗灰色粘土主体
3	黒褐色土　木片・植物・炭化物含む　しまりやや弱い
4	暗褐色土　木片・植物質含む　しまりやや弱い
5	暗褐色土　砂礫含む
6	暗褐色土　暗褐色土主体　砂粒子含む　しまり・粘性あり
7	暗褐色土に砂礫多量　木片・木材含む
8	暗褐色土　砂質土含む
9	暗褐色土　暗褐色土主体　しまり・粘性あり
10	灰褐色土　灰褐色粘土主体
11	青灰色土　青灰色粘土主体
12	青灰色土　青灰色粘土・砂含む
13	青灰色土　砂多量
14	青灰色土　砂含む　炭化物微在　しまりややあり
15	青灰色土　砂含む　炭化物・木片多量
16	青灰色土　粘土層　しまり・粘性強い
17	青灰色土　粘土層　黒褐色土含む
18	黒褐色土　木片含む　しまり・粘性あり
19	砂利層　砂礫主体

S D79 E-E'

1	暗褐色土　粘土層　白色粒子・炭化粒子含む
2	暗褐色土　粘土層　白色粒子・炭化粒子含む
3	暗褐色土　粘土層　白色粒子・炭化粒子含む
4	青灰色土　粘土層　青色粘土主体
5	暗褐色土　木片多量　砂利層と互相
6	暗褐色土　粘土層　木片含む
7	暗褐色土　砂礫・砂利・木片含む
8	暗褐色土　粘土層　木片含む
9	青灰色土　粘土層
10	褐色土　砂利層

S D79 G-G''

I	暗灰色土　鉄分・マンガン沈着　現水田層
II	暗灰褐色土　鉄分・マンガン沈着　現水田層
III	暗褐色土　鉄分・マンガン沈着　江戸期の水田層
IV	黒灰色土　炭化物含む　均質な粘土層　粘性強い
V	灰色土　炭化物　粘土質
VI	灰黒褐色土　炭化物　粘土質
VII	暗灰褐色土　炭化物　粘性もつ　住居跡覆土
VIII	灰色土　炭化物を層状に含む
IX	淡灰褐色土　鉄分・マンガン沈着
1	灰色土　鉄分・マンガン沈着　炭化物含む　粘性強い 調査区全面に堆積
2	灰黒色土　鉄分・マンガン沈着　火山灰(F A ?)含む 粘性強い　木片等含む
3	灰黒色土　火山灰(F A ?)・炭化物含む　粘性強い
4	黒灰色土　炭化物含む　均質な粘土層　粘性強い
5	黒色土　炭化物多量　粘性強い
6	灰黒色土　炭化物微量　均質な粘土層　粘性強い
7	灰黒色土　炭化物微量　均質な粘土層　粘性強い
8	灰黒褐色土　炭化物多量　粘性強い
9	黒色土　炭化物多量　粘性強い
10	黒色土　炭化物多量　粘性強い　木片等含む
11	黒色土　炭化物多量　粘性強い　木片等含む
12	灰色土　炭化物を層状に含むが分層不能　粘性強い 均質な粘土層

第440図　第79号溝跡全体図（3）

(1) 1トレンチ

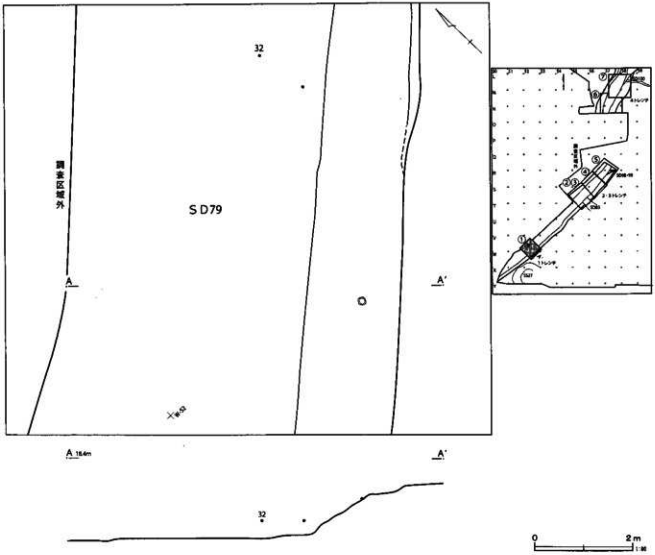
1トレンチは、南北10.0m、東西10.0mの範囲を掘削し、南側の壁面について断面観察を行った。調査区全体に堆積する第4層は、灰色土で粘土質である。第10層には火山灰（FA）を検出した。

遺物の出土状況は、集落側の東側斜面部分から古墳時代前期を中心とした土器を検出した。溝跡は北東側に伸びていることも確認できた。

さらに、本トレンチは、北側に延長し、第79号溝跡の対岸を確認した。溝跡の最大幅で約15.70mである。深さは1.20mを測る。このトレンチにより溝跡の北側にも自然堤防が広がっていることが確認された。しかも、G－G′の断面で第Ⅶ層と認識した堆積層は、住居跡の掘り込みによる覆土であり、床面の断面に炉跡の存在が認められた。北側は、調査範囲外であることから存在の確認にとどめた。このことから北側にも住居跡が展開している可能性が明らかになった。

トレンチでは、北側の肩部などからは、遺物も少量認められた。一方、集落側に面した南側の肩部からは多くの土器が出土し、本河川が南側に広がる集落と密接な関係にあったことがうかがえる。

反町遺跡は、第79号溝跡によって集落の境が形成されている可能性があるが、対岸の北側にも規模は不明であるが、集落の可能性が高い。



第441図　第79号溝跡1トレンチ遺物分布図

1トレンチ出土遺物

1～5は壺の胴部である。1・2・4は中位から底部までの破片である。いずれも球形胴で底部は突出する。1の外面は風化が進み調整が不明瞭である。刷毛目後ヘラ磨きが施されるものと思われる。2・4は刷毛目の後丁寧なヘラ磨きが施されている。いずれも内面はヘラナデにより平滑に仕上げられている。いずれの底部も輪台状である。1・2の底面には木葉痕が残る。4の底面はヘラケズリである。

3は底部が突出せずに、直線的に斜めに立ち上がるものである。底部は円板状で大きく、径14.8cmを測る。弥生時代後期の可能性がある。

5は唯一胴部全体が知れるものである。球形胴で、頸部の括れがやや緩いものである。頸部は「く」の字状に接合している。胴部内外面ともヘラナデの後ヘラ磨きが施されている。内面の磨きは中位のみに留まる。底部は突出し、底面はヘラケズリである。外面に煤が付着する。

6は壺の口縁部から頸部の破片である。直線的に開く口縁部で、頸部は「く」の字状だが屈曲は緩い。口縁部端部の外側に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出し、複合部の外周には横ナデを加えている。口縁部の外面はヘラケズリ後ヘラ磨きである。

7は鉢である。球形胴に短い直線的な口縁部が「く」の字状に接合するものである。口縁部は丸く収められている。内面は丁寧なヘラ磨きが施されている。内外面に煤が付着する。

8は五領式の甕である。球形胴に短い口縁部が「く」の字状に接合する。端部は面を持つ。外面はヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。内面はヘラナデである。

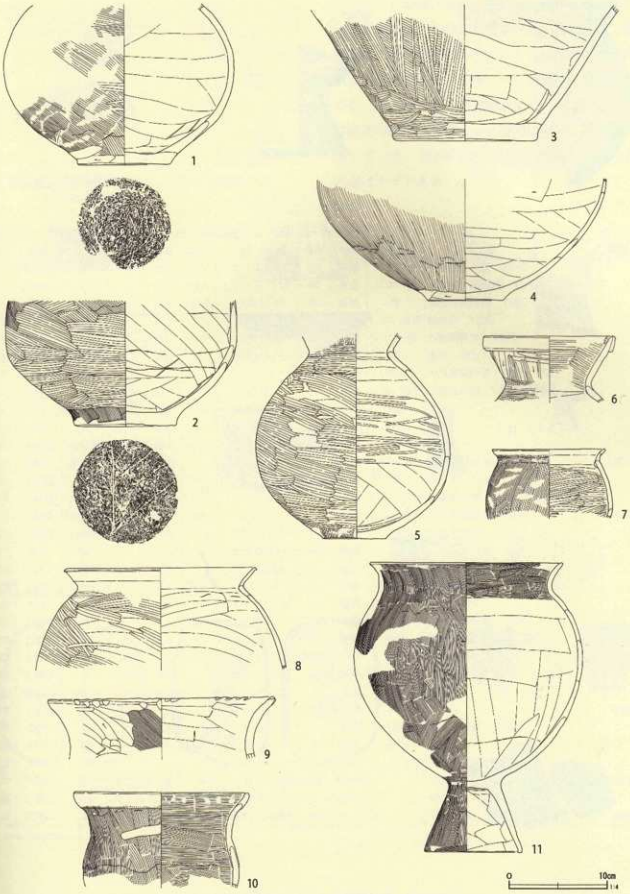
9・10は弥生土器である。9は宮の台式の甕で、口縁部に棒状交互押捺が施されるが、数単位毎に間隔が空いている。外面は強いヘラナデ後刷毛目、内面はヘラナデである。弥生時代後期初頭のものと考えられる。10は頸部があまり括れずに胴部に至るもので、全体に分厚い。調整は内外面とも刷毛目である。口縁部には横ナデが加えられている。弥生時代後期岩鼻式の甕と考えられる。

11・13～16は台付甕である。11は唯一全体の器形が知れるものである。球形胴で、短めで直線的な口縁部とやや屈曲の弱い「く」の字に接合している口縁端部は面を持つ。胴部はやや長めで、脚台部との接合はホゾ接合による。脚台部は小さめで頸部を経てやや長く伸びる「く」の字状口縁のもので、それに加えて胴部がやや長めになるものがある。脚台部は、やや高さのあるもので、しっかりしている。口縁部内外面は刷毛目、胴部から脚台部の外面は縦方向の刷毛目、内面はヘラナデによって非常に平滑に仕上げられているのが特徴である。脚台部の外面は刷毛目、内面はヘラナデである。

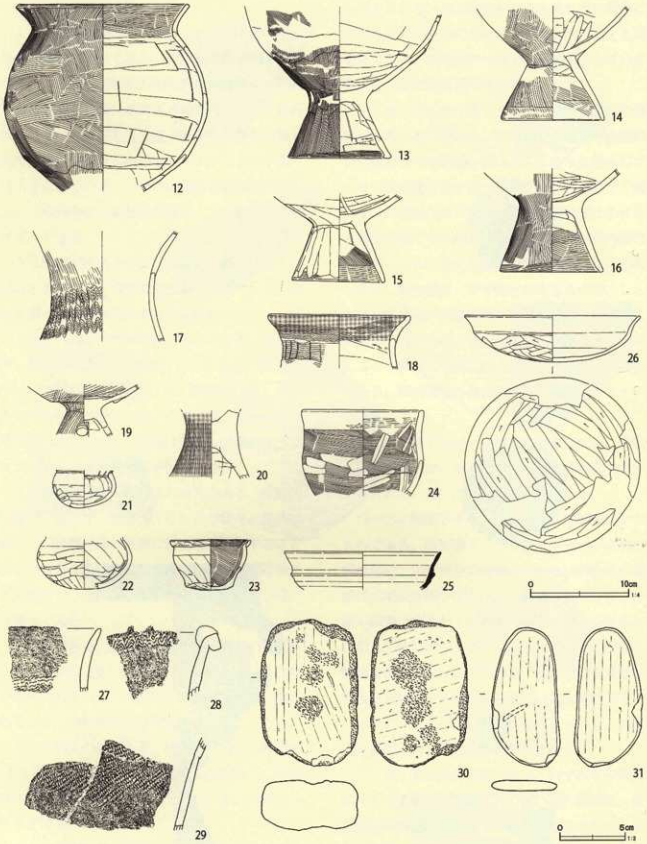
12は小型甕である。器形は11同様である。調整もほぼ同様だが、外面の中位に横方向の刷毛目が加えられている。内外面に煤が付着する。

13～16は胴部下半分から脚台部までが明らかなものである。球形胴で、やや高さの低い小さめの脚台部に、ホゾ接合で接続している。脚台部の端部は13が面を持つほかは丸く収められている。外面の調整は縦もしくは斜めの刷毛目で、15はそれに加えて縦位のヘラナデが施されている。内面の調整は胴部はヘラナデである。脚台部は天井部が粘土を充填してナデ付けられている。中位以下はヘラナデ、もしくは刷毛目が施されている。15は内外面に、14・16は外面に煤が付着する。

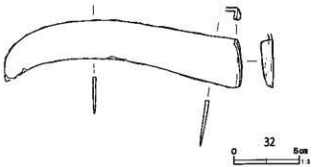
17・18・20は弥生土器である。いずれも中期後半のものである。17は括れの弱い壺の頸部で5条右回転の櫛描波状文が3単位以上施文される。それ以外はヘラ磨きが施されているようだが、器面の風化が進んでおり不明瞭である。弥生時代中期末から後期初頭のものと考えられる。18は括れの弱い小型の甕である。器肉は分厚い。外面は口縁



第442図　第79号溝跡１トレンチ出土遺物（１）



第443図　第79号溝跡１トレンチ出土遺物（２）



第444図　第79号溝跡１トレンチ出土遺物（３）

部下位から櫛描波状文、簾状文、波状文が下位に向けて施されるもので、波状文は10条１単位、簾状文は11条１単位で、いずれも右回転である。内面は口縁部が刷毛目後横ナデ、胴部はヘラナデである。内外面とも２次加熱が加えられている。20は高坏の脚部上位である。器肉は厚い。坏部は剥離している。外面にはヘラ磨きが施されている。内面はナデである。

第172表　第79号溝跡１トレンチ出土遺物観察表（第442～444図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	16.4	9.5	CGHIM	50	普通	にぶい橙	木葉痕　赤彩　X51G	
2	土師器	壺	－	12.8	10.3	CEGHIJM	95	普通	にぶい橙	木葉痕　輪台状　X51G	
3	弥生	壺	－	13.9	(14.8)	CEHIJM	40	普通	橙	底部外面黒斑　V53G	
4	土師器	壺	－	12.5	7.7	BCEHIJM	75	普通	にぶい黄橙	輪台状　V53G	
5	土師器	壺	－	21.0	6.5	EGHIJM	80	普通	にぶい橙	外面煤付着　X51G	
6	土師器	壺	13.4	6.8	－	CEGHIJM	70	普通	橙	風化　X51G	
7	土師器	鉢	(11.6)	7.1	－	CEGI	30	普通	褐灰	内外面煤付着　風化　V54G	
8	土師器	甕	(19.2)	10.5	－	EGHI	20	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　V53G	
9	弥生	甕	(22.8)	6.3	－	BCGHI	10	普通	灰褐	V53G	
10	弥生	甕	(17.7)	9.8	－	ACGIM	25	普通	褐灰	V53G	
11	土師器	台付甕	19.6	29.4	10.1	CGHIM	60	普通	灰黄褐	X51G	
12	土師器	小型甕	17.3	19.2	－	EGHIM	75	普通	灰黄褐	内外面煤付着　X51G	117-7
13	土師器	台付甕	－	15.5	10.6	CEGIJM	60	普通	橙	煤付着　X51G	
14	土師器	台付甕	－	10.5	11.7	CEGHI	50	普通	にぶい黄橙	外面煤付着　V53G	
15	土師器	台付甕	－	9.0	9.5	CEGI	75	普通	にぶい黄橙	内外面煤付着　V53G	
16	土師器	台付甕	－	10.5	10.6	CEGIJM	60	普通	にぶい橙	外面煤付着　X51G	
17	弥生	壺	－	11.2	－	BCGHI	80	普通	にぶい橙	内外面煤付着　V53G	
18	弥生	小型甕	(14.4)	5.5	－	CEGHIJ	25	良好	灰褐	赤彩	
19	土師器	高坏	－	5.3	－	BEIM	50	普通	橙	内外面煤付着　一孔　V53G	
20	弥生	高坏	－	7.0	－	BCEGHIM	95	普通	にぶい橙	赤彩　X51G	
21	土師器	坩	－	4.8	－	CEI	95	普通	灰黄	内外面煤付着　V53G	
22	土師器	鉢	－	5.0	－	CEGIJ	25	普通	黄灰	外面黒斑　V53G	
23	土師器	鉢	(8.2)	5.2	4.8	BCEHI	80	普通	浅黄	外面黒斑　V53G	124-5
24	土師器	鉢	(12.4)	8.8	－	BCEGHI	25	普通	にぶい橙	内面煤付着　V53G	
25	須恵器	高坏	(16.0)	3.9	－	IK	10	普通	灰	U54G	
26	土師器	坏	17.8	4.7	－	CHI	80	普通	にぶい橙	W52G	146-5
27	弥生	甕	－	4.8	－	AEHI	5	普通	灰褐	外面煤付着　V53G	
28	弥生	壺	－	5.2	－	ACI	5	普通	灰白	W52G	
29	弥生	甕	－	7.1	－	CEI	5	普通	にぶい褐	外面煤付着　X51G	
30	石製品	敲石	長さ11.2　幅7.5　厚さ3.9　重さ500.9　石材　安山岩							V53G	154-1
31	石製品	砥石	長さ10.7　幅5.3　厚さ0.9　重さ91.2　石材　緑泥片岩							V53G	
32	鉄製品	鎌	長さ18.0　幅3.7(最大)　背厚0.25(最大)　重67.02							V52G　No.1	149-5

19は五領式の高坏である。坏部下半から脚部上位の破片である。坏部の下位に粘土を貼付して段を作りだしている。脚部には径1.0cm程度の透孔が外側から開けられているが、個数は不明である。内外面に煤が付着する。

21は坩である。扁平な胴部のみの破片である。若干残る口縁部の外面にはヘラ磨きが、内面にはヘラナデが施されている。胴部外面はヘラナデ後、ヘラケズリ、内面はナデである。内面には指頭痕が明瞭に残っている。口縁の欠け口が摩耗しており、このままの状態で使用されていた可能性がある。内外面に煤が付着する。

22～24は鉢である。22は坩の可能性もある。内外面ともヘラナデが施されている。23は複合口縁になっている。複合部の外面には指頭痕が残り、横ナデが施される。胴部はナデ、底面はヘラケズリである。一般的な形態ではないため、在来のものではない可能性もある。内面は全体に刷毛目が施される。24は鉢である。口縁部から緩やかに胴部下位に至るもので、器肉は厚い。胴部はヘラケズリ後、刷毛目が施され、更にナデが加えられている。外面は赤化し、内面には煤が付着する。

25は須恵器無蓋高坏である。26は古墳時代後期の土師器坏である。

27～29は弥生土器である。27は岩鼻式の甕の口縁部の破片である。下半を欠くため不明だが、頸部に4条以上右回転の櫛描波状文が施されている。28は岩鼻式初頭の壺口縁部で、口縁端部を更に外側に広げ、その下に粘土を貼付して複合部とするものである。端部上面と複合部外面に3条1単位の櫛描波状文が施され、更に口縁端面には2個一対の棒状浮文が貼付されている。29は吉ヶ谷式の甕胴部である。外面に単節LRの縄文が2段施文されている。27・29は外面に煤が付着する。

32は鉄製鎌である。先端の一部がわずかに欠損する。刃部は磨滅し磨り減っている。基部は折れ曲がり、柄に装着されていたものである。

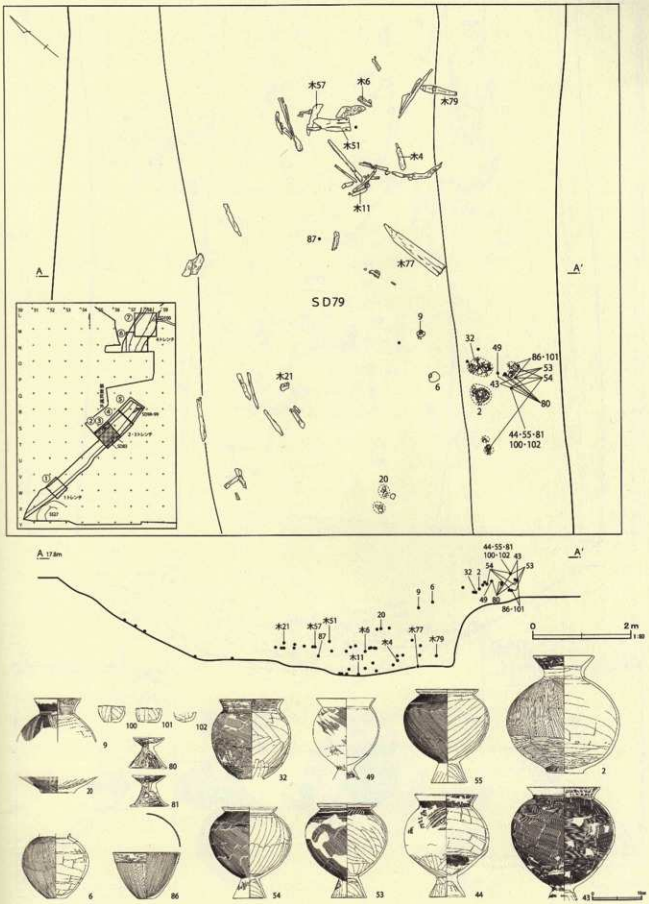
（2）2・3トレンチ

2・3トレンチは、南北12.6m、東西33.7mの範囲を掘削し、南側の壁面について断面観察を行った。第83号溝跡と合流する。

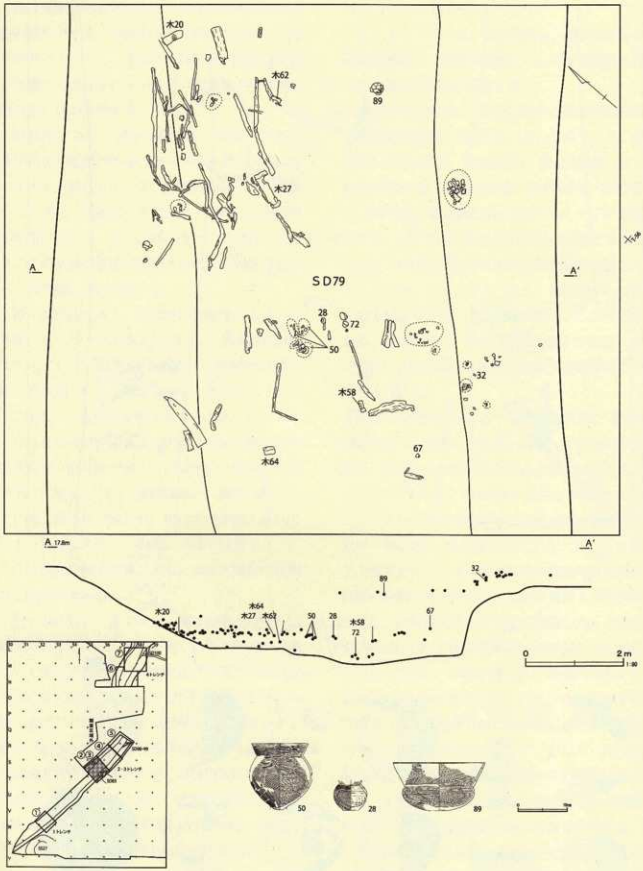
遺物の出土状況は、集落に接する南東側の肩部で古墳時代前期の土器がまとまって出土した。第449図2の大型壺、第451図32・第452図43・44・第453図49・53～55の台付甕、第454図80・81の器台、86の甑、第455図100～102のミニチュア土器である。いずれの土器も完形に近い状態であることからこの場所が、何らかの土器祭祀の空間としてとらえることができる。また、溝跡内からは多くの木製品が出土した。第470図4・6は竪杵である。第480図77・第481図79は梯子である。第478図51・第479図55は板状の製品で建築部材の一部とみられる。

北寄りの溝跡内からは、第472図20の鍬、第473図27の足つきの槽なども出土した。これらの木製品は、周囲から古墳時代前期の土器が共伴することからいずれもこの時期のものと判断される。2・3トレンチの中間部分では北西側の溝跡肩部分から第469図1の馬鍬が出土した。これらは覆土上層であることから古墳時代中期以降奈良時代以前の時期が考えられる。馬鍬の資料3点を科学分析し、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、馬鍬の歯は暦年代範囲が577AD－648AD、607AD－659AD、の値が得られ、馬鍬の台木から559AD－643ADの年代が得られた。7世紀前半代である。本集落域からはこの時期にあたる住居跡は今のところ検出されておらず、むしろ、出土状況から見ても第79号溝跡の北側からの投げ込みであり、本集落の対岸にあたる北側に何らかの遺構が存在していた可能性を示唆させるものである。

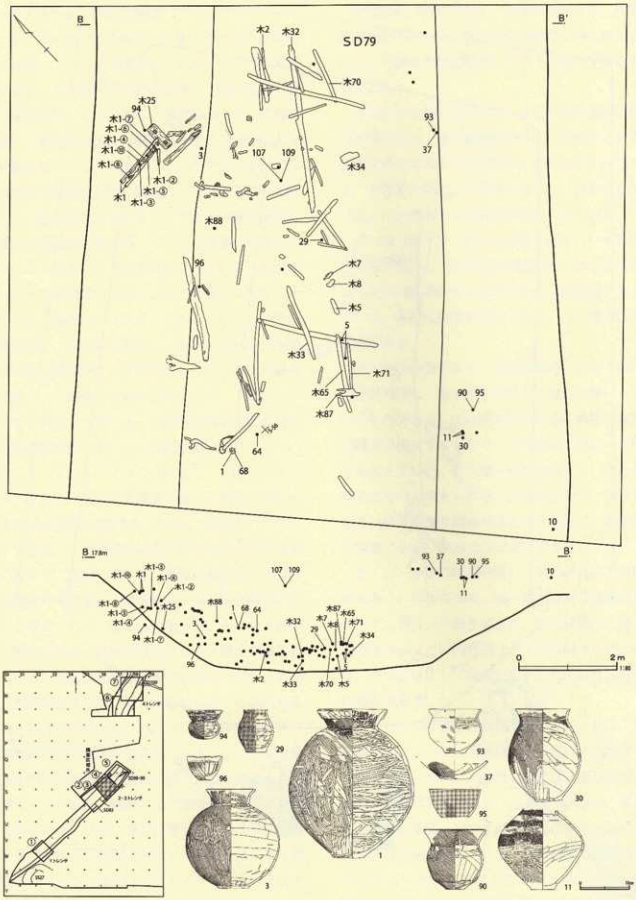
土器は確認面から第455図107～109の須恵器坏を検出し、この時期には溝跡が機能を停止し埋没していることがわかる。覆土下層からは古墳時代前期の土器群を検出した。



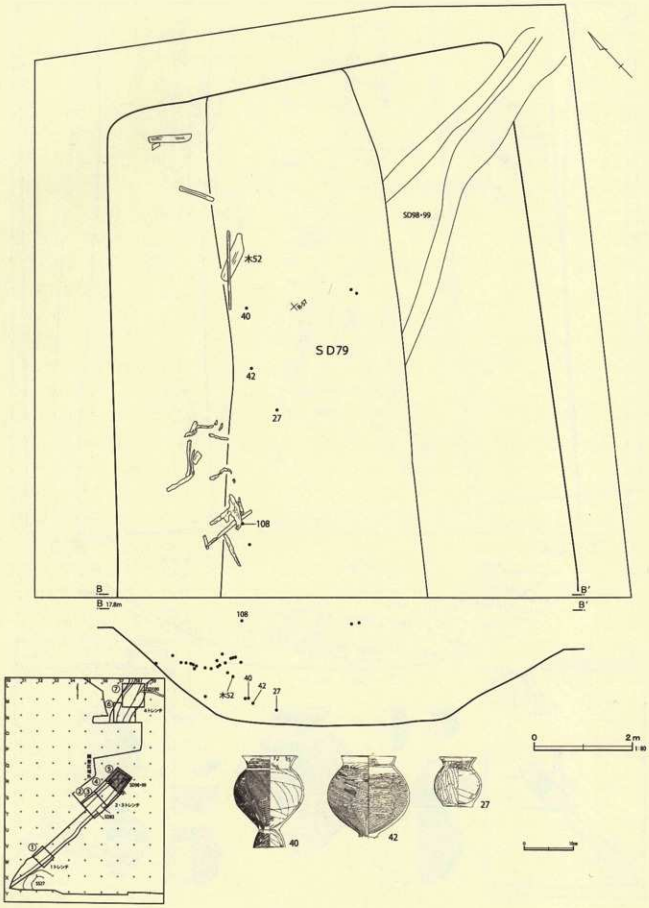
第445図　第79号溝跡２・３トレンチ遺物分布図（１）



第446図　第79号溝跡２・３トレンチ遺物分布図（２）



第447図　第79号溝跡２・３トレンチ遺物分布図（３）



第448図　第79号溝跡２・３トレンチ遺物分布図（４）

2・3トレンチ出土遺物

1～27・29は壺である。法量には大中小が認められる。1～3はほぼ完形である。1・2は大型である。1の壺は長めの球形胴に、短い直線的な口縁部が付くものである。器高38.0cmで、器肉が厚く、重量感がある。胴部は大きく5段の粘土帯が積まれている。頸部は「く」の字状に接合する。口縁部は端部の外周に幅の広い薄い粘土帯を貼付して、複合部を作り出すものである。複合部の外面には指頭痕が多く残っている。胴部の外面はヘラケズリ後太いヘラ磨きが施されている。内面もヘラナデ後同様の工具によりヘラ磨きが加えられている。底面はヘラケズリである。2・3の壺は、球形胴に、頸部から直立し、中段から外反する短めの単口縁部が付くものである。2はやはり器肉が厚く、1同様の太めの工具により、丁寧なヘラミガキが施されている。口縁部は端部に面を持ち、内面は稜を持っている。底面は輪台状になっている。3・4は1・2よりも小さく、中型といえよう。3は1・2よりも薄手である。胴部の中位に径1.3cmの穿孔が施されている。底面はヘラケズリである。4も同様の器形だが口縁部上段が外側に開かず、直立している。胴部内面にもヘラ磨きが施されている。5は大きく、1・2と同様のものと考えられる。底部は突出せず、そのまま斜めに胴部に至る。底部の外周にはヘラ磨きが施されている。内面は見込みの部分が盛り上がり、底部と胴部の接合の際に強く圧着したものと思われる。胎土に玉髄を含んでいる。6は縦長の球形胴で、底面までヘラ磨きが施されている。7は頸部の屈曲が緩やかなもので括れが弱く、口縁部は大きく開くようである。底面には、やはりヘラ磨きが施されている。外面に煤が付着する。8は5と同様のものである。内面は木ロナデと刷毛目により調整されている。底面はヘラケズリである。9は4と同様のもので、こちらの方が口縁部が外反している。

10は細長い器形である。底部は突出せず、円板状になることから、弥生時代後期のものと考えられる。外面は不明瞭だがヘラケズリ後ヘラ磨きが施される。

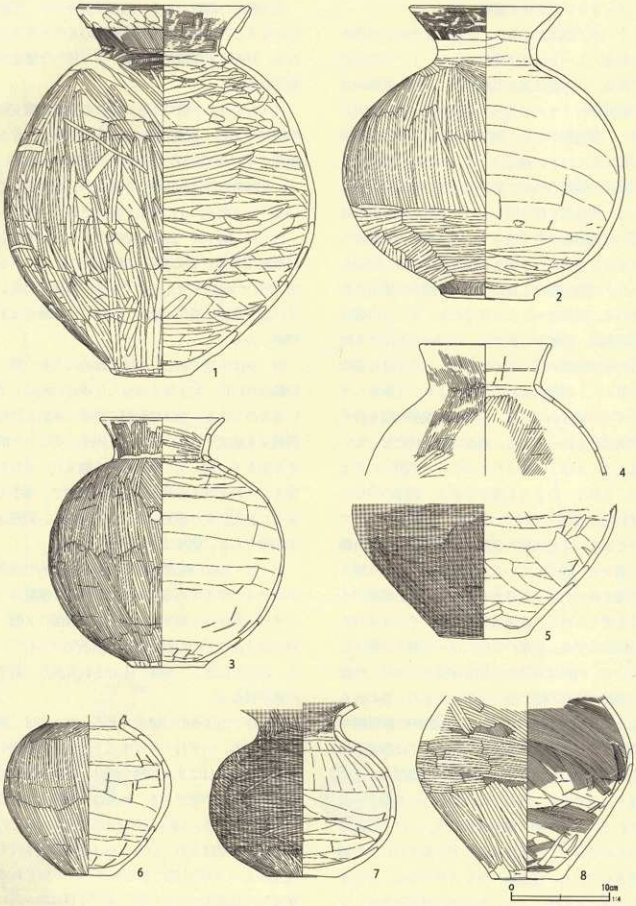
11は吉ヶ谷系の壺である。中位の張る算盤玉形の胴部である。底部は突出せず、円板状である。胴部上半に単節RLの文様帯が3段施文されている。文様帯の間はヘラ磨きが施され、赤彩されている。ヘラ磨きの上に縄文が施文されている。

12・13・24～27・29は小型壺である。いずれも球形胴である。12の底面は輪台状になっている。13は短い口縁部が付くものである。端部は欠失している。器面は風化が進んでおり、ヘラ磨きは不明瞭である。

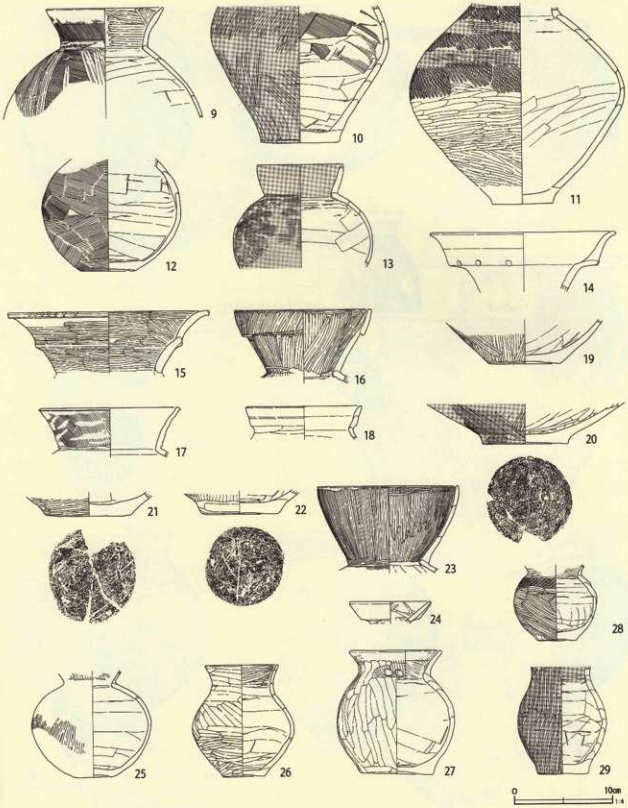
24・28は小型である。24は直線的に大きく開く口縁部外周に、粘土帯を貼付して複合口縁にしているものである。28は球形胴の肩部に単節LRの斜縄文を施文するもので、上下両端に更にヘラ磨きを加えている。ヘラ磨き後縄文施文し、それを整えたものと考えられる。25は球形胴で、薄手である。風化により器面がほとんど剥落し、調整は不明瞭である。胴部はほぼ完形である。

26・27・29は口縁部が短く、胴部が長めで底部が大きく、厚手である。26・27の外面の調整はヘラナデ、29はヘラ磨きである。27は肩部に2個一対の径8mmほどの円形浮文が1箇所貼付されている。29は27に比して細身で赤彩されており、若干印象が異なる。

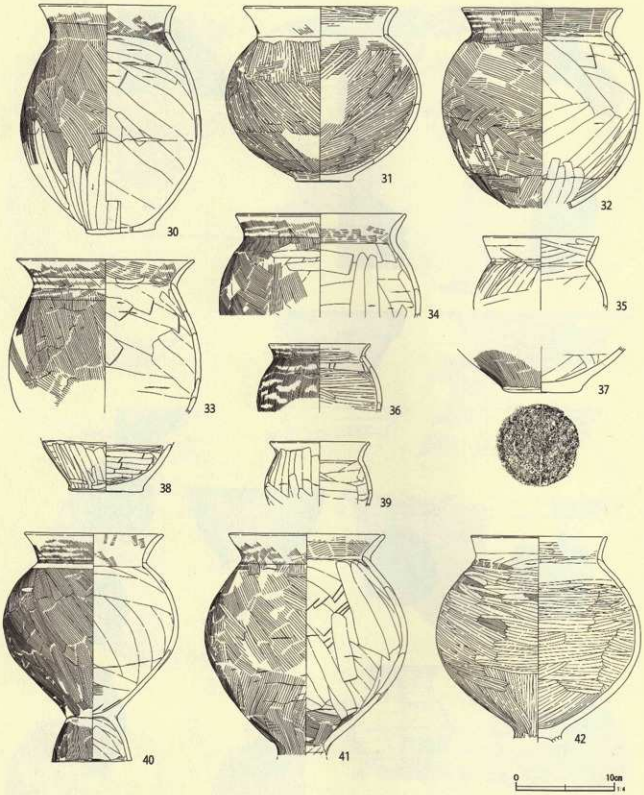
14～17・23は壺の口縁部である。14・15は二重口縁である。いずれも外反する下段に上段を乗せる形である。14は2次加熱を受け、器面が荒れており、調整は不明である。外面はヘラ磨き、赤彩の可能性がある。14の上段の下部に径6mmほどの円形浮文が貼付されている。15は端部に面を持ち、左上からヘラ状工具によるキザミ目が施される。破片のため確実ではないが、キザミ目は数か所に間隔をおいて施されているようである。16は複合



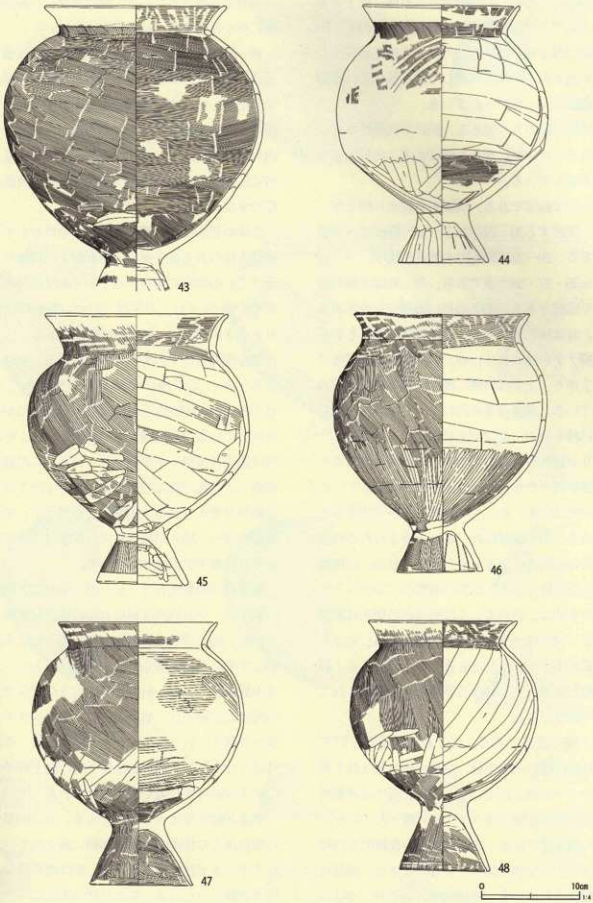
第449図　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物（１）



第450図　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物（２）



第451図　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物（３）



第452図　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物（４）

口縁のものである。口縁端部から外側に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出すもので、内面に緩い段が見られる。内外面とも刷毛目後ヘラ磨きが施される。23は内湾して長く延びる口縁部で、端面は丸く収められている。

17は単口縁のものである。長めで直線的である。

18はS字状口縁になるものである。内外面とも風化が進んでいる。

19～22は底部である。底面から斜めに開く19・21と、突出する20・22がある。19の底面はヘラ磨きである。20～22は底面に木葉痕が残る。

30～35・37・38は甕である。30・31は全形の知れる平底甕である。30は細長い器形で、歪みが大きい。31は球形胴である。口縁部はいずれも刷毛目後横ナデが施されている。頸部から直立気味に立ち上がり、上半は外側に開く。端部は丸く収められている。頸部は基本的に「く」の字に屈曲し、内面に稜を持つ。30は刷毛目調整で、下半にヘラケズリが加えられるのに対し、31は内外面ともヘラ磨きが施される。31は外面に煤が付着している。

32～35は底部、もしくは胴部下半が欠失するものである。35が球形に近いものと考えられる他はやや長めの胴部になるものと考えられる。口縁部は31・32同様である。胴部の調整は、35がヘラナデである他は、斜めもしくは縦方向の刷毛目調整である。内面はヘラナデが施されている。35はやや法量が小さく、中型とも言えるものである。調整も他とは異なり、異なる器種として意識されていた可能性がある。

37・38は底部である。いずれも突出している。胴部外面には37が刷毛目、38がヘラケズリ後丁寧なヘラナデが施されている。37の底面には木葉痕が残り、38の底面にはヘラナデが施されている。

36・39は鉢である。球形胴に短い直線的な口縁部が「く」の字状に接合するものである。端部は丸く収められている。外面は36は刷毛目、39はヘラナデが施されている。36の内面にはヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。36は外面に、38は内外面に煤が付着する。

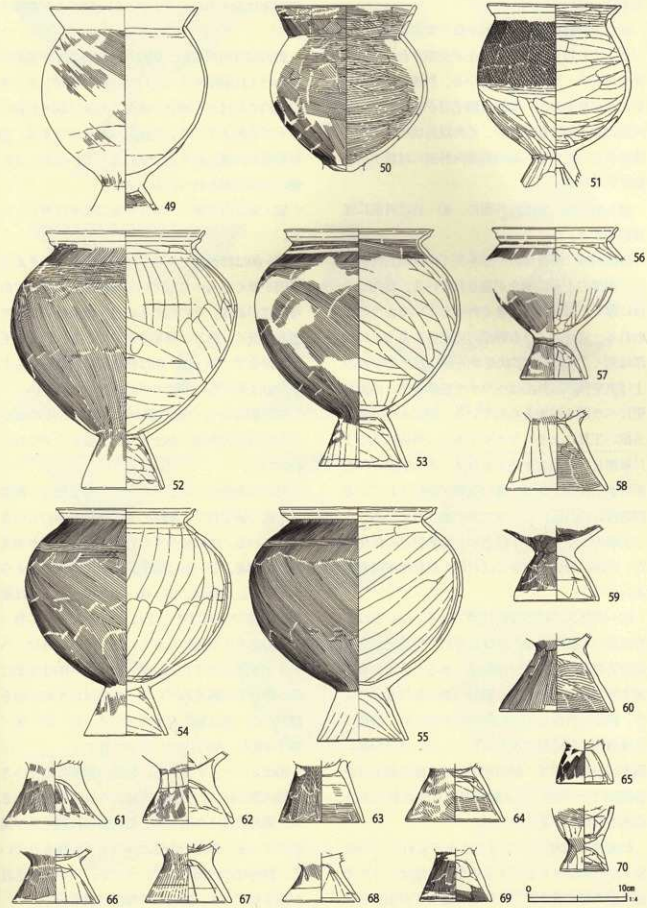
40～50は全形の知れる刷毛目調整の台付甕である。40・45・46はほぼ完形である。46は口縁部の歪みが著しい。刷毛目調整を基本とするが、全体にヘラ磨きが施されるものがあるのが特徴である。内外面の風化により47は調整がほとんど見えず、49は2次加熱による器面の傷みが激しく同様に観察できない。

全体の器形は、いずれも胴部の中位からやや上に最大径のある若干長めの球形胴で、口縁部は短く「く」の字状に接合する。45・46は頸部の屈曲がやや弱く、「し」の字状に近い。脚台部はいずれも小さめで、40・46は特に低平である。

口縁端部はいずれも丸く収められる。46は左上からヘラによる浅いキザミ目が施されている。41・49・50は直線的だが、ほとんどのものが若干外反している。42は横ナデのみによって、それ以外は刷毛目後横ナデが施されている。この器形は親指と人差指で挟んで横ナデによって仕上げられた結果と考えられる。内面は42が横ナデ、50が刷毛目の後ヘラ磨きが施されている他は、外面同様刷毛目後横ナデが施されている。

胴部外面の刷毛目は、42・43・50がほぼ横方向の刷毛目、それ以外は斜め方向の刷毛目が施されている。50の下半は斜め方向である。42は全体に、46は下半に、44は部分的に、刷毛目の上にヘラ磨きが施されている。44の下半はヘラケズリである。内面は43が刷毛目、42・46・47・50がヘラナデの後ヘラ磨き、41・44がヘラナデ後刷毛目、それ以外はヘラナデである。43は最下段の粘土帯の外面に粘土が貼付され強くナデられている。

胴部と脚台部はホゾ接合である。42は胴部下端の脚台部との接合面に脚台部側に施されていたヘラナデがネガ状に残っている。50は臍を残した状態で剥離したもので、やはり臍の表面にヘラナデがネガ状に残っている。脚台部は小さく、端部は



第453図　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物（５）

面を持っている。

46の天井部には挿入された臍が突起状に見えている。それ以外は隙間に粘土が充填されて強くナデつけられ、平坦になっている。外面は44にヘラケズリが施されている他は刷毛目が施されている。内面は47～49に刷毛目が、それ以外はヘラナデが施されている。45・48の端部内外面には横ナデが施されている。

42・43・46・50は内外面に、40・45は外面に煤が付着する。

51は同様に脚台部の一部を欠くのみの台付甕だが、胴部の上半に縄文が施されている。器肉は全体に厚く、脚台部も大きく外反しているように思われる。高坏のような脚部の可能性もある。口縁部は短く、「く」の字状だが外側に粘土帯の積み上げ痕を残す。外面はヘラナデ後横ナデ、内面は更にヘラ磨きが加えられている。胴部も内外面とも細い工具によるヘラナデである。外面はその上に単節ＲＬの縄文が施文されている。胴部と脚台部はホゾ接合である。薄い突帯が貼付されている。脚台部の内外面にもヘラナデが施されている。

内面の下半４分の１ほどに、お焦げ状の炭化物が、外面には煤と吹きこぼれ状の炭化物が付着する。

52～56はＳ字状口縁台付甕である。52～55は完形に近いものである。全体に厚めで重量感があり、胎土も在地のもので、模倣品である。いずれも胴部上半に最大径があり、箱形の脚台部になっている。胴部の外面は羽状の刷毛目が施され、肩部には横方向の刷毛目が加えられている。52は胴部の刷毛目が櫛歯風で、脚台部の斜め方向の刷毛目を等間隔でナデ消して、端部が折り返されており、忠実な模倣といえるであろう。

口縁部は横ナデによって仕上げられているが、52・53は頸部から直立する内面に、52はヘラナデ、53は刷毛目が施され、その上に横ナデが加えられている。52・53は更に端部が摘まれている。胴部の内面は52・53がヘラナデ、54～56がナデ調整である。

脚台部は箱形だが、胴部との接合は52が箱形のものの上に胴部を立ち上げていくのに対して、その他のものはホゾ接合である。外面は刷毛目後ヘラナデを加えている。内面はヘラナデである。52は端部が内側に折り返し状になっているが、その他のものは面を持つのみである。

52・56は内外面に、54は外面に煤が付着している。

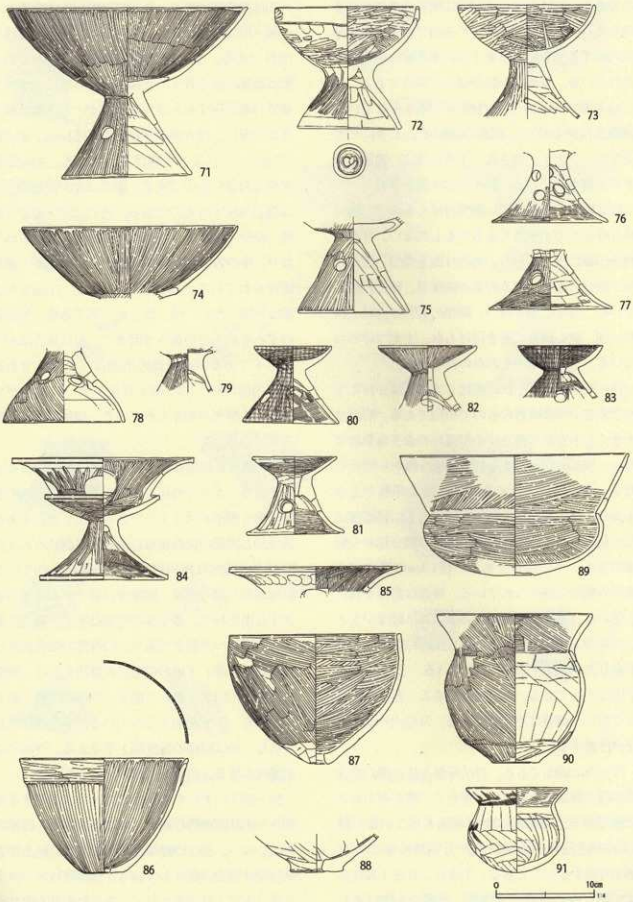
57～69は脚台部である。58・60はやや大きめで、器肉が厚くしっかりしている。65はミニチュアの可能性がある。その他のものは、概ね径に対して器高が低く、新しい様相を示している。いずれもホゾ接合で、58・63・69は接合部に剥離が見られ、58・63はその面に指頭ナデが施されている。

63は胴部からの臍の形がはっきりしているが、それ以外は天井部に粘土を入れ、強くナデつけられている。

外面の調整は、58がヘラナデである他は、胴部と一連の刷毛目で、胴部のものが脚台部のものを切っている。62は接合部の外周に強いナデが加えられている。57・64は刷毛目の上にナデが加えられている。内面は、58・60・61・63・64・69は刷毛目調整で、61はその上にヘラケズリが、63・64・69はナデが加えられている。それ以外は、ヘラナデが施されている。59・61・67～69は端部に強い横ナデが施されている。端部はいずれも面を持つ。62・68は風化が進んでいる。57・60・66・69は外面に、58は内面に煤が付着する。

70はミニチュアである。細長い胴部にごく小さな脚台部が付く。外面は全体にヘラケズリが施され、胴部にはヘラ磨きが、脚台部には刷毛目が施されている。胴部の内面はヘラナデが施されている。脚台部の内面は上半にナデが、下半に刷毛目が施されている。脚台部の端部は面を持つ。

71～79は高坏である。71・72は全形の知れるも



第454図　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物（６）

のである。71は大きく直線的に開く坏部に、高さのあるハの字形の脚部が付くものである。坏端部は内傾する面を持ち、最下位に不明瞭な稜が表現されている。脚部との接合はホゾ接合である。径1.3cm程度の透孔が三孔外側から開けられている。脚端部は面を持つ。脚部の内面は、上半にナデ、下半にヘラナデが施され、下半には広い範囲で横ナデが施されている。胎土には片岩を含む。

72は埦形の坏部に短い脚部の付くもので、脚付鉢と呼んだ方が適当であるかもしれない。坏部は複合口縁になっており、端部は面を持つ。接合はホゾ接合である。厚みのある脚部が、短く内湾している。端部は面を持つ。脚部の天井には粘土紐が一周、臍の周りに巻き付けられ、ナデつけられている。吉ヶ谷系のものなのだろうか。

73～76は坏部とそれに連続して柱状部が付くものである。73は埦形のもので小型である。脚部は大きく八の字形に開き、小型高坏のような器形である。径8mmほどの透穴が4箇所外側から開けられている。74は大きく直線的に開く坏部である。坏部の下位に緩い稜を持つ。いずれも口縁端部は丸く収められている。75は、太目の接合部から脚部に至る。ホゾ接合である。径1.3cmの透穴が3箇所外側から開けられている。坏部は器面が風化しており、調整が不明瞭である。76は脚部が大きく八の字に開くもので、径1.1cmの透穴が2段、千鳥状に外側から開けられている。上段は三孔、下段は六孔である。ホゾ接合である。器面が風化しており、調整は不明瞭である。74の内外面には煤が付着する。

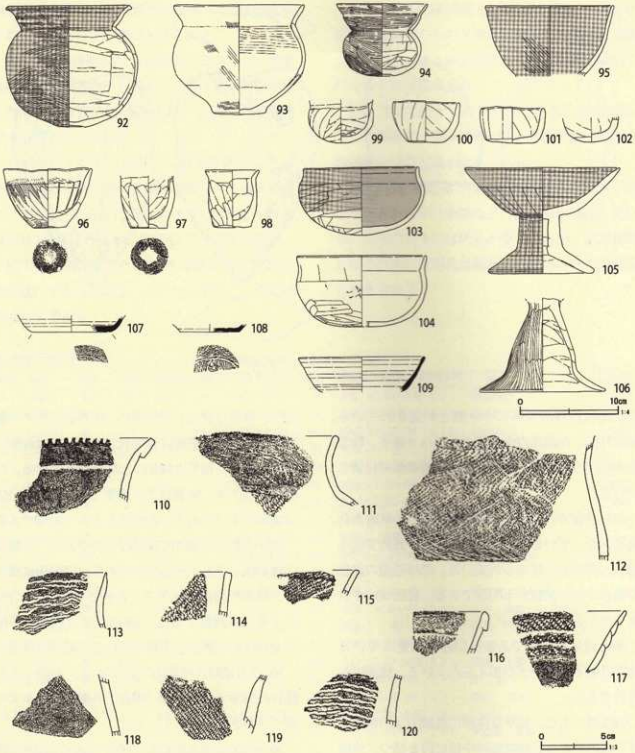
77・78は脚部である。77は坏部と柱状部の接合部が残る脚部である。ホゾ接合で、臍が剥がれた状態である。剥離面にナデが施されている。径1.2cmの透孔が3箇所外側から開けられている。78は内湾するものである。上位に二孔を1単位として径1.0cmの透孔が2箇所、外側から開けられている。

79は接合部である。外面には煤が付着する。

80～83は器台である。器受部は、80・83は浅い埦形である。81・82は浅い直線的なものである。82は端部のみを若干つまみ上げ、外周に面を持たせている。いずれもホゾ接合だが、81・82は接合部が分厚い。接合部の穿孔は81が径1.4cm、82が径1.2cmでヘラによって開けられている。80は穿孔が見られないものである。脚部は80が直線的、81は裾が外反するものである。透穴は80・81が3箇所、82が4箇所で、いずれも外側から開けられており、80のみ上段にやや径の小さい円孔が1箇所開けられている。径は1.2cm、1.4cm、1.0cmである。83は欠損のため、径、数とも不明である。外面はいずれも刷毛目の後ヘラ磨きで、81は接合部がヘラナデである。器受部の内面はヘラ磨きである。脚部内面は82・83が刷毛目後ナデ、81はナデで、更にヘラ磨きが加えられている。端部は丸く収められている。

84・85は装飾器台である。84は全形の知れるものである。大きく外反して開く器受部に、八の字状に開く脚部が付くものである。ホゾ接合である。器受部と脚部の接合箇所には穿孔が認められない。器受部の透穴は楕円形で4箇所開けられている。口縁端部と鍔の端部、脚端部は横ナデが施され直立する面を持つ。器受部の外面は刷毛目後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きである。口縁部の接合箇所に剥離が見られ、下地の刷毛目が認められる。脚部の外面は木口ナデ後ヘラ磨き、内面は上位に絞り目が残り、ナデが加えられている。下半は刷毛目である。85は同様の器受部上半である。外面には指頭痕が残る。内外面に煤が付着している。

86～88はいずれも単孔の甑である。内湾する体部から86は直線的に開き、87は直立する。底部は突出しない。86は口縁端部を包むように粘土帯を貼り付け複合口縁にしている。端部にはヘラによる浅いキザミ目が施されている。いずれも内外面にヘラナデの後丁寧なヘラ磨きが施され、精製さ



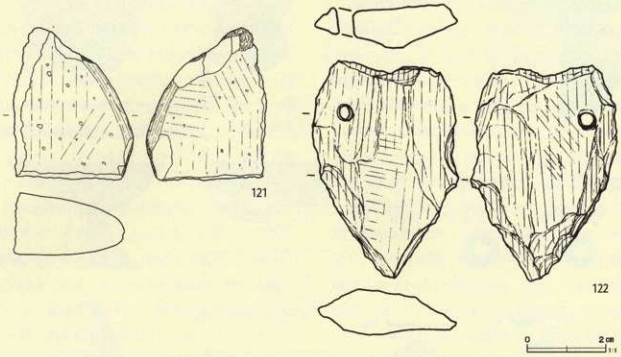
第455図　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物（７）

れている印象を受ける。88は底部が突出し、内外面ともヘラナデが施されている。

86・87は煤の付着が認められないが、88は内外面に煤が付着する。

89～93・96は鉢である。一つの器種としたが形態は様々である。基本的な形態は、球形胴に短い直線的な口縁部が「く」の字状に接合するものである。

89・90は大型で、口縁部が長いものである。いずれも底部は突出せず、ヘラケズリが施されてい



第456図　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物（８）

る。89は内外面全体にヘラ磨きが施されている。90は外面、口縁部内面が刷毛目後ヘラ磨き、体部の内面がヘラナデである。89は外面に煤が付着している。

91は体部が分厚く、全体にヘラナデが施され、丸底になっている。92の口縁部はやや長めで面を持ち、93は丸く収められている。93は器面の風化が進んでおり調整が不明瞭である。底面はいずれもヘラケズリである。

96は埦形のものである。口縁部は歪んでいる。体部は刷毛目後ナデが加えられている。底面は輪台状である。

94は坩である。扁平な体部に直線的な口縁部が付くものである。口縁部は中位に段を持つ。体部の外面はヘラナデ後刷毛目が施され、その上にヘラ磨きが加えられている。底面はヘラケズリである。

95は坩としたが、小型壺の口縁部の可能性もある。体部は小さなものと考えられる。器面の風化が進んでおり調整が不明瞭である。

97～99はミニチュアである。97・98は壺形のもので、体部は直立して分厚い。内外面ともナデ調整である。97の底面は輪台状である。99は鉢形のものである。扁平な体部に口縁部が直立する。口縁部は横ナデ、体部はナデ調整である。100～102は埦形の手づくねで、内外面ともナデ調整である。

103～105は古墳時代後期のものである。坏類は口縁が短く立ち上がるものである。口縁部は横ナデ、体部外面はヘラケズリが施されている。104の上半は無調整である。105は高坏で浅めの坏部に太い柱状の脚部を圧着している。器肉は分厚い。

106は古墳時代中期のものである。中膨らみの柱状の脚部である。ホゾ接合で外面はヘラケズリ後ヘラ磨きが施されている。

107～109は須恵器の坏の破片である。107は回転ヘラケズリ、108は回転糸切りである。108は孤状のヘラ記号が描かれている。いずれも南比企産である。

110・113・116・120は弥生時代のものである。

113・120は後期初頭の甕である。双方とも２条一単位、左回りの太い櫛描波状文が４段以上施文されている。113は頸部以下に異なる原体による

施文が施されている可能性がある。120は破片の中央で丁度切り合い関係が見られる。

110・116は後期前半の岩鼻式の壺である。前者は複合部に上方向から刷毛目工具による押捺が施されている。116は５条一単位、右回りの櫛描波状文が施文されている。

111・112・114・117は吉ヶ谷系と考えられる。弥生時代のものに比べて縄文が細かく、施文が乱れており、古墳時代前期のものと考えられる。111の口縁部は外反し、肩部以下が文様帯となっている。117が壺、それ以外は甕と考えられる。縄文はいずれも単節で、117・119がＲＬ、それ以外はＬＲである。

118の甕は焼成が良く、硬質で質感が異なり、古墳時代前期のものと考えられる。単節ＲＬが施文され、ヘラ磨きが加えられている。他地域のものである可能性がある。

121・122は出土した石製品である。121は砥石で、右側縁の一部が残存するが他は欠損している。右側縁には敲打痕が認められる。

122は石製模造品と考えられる。表面は粗く研磨が施されるが、剥離などの調整痕が残存している。器面の左上には円孔が穿たれるが、左右対称となる右側には円孔は認められなかった。未製品と考えられる。

第173表　第79号溝跡２・３トレンチ出土遺物観察表（第449～456図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　考	図版
1	土師器	壺	17.2	38.0	8.0	BCEGHI	95	良好	にぶい黄橙	2トレ　R55GNo3	90-2
2	土師器	壺	(15.3)	30.2	9.5	AEGHIM	95	普通	にぶい黄橙	2トレ　輪台状　S55GNo15	91-2
3	土師器	壺	12.4	25.5	7.3	BCEHIJM	90	普通	にぶい褐	2トレ　R56GNo31	92-1
4	土師器	壺	(13.2)	13.5	－	CEGHIM	20	普通	橙	2トレ　U53G	
5	土師器	壺	－	13.8	9.4	CEHI	60	普通	にぶい橙	2トレ　外面黒斑　赤彩	
6	土師器	壺	－	16.4	5.0	BCEHIJM	95	普通	にぶい橙	2トレ　S55G	92-2
7	土師器	壺	－	17.6	7.4	EHIJM	95	良好	にぶい黄橙	2トレ　赤彩　U54G	92-3
8	土師器	壺	－	18.7	7.3	CGHIJ	75	普通	にぶい黄橙	3トレ　砂利層	
9	土師器	壺	12.0	11.3	－	CEGHIJM	50	良好	浅黄橙	2トレ　S55G	
10	弥生	壺	－	13.9	8.0	BCGHIM	80	普通	にぶい橙	2トレ　赤彩　No1000	
11	弥生	壺	－	18.9	9.2	CEGI	80	良好	明褐橙	3トレ　赤彩　No13・14	82-4・5
12	土師器	小型壺	－	5.7	11.4	BCEHI	50	普通	にぶい橙	2トレ　輪台状　U54G	
13	土師器	小型壺	－	10.4	－	CI	25	普通	にぶい橙	2トレ　赤彩　風化　S・T55G	
14	土師器	壺	(18.6)	6.1	－	BEHIM	25	普通	橙	2トレ　赤彩　円形浮文　U54G	
15	土師器	壺	(20.6)	6.3	－	ACEHI	20	普通	にぶい黄橙	2トレ　U54G	
16	土師器	壺	(14.1)	7.5	－	ACEHI	30	良好	にぶい黄橙	2トレ　黒斑　上層	
17	土師器	壺	(14.0)	5.1	－	CEHIJM	20	良好	にぶい橙	2トレ　S・T55G	
18	土師器	壺	(11.8)	3.4	－	HIJM	40	普通	にぶい橙	2トレ　風化　U55G	
19	土師器	壺	－	4.5	7.5	CEGHIM	75	普通	にぶい黄橙	2トレ　U54G	
20	土師器	壺	－	4.1	8.8	CEHI	60	普通	にぶい黄橙	2トレ　木葉痕　赤彩　上層	
21	土師器	壺	－	2.4	8.8	CEHIM	60	普通	橙	2トレ　木葉痕　U53G	
22	土師器	壺	－	2.4	7.7	CEHIM	80	普通	にぶい橙	2トレ　木葉痕　U54G	
23	土師器	壺	14.5	8.8	－	ACEHIJ	95	良好	にぶい橙	2トレ　R58G	
24	土師器	小型壺	(8.2)	2.3	－	CEIM	30	良好	にぶい黄橙	2トレ　S・T55G	
25	土師器	小型壺	－	10.9	3.8	EGHI	95	良好	浅黄橙	2トレ　風化　U54G	
26	土師器	小型壺	7.5	11.4	4.3	CEHI	90	普通	にぶい橙	2トレ　U54G	95-4
27	土師器	小型壺	9.2	12.6	7.4	BHIJM	100	良好	にぶい黄橙	2トレ　円形浮文	95-5
28	土師器	鉢	－	7.7	4.0	CEHIM	90	良好	浅黄	2トレ　赤彩　S55G	124-6
29	土師器	小型壺	－	10.9	5.3	JM	80	良好	にぶい黄橙	2トレ　赤彩　No1005	95-6
30	土師器	甕	14.0	23.4	(7.1)	BCEGHI	70	普通	にぶい黄橙	3トレ　No11	
31	土師器	小型甕	15.6	17.8	6.0	CHIJM	90	普通	にぶい橙	2トレ　外面煤付着　U54G	117-8

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
32	土師器	甕	16.4	20.3	—	CEGHI	70	普通	にぶい黄橙	2トレ　S55G№13・26	115-5
33	土師器	甕	(18.7)	15.6	—	CEHI	20	普通	にぶい黄橙	2トレ　U54G	
34	土師器	甕	17.3	10.6	—	EHIJM	40	良好	にぶい橙	2トレ　U54G	
35	土師器	甕	(11.9)	7.5	—	CEHIJ	40	良好	にぶい赤褐	2トレ　U54・V53G	
36	土師器	鉢	10.4	7.0	—	CEI	40	普通	灰褐	2トレ　外面煤付着　U54G	
37	土師器	甕	—	4.8	7.9	CEGHIJM	50	普通	浅黄橙	3トレ　木葉痕　№1	
38	土師器	甕	—	5.1	7.7	HIJM	75	良好	灰黄	2トレ　内外面煤付着　S・T55G	
39	土師器	鉢	10.2	6.6	—	EHI	50	普通	にぶい橙	2トレ　U54G	
40	土師器	台付甕	14.1	23.3	8.3	CHIJ	95	良好	にぶい黄橙	2トレ　№1002　外面煤付着	98-4
41	土師器	台付甕	15.9	22.8	—	BCEHIM	95	普通	にぶい黄橙	2トレ　U54G	98-5
42	土師器	台付甕	(14.1)	20.9	—	CEHI	80	普通	黄灰	2トレ　№1003　内外面煤付着	
43	土師器	台付甕	18.6	29.1	—	CGHJM	90	良好	にぶい橙	2トレ　T55G　内外面煤付着	98-6
44	土師器	台付甕	(16.0)	25.3	9.3	EGIJM	70	普通	にぶい黄橙	2トレ　T55G　外面煤付着	
45	土師器	台付甕	18.5	27.7	9.3	BCEHIM	95	普通	にぶい黄橙	2トレ　V54G	99-1
46	土師器	台付甕	17.7	26.6	8.8	EHI	100	良好	にぶい黄橙	2トレ　V54G　口唇キザミ	99-2
47	土師器	台付甕	(16.2)	27.1	10.5	GHIJM	60	普通	にぶい橙	2トレ　風化　U54G	
48	土師器	台付甕	15.1	25.5	9.2	CEGHIJ	80	普通	にぶい橙	2トレ　U54G	99-3
49	土師器	台付甕	(15.2)	20.6	—	EGI	60	普通	にぶい褐	2トレ　T55G№2	99-4
50	土師器	小型台付甕	(14.2)	16.8	—	CEIJ	60	良好	にぶい橙	2トレ　S55G　内外面煤付着	104-5
51	弥生	台付甕	13.6	18.4	—	AEGIJ	80	良好	黄褐	2トレ　U54G　外面煤付着	83-1・2
52	土師器	台付甕	16.2	26.5	8.5	CEGI	80	普通	灰黄褐	2トレ　S字甕　U54G	99-5・6
53	土師器	台付甕	15.2	24.2	9.1	CEHIM	90	普通	にぶい黄橙	2トレ　S字甕　S・T55G	100-1
54	土師器	台付甕	14.2	23.4	8.6	CEGHI	80	普通	にぶい橙	2トレ　S字甕　S・T55G	100-2
55	土師器	台付甕	16.0	24.0	(9.3)	GHIM	90	普通	にぶい橙	2トレ　S字甕　T55G	100-3
56	土師器	台付甕	(13.0)	3.4	—	CIJ	20	良好	灰黄褐	2トレ　S字甕　S・T55G	
57	土師器	台付甕	—	9.3	7.0	EHIM	75	良好	にぶい黄橙	2トレ　U54G　外面煤付着	
58	土師器	台付甕	—	8.1	10.4	CEHIJM	80	普通	にぶい黄橙	2トレ　U54G　内面煤付着	
59	土師器	台付甕	—	7.7	(8.8)	CGHIJM	50	普通	にぶい橙	2トレ　U54G	
60	土師器	台付甕	—	8.0	11.9	EGHIJM	95	普通	にぶい黄橙	2トレ　U53G　外面煤付着	
61	土師器	台付甕	—	6.4	10.7	CHIJM	95	普通	にぶい橙	2トレ　U55G	
62	土師器	台付甕	—	7.3	9.3	BCEHIM	75	普通	にぶい黄橙	2トレ　風化　U55G	
63	土師器	台付甕	—	6.3	8.9	EGHIJM	95	良好	にぶい黄橙	2トレ　S・T55G	
64	土師器	台付甕	—	5.7	10.3	BCEHIJ	80	良好	にぶい黄橙	2トレ　R55G№1	
65	土師器	台付甕	—	4.5	5.8	BCGHIJM	95	良好	にぶい黄橙	2トレ　上層	
66	土師器	台付甕	—	5.6	8.9	EGHI	80	良好	にぶい橙	2トレ　U54G　外面煤付着	
67	土師器	台付甕	—	6.0	9.0	ACEGHI	90	普通	にぶい橙	2トレ　S55G№68	
68	土師器	台付甕	—	5.0	7.9	CEIJM	80	普通	にぶい橙	2トレ　風化　R55G№3	
69	土師器	台付甕	—	5.6	7.5	ACGHIJ	100	普通	にぶい黄橙	2トレ　T57G　外面煤付着	
70	土師器	ミニチュア	—	4.9	6.7	CEIJM	75	普通	にぶい黄橙	2トレ　上層	
71	土師器	高坏	9.6	17.2	13.3	BCEHI	95	良好	にぶい橙	2トレ　三孔　S55G№91	131-5
72	土師器	高坏	14.6	12.4	10.8	BCEHIJ	100	良好	にぶい橙	2トレ　S55G№66	131-6
73	土師器	高坏	14.0	11.6	—	HIJM	90	良好	にぶい黄橙	2トレ　四孔　S56G	132-1
74	土師器	高坏	22.2	7.4	—	EGHIM	75	良好	にぶい黄橙	2トレ　S・T55G　内外面煤付着	
75	土師器	高坏	—	9.8	(11.2)	CEGHI	50	普通	浅黄橙	2トレ　三孔　上層	
76	土師器	高坏	—	7.4	11.9	CGHIJM	70	普通	にぶい橙	2トレ　U54G　二段三・六孔	
77	土師器	高坏	—	6.1	(12.6)	CEHIJ	50	良好	にぶい橙	2トレ　三孔　U54G	
78	土師器	高坏	—	7.3	12.4	ACEHI	40	普通	橙	2トレ　四孔　S・T55G	
79	土師器	高坏	—	4.4	—	CEHIM	75	良好	にぶい黄橙	3トレ　砂利層	
80	土師器	器台	8.9	7.8	9.9	ACEHIJM	95	普通	にぶい黄橙	2トレ　赤彩　三孔　S・T55G	136-6
81	土師器	器台	8.6	7.8	10.0	CEHI	80	普通	にぶい黄橙	2トレ　三孔　T55G№1	136-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
82	土師器	器台	10.0	6.7	—	BCEHI	70	普通	にぶい橙	2トレ 四孔 上層	
83	土師器	器台	8.5	5.4	—	CEHIJM	80	普通	にぶい黄橙	2トレ 赤彩 S55G№48	
84	土師器	装飾器台	(18.5)	12.5	13.0	BCGHIJ	70	良好	にぶい黄橙	2トレ 四孔 S55・56G	136-9-10
85	土師器	装飾器台	(17.6)	2.8	—	AIJ	25	良好	にぶい橙	2トレ S55G№49	
86	土師器	甑	17.0	11.8	4.5	CEHIJM	80	普通	にぶい橙	2トレ S55G№14	141-5
87	土師器	甑	17.7	13.2	1.9	BCEHI	90	良好	にぶい黄橙	2トレ S55G№90	141-6
88	土師器	甑	—	3.9	5.5	CEGHIJ	50	普通	橙	2トレ 内外面煤付着 U54G	
89	土師器	鉢	23.3	12.3	4.3	CEHI	80	普通	にぶい橙	2トレ S55G№18	124-7
90	土師器	鉢	(15.8)	15.2	4.8	CHIJM	25	普通	にぶい橙	3トレ №17	
91	土師器	鉢	10.2	8.7	—	ACEHIM	80	普通	橙	2トレ U54G	124-8
92	土師器	鉢	12.5	12.3	2.7	CEGHIJ	80	普通	浅黄橙	2トレ 赤彩 U54G	125-1
93	土師器	鉢	(13.2)	11.2	5.5	GHIM	40	普通	にぶい橙	3トレ 風化 №2	
94	土師器	坩	(9.3)	7.3	2.2	CEHIJ	70	普通	にぶい黄橙	2トレ R56G№30	
95	土師器	坩	(13.1)	7.2	—	CEHI	25	普通	にぶい橙	3トレ 風化 №17 赤彩	
96	土師器	鉢	8.9	6.0	3.5	BHIJM	100	普通	にぶい黄	2トレ 輪台状 №1006	125-3
97	土師器	ミニチュア	—	5.4	3.7	CEIM	50	良好	にぶい褐	3トレ 砂利層 輪台状	
98	土師器	ミニチュア	(5.5)	5.9	3.9	CHIM	40	良好	灰黄褐	2トレ S・T55G	
99	土師器	ミニチュア	—	4.4	—	CEHJM	40	普通	灰黄	2トレ U54G	
100	土師器	手づくね	6.7	4.2	3.7	CEJM	70	普通	浅黄	2トレ T55G№1	126-11
101	土師器	手づくね	6.3	3.7	5.3	CEIJM	80	普通	浅黄	2トレ S55G	126-12
102	土師器	手づくね	—	2.5	—	CEGHIJ	50	普通	灰黄	2トレ T55G№1	
103	土師器	坏	11.7	6.9	—	CEHIJ	60	普通	にぶい黄橙	2トレ 赤彩 U54G	146-2
104	土師器	鉢	13.2	7.2	—	CEHI	75	普通	にぶい黄橙	2トレ 上層	125-2
105	土師器	高坏	15.7	10.8	(10.8)	CEHIJM	50	普通	にぶい橙	2トレ 赤彩 U55G	
106	土師器	高坏	—	9.6	12.7	BCEHIM	90	普通	にぶい橙	2トレ U54G	
107	須恵器	坏	—	1.7	(8.0)	J	5	良好	灰	3トレ №6 南比企産	
108	須恵器	坏	—	0.8	(6.0)	EHJ	5	普通	灰白	3トレ №7 南比企産	
109	須恵器	坏	(13.0)	3.5	—	HIJ	15	普通	灰	3トレ №6 南比企産	
110	弥生	壺	—	4.9	—	ACEJ	5	普通	灰黄褐	2トレ	
111	土師器	甕	—	5.3	—	EHI	5	普通	にぶい黄橙	2トレ U63G	
112	土師器	甕	—	9.5	—	AE	5	普通	褐灰	2トレ 上層	
113	弥生	壺	—	4.2	—	AEHI	5	普通	黒褐	2トレ T55G	
114	土師器	甕	—	3.4	—	AEI	5	普通	灰黄	2トレ U54G	
115	弥生	壺	—	1.9	—	EI	5	普通	灰黄褐	2トレ 上層	
116	弥生	壺	—	3.1	—	EHI	5	普通	灰白	2トレ S56G	
117	土師器	壺	—	4.7	—	EHJ	5	普通	にぶい黄橙	2トレ S55・56G	
118	土師器	甕	—	4.6	—	EHI	5	普通	灰黄褐	2トレ T55G	
119	土師器	甕	—	4.5	—	EHIJ	5	普通	にぶい黄橙	2トレ U53G	
120	弥生	壺	—	4.0	—	EHI	5	普通	浅黄橙	2トレ U54G	
121	石製品	砥石	長さ11.7	幅9.2	厚さ5.1	重さ690.1 石材	閃緑岩			U54G	
122	石製品	垂飾	長さ5.5	幅3.8	厚さ1.2	重さ27.9 石材	滑石			2トレ 上層 S・T55G	151-14

(3) 4トレンチ

4トレンチは、南北20.0m、東西27.0mの範囲を掘削し、第48号溝跡との合流部分まで完掘し、南側の壁面について断面観察を行った。

4トレンチでは、第79号溝跡の両肩の立ち上がり部分を確認した。確認面での溝幅は、12.00mである。深さは2.00mである。流路を流れる水流の方向は、南側から北側に向かっていたものとみられる。流路の方向は、4トレンチ付近でほぼ北方向に直線的であった。しかし、この先では、北東方向に弧を描くように向きを変化させ、再び直線的に流れをとる。第48号溝跡と合流する。合流部付近からは、杭や支保工の部材など出土。

断面観察の第439図C－C′に見られるとおり、東側の立ち上がりは、やや緩やかに地山が削られている。西側の立ち上がりは、やや傾斜がきつく急勾配である。本溝跡の覆土上面には、現代から中世段階のものとみられる耕作土が水平に堆積している。Ⅰ層の上面が、表土掘削前の現地表面にあたり、現代の水田耕作面である。Ⅱ～Ⅶ層の土葬はその後の耕作土である。この間の土層は、いずれも水平堆積で、床土によくみられる、鉄分を多く含み、酸化された赤茶色の酸化鉄粒が多くみられることから、奈良・平安時代以降は、水田耕作が継続的に行われていたものと考えられる。

また、4トレンチでは、東側に集落域が隣接することから、この東側から遺物が流れ込んでいる様子がうかがえる。特に、溝の肩部から中層にかけての堆積層中から多くの土器を検出した。

4トレンチは、南北約20mにわたり調査し、東西の立ち上がりも確認した。南側では、トレンチ分部の底面は、やや細かな砂利層が厚く堆積している。この砂利層の直上からは、木製品や建築部材、杭などの部材が検出されている。

北側は、底面が砂利層であるが、第48号溝跡都の合流部付近では、厚く砂質土が堆積していた。集落に接する東側部分の立ち上がりは、やや緩やかな勾配である。遺物の出土も多くみられ、台付甕・小型壺など形を留めた完形品に近い土器が多く出土した。合流部に近く、集落の北西隅にあたる地点でもある。

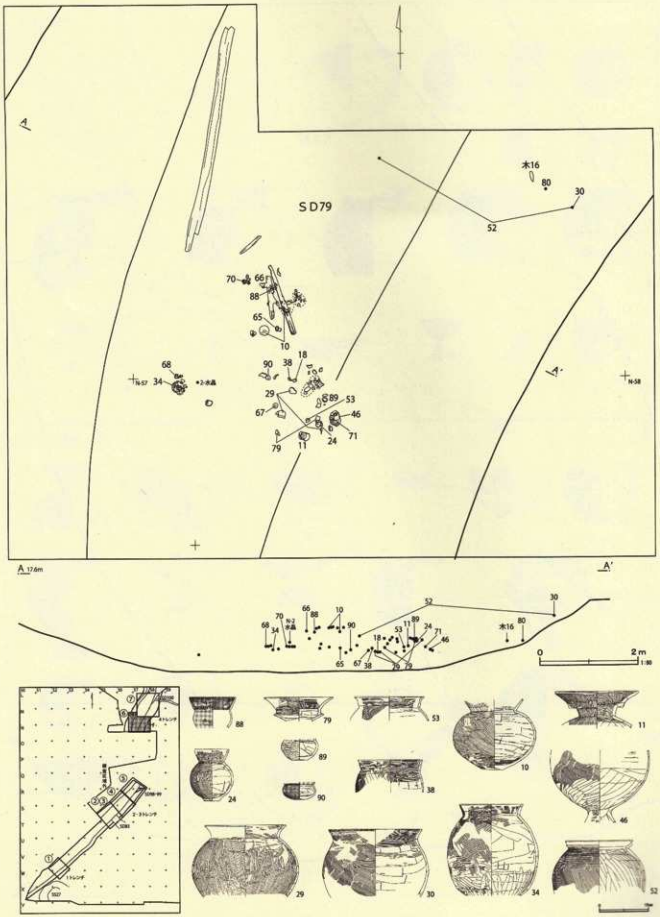
遺物の出土状況は、集落に接した東側肩部分に寄った地点から大量の土器や木製品・建築部材を検出した。第475図31の桶や第478図48の建築部材を検出した。土器は、古墳時代前期のものが大量に出土した。特に、器種では、壺・甕・台付甕が多く出土する傾向が見られた。溝跡の中央付近からは、第460図11の複合口縁壺、第464図52のS字状口縁甕、第466図79の装飾器台などである。また、集落に接した東側の肩部分から流れ込むように廃棄された様々な器種の土器が重なるように出土した。中でも、第465図74は台付甕の胴部に渦巻き文・鋸歯文・山形文などがヘラ描きされた土器である。

破損した土器類を河川に廃棄するとみられているが、完形率が高い土器が多く、破損品が廃棄されたかやや疑問が残る。出土状況も、溝跡の肩部に集中し、やや溝跡の周囲が堆積層などによって埋没し、溝の中央付近がやや深く流路を形成していたように見える。断面観察の第439図C－C′に見られる第3・4・7層が溝の覆土であり、周囲の10・11・12層はこの時期はすでに埋土として地山を形成している。土器は、この堆積層から出土している。

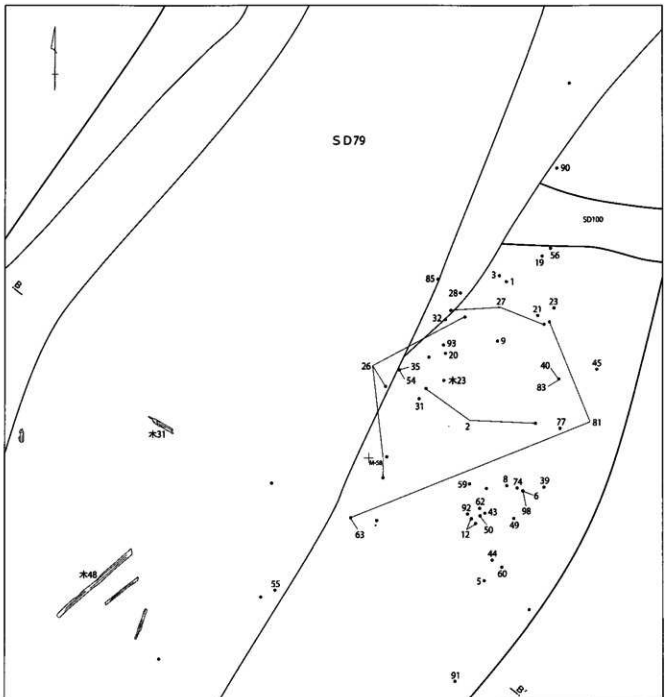
古墳時代前期の住居跡は、その多くから生活に使われていた土器が出土するが、廃絶された住居を利用して、土器を一括廃棄した遺構があまり見られない。こうした様相は、集落周囲の河川が廃棄の場所として利用されていたためと考えられる。

4トレンチ出土遺物

1～18・39は壺である。法量には大小が認められる。2・3トレンチの中小に対応する。1はほぼ完形である。1～4・6・8は大型である。1の壺は長めの球形胴に、やや長い直線的な口縁部

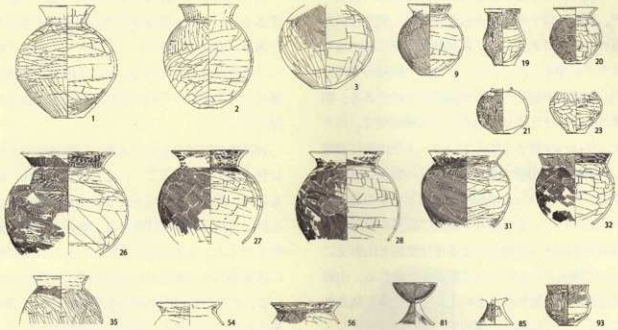


第457図　第79号溝跡４トレンチ遺物分布図（１）

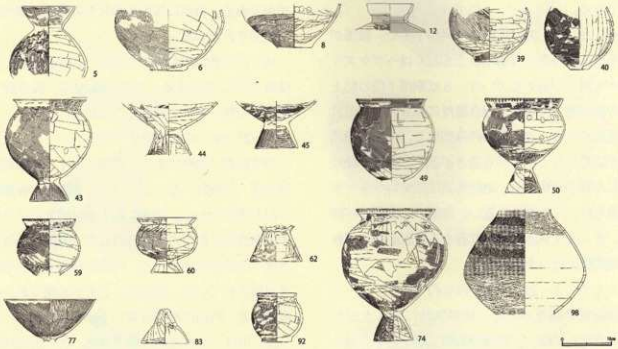


第458図　第79号溝跡 4

①出土遺物



②出土遺物



トレンチ遺物分布図（2）

が付くもので、器肉が厚い。口縁部は中段からやや外側に外反する。調整は口縁部には内外面横ナデ、頸部にはナデが加えられている。胴部は内外面ヘラナデである。見込み部分には更に細かなヘラナデが加えられている。2は1と同様のものだが、口縁部が短く、胴部が細長いものである。胴部外面はヘラケズリである。3は球形胴で、ヘラケズリにヘラ磨きを加えている。下半は斑に剥離し、調整が不明瞭である。1～3の底部はあまり突出していない。4は胴部の上位と下半の破片で、中位を欠いている。細長い胴部で底部が突出する。胴部上半にはヘラ描きによる平行沈線と山形文によって構成されるパレス文様が施文される。山形文は左回転で施され、その上に平行沈線が施されている。平行沈線は不規則で、上位から8・5・3・4条施されている。下端にはまばらにヘラの先端による烈点文が施されている。内面は指ナデである。底面は1・2がヘラケズリ、3・4がナデである。

6・8・18・39は球形胴の胴部下半で、底部が突出する。外面には刷毛目、もしくはヘラケズリ後ヘラ磨きが施されている。8は胴部下段の粘土帯の接合部で剥離し、接合箇所に施された刷毛目が認められる。この部分のみ肥厚し、内面に指頭痕が認められることから着きが悪く、調整を繰り返した様子が窺える。18の外面は細かいヘラナデが施され、ヘラ磨きに近い。底面には木葉痕が残る。6・39は外面に煤が付着する。底面はいずれも無調整に近いナデである。

5・7・9・10は、中型のものである。5・7は口縁部の開きが弱く、内湾気味に立ち上がり、頸部の括れが弱い。外面の調整は刷毛目をベースにヘラ磨きが加えられている。9は、球形胴に、頸部から直立し、中段から外反する短めの単口縁部が付くものである。10は扁平な胴部に直立する口縁部が付くもので、大型の坩のような器形である。外面はヘラケズリ後ヘラ磨きが施されている。底面はヘラケズリである。

11～17は壺の口縁部である。11～13は二重口縁である。いずれも外反する下段に上段を乗せる形である。12は上段を欠いている。11・13は丁寧なヘラ磨きが施されている。13の上段外面は粘土が着せられており、それが剥落した下地の刷毛目が見えている。

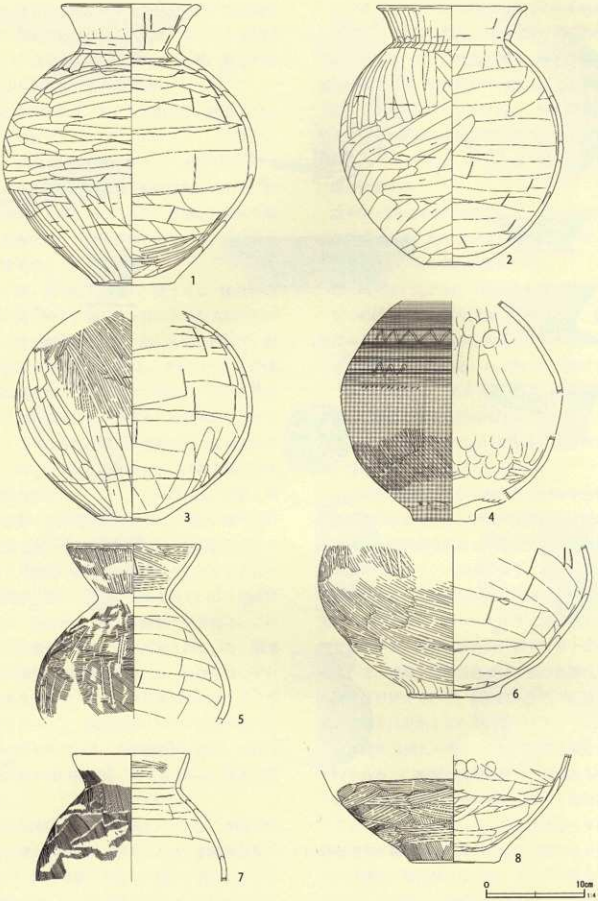
14は複合口縁のものである。口縁端部から外側に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出すもので、内面に緩い段が見られる。口縁端部は面を持つ。複合部はほぼ直立し、断面三角形の棒状浮文が4本、4単位貼付されている。複合部外面には単節ＬＲ、単節ＲＬの羽状縄文が施文されている。それ以外は内外面とも刷毛目後ヘラ磨きが施される。15は斜めに直線的に延びるもので、口縁部外面やや下位に粘土を貼付して複合部を作りだしている。調整は刷毛目で、口縁部は横ナデが施されている。端部は面を持つ。頸部の括れは緩やかである。肩部には多条のＲＬの縄文が横方向に施文されている。

16・17は単口縁のものである。16は直線的、17は緩やかに外反する。17は口縁端部に面を持つ。刷毛目の後ヘラナデが施されている。

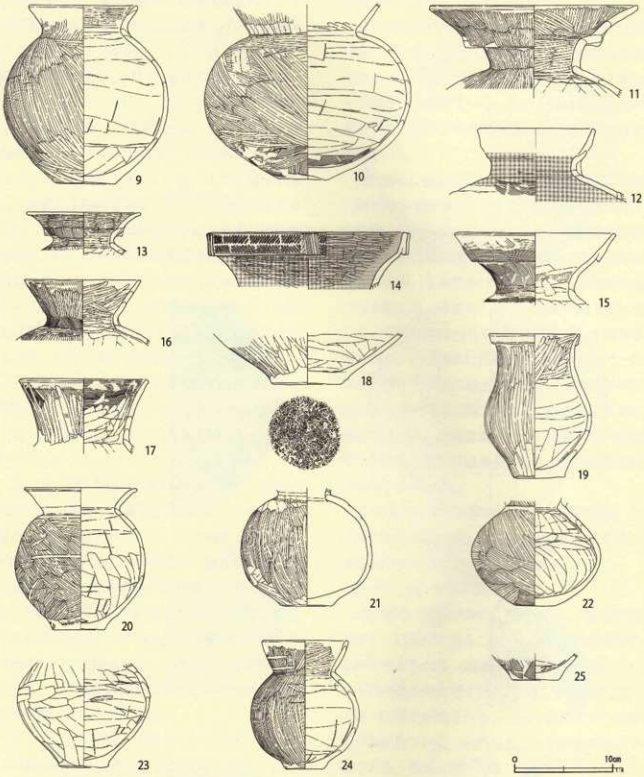
19～25・86・87は小型壺である。

19は細長い器形である。器肉が厚く、底部が突出せず、円板状になることから、弥生時代後期のものと考えられる。端部に粘土を貼付することにより複合部を作りだす複合口縁で、外面はヘラナデ後ヘラ磨きが施される。内面も頸部までヘラ磨きが施されている。底面はヘラナデが施され、平坦である。外面に煤が付着している。

20～24はいずれも球形胴である。20・24はほぼ完形である。外面は23がヘラナデ、21がヘラケズリ後ヘラ磨き、24が刷毛目後ヘラ磨き、20・22はヘラ磨きが施されている。20は口縁部が短めで外反し、底部が大きめである。底面はヘラ磨きである。21は口縁部のヘラ磨きのあたりが頸部に点状



第459図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（１）



第460図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（２）

に見られる。底面はヘラケズリである。22は頸部に薄い粘土が貼付されている。突帯というより段に近い。24は口縁部が内湾し、底部が突出する。底面はヘラ磨きである。

25は底部である。あまり突出せず、底面はヘラケズリである。

86・87は口縁部の破片である。内湾するもので、甕壺になる可能性がある。87は埦形のもので、端部は内傾する面を持つ。外面には刷毛目後ヘラ磨き、内面にはヘラ磨きが施されている。86は胎土に片岩を含んでいる。

26～38・40・41・53～56は甕である。30は口縁端部が面を持ち、刷毛目工具による左方向からのキザミ目が施されている。他のものに比して、頸部の括れがやや弱めである。それ以外のものは、頸部は基本的に「く」の字に屈曲し、内面に稜を持つ。口縁部は短く、頸部から直立気味に立ち上がり、上半は外側に開く。端部は丸く収められている。31・33・54は直線的もしくは若干外反する。口縁部外面は、29・32・35・54以外はいずれも刷毛目後横ナデが施されている。32は粗い刷毛目のみが施され、全体にごつごつした印象を受ける。54はナデ調整の甕で、全体にヘラナデが施された後口縁部にはヨコナデが加えられている。内面は29・31・35以外は、刷毛目後横ナデが施されている。31は横ナデ後ヘラ磨きが施されている。胴部外面の調整は、29・34・35・37・54以外はいずれも刷毛目調整で、ヘラナデが部分的に加えられているものがある。胴部内面には29・33以外はヘラナデが施されている。33は刷毛目である。26は内外面、30・31・33・36・38・56は外面に煤が付着する。

29は全体にヘラ磨きが施されている。胴部は粘土帯の接合痕が全体に認められる。口縁部外面は横ナデ、内面は横ナデ後ヘラ磨きが施されている。胴部外面はヘラケズリ後ヘラ磨きが施されている。内面はヘラ磨きである。外面に煤が付着している。

34・35・37・40・41は胴部外面にタタキ目が施されるものである。胴部は長胴気味で40・41の底部は突出している。口縁部の調整は刷毛目調整の甕と同様である。胴部外面の調整はタタキをベースにヘラケズリ、ヘラナデを施し、更に刷毛目を加えている。胴部内面には横方向のヘラナデ後縦方向のヘラナデを加えている。34・35・40は外面に煤が付着する。

42～52・57～74は台付甕である。42～51は大型の台付甕である。52はS字状口縁台付甕、57～60は小型のもの、61～73は脚台部である。

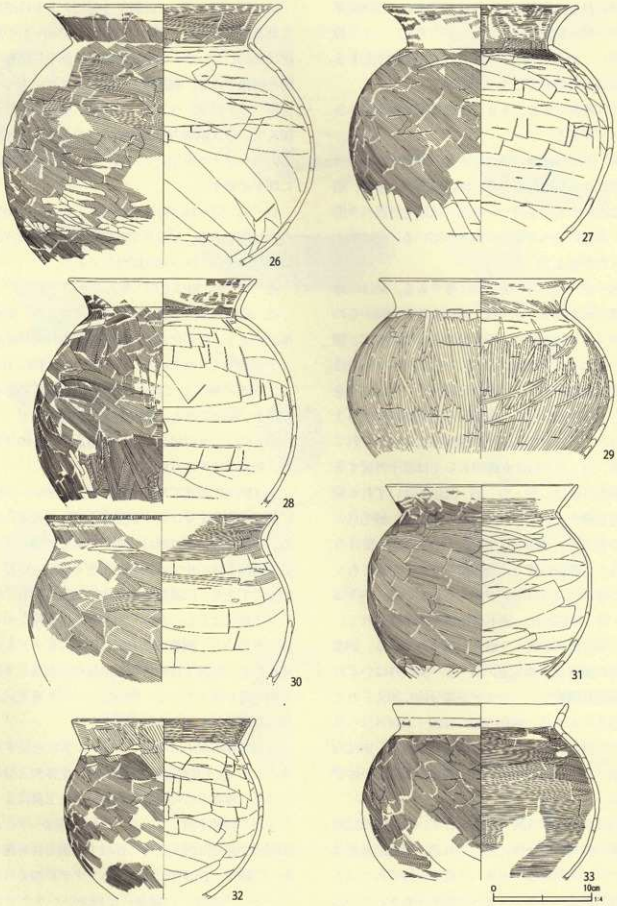
42・43・50・51は全形の知れるものである。

42・43は大多数の甕と同様のものである。脚台部は小さく、低平である。接合部の内外面には強くナデが加えられている。42の脚台部は特に小さく、胴部に挿入して接合しており、特異である。43はホゾ接合である。脚端部は面を持つ。

50・51はこれに対して古い様相を示すものである。脚台部はやはり低平で、小さい。

50は胴部の器高に対して径の方が大きく、全体に扁平な印象を受ける。胴部は上位に最大径がある。胴部と脚台部は境目が明瞭である。脚台部はこの個体全体の中では割合が大きく、しっかりしたものである。口縁部は端部に広い面を持ち、刷毛目工具によるしっかりしたキザミ目が左上から施されている。調整は横方向の刷毛目後ナデを加えている。胴部下位の接合部は外面が剥落し下地の刷毛目が見えている。内面はヘラナデ後見込み部分に刷毛目が加えられている。

51は頸部の括れが弱く、「し」の字状を呈するものである。口縁端部は面を持ち、全体の3分の1ほどに棒状のものに布を巻き付けた工具によって上から押捺を施している。それ以外はヘラによる押捺である。外面全体に連続する刷毛目が施され、口縁部、接合部には一部ヘラナデが加えられている。内面は、口縁部には細かいヘラナデが、胴部には縦方向のヘラナデ後、横方向のヘラナデ



第461図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（３）

が施されている。脚端部は面を持つ。

49は両者の中間的な様相を呈するもので、刷毛目調整の長めの胴部に、刷毛目工具によるキザミ目が左上から施されている。

44～48は胴部下半から脚台部である。いずれもホゾ接合である。46は臍の部分が脚台部の天井部に突出している。44はヘラナデ調整のもので、脚端部を欠くが、大型の脚台部になるものと考えられる。45～48は刷毛目調整で、46は胴部下半に丁寧なヘラケズリが施されている。脚台部の内面はヘラナデである。47の脚台部内面の刷毛目は外面調整のものと異なり太目である。42・43・46・49～51は内外面に、47・48は外面に、44・45は内面に煤が付着する。

52はS字状口縁台付甕である。全体に厚めで重量感があり、胎土も在地のもので、模倣品である。口縁部は横ナデによって仕上げられているがシャープさはなく、厚目の感が強い。胴部の外面は羽状の刷毛目が施され、胴部上半には横方向の刷毛目が加えられている。内面はナデ調整である。内外面に煤が付着する。

57～60は小型の甕である。いずれも刷毛目調整である。57・58は胴部があまり張らず細長い胴部のものである。57は部分的にヘラナデが加えられている。58は器面の風化が進みやや不明瞭である。59は球形胴のもので、口縁端部が面を持ち、刷毛目工具による左方向からのキザミ目が施されている。胴部下位の粘土帯の接合部にはヘラケズリに近いヘラナデが施されている。60は全体が扁平なもので、脚付鉢とでも言い得るものである。胴部の外面には斜め方向のヘラによる沈線が施されている。脚台部は低平で、ヘラナデ調整である。接合部はホゾ接合である。59は内外面に、57は外面に煤が付着する。

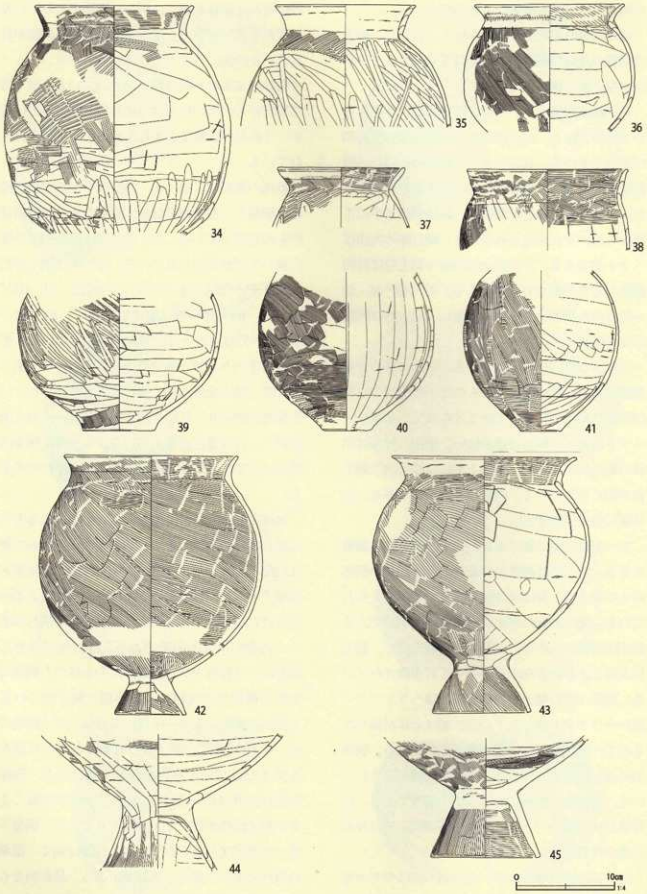
61～73は脚台部である。62～64・69はやや大きめで、器肉が厚くしっかりしている。68・73はミニチュアの可能性がある。その他のものは、概ね径に対して器高が低く、新しい様相を示している。いずれもホゾ接合で、67・70は接合部に剥離が見られ、その面にヘラナデが施されている。

63は挿入された臍の部分が外れている。67・71は胴部からの臍の形がはっきり天井部に出ているが、それ以外は粘土を入れられて強くナデつけられている。

外面の調整は、65・68・71がヘラナデである他は、胴部と一連の刷毛目で、胴部のものが脚台部のものを切っている。63・70～72は接合部の外周に強いナデが加えられている。62・66は刷毛目の上にナデが加えられている。内面は、61・63・64・66・68～70・72は刷毛目調整で、63・64・69・70・72はその上にナデが加えられている。それ以外はヘラナデが施されている。61・63・65・66・67・72は端部外面に強い横ナデが施されている端部は67が丸く収められている他はいずれも面を持つ。71は風化が進んでいる。62・71は胴部内外面に、70は外面に、64・66は内面に煤が付着する。

74は完形に近い台付甕である。土圧によるものと思われる歪みが大きく、胴部上半は接合ができない部分もあった。全体的な様相は他の台付甕と同様である。口縁端部は面を持ち、ヘラによるキザミ目が左側から施されている。頸部の括れは弱く、内面の稜は不明瞭である。脚台部は大きく、接合はホゾ接合である。端部は面を持つ。胴部の全体に櫛描きの沈線による線刻が施されている。上段には振幅が大きく不規則な波状文が2段施され、それを切って径1.8cmの渦巻きとそれに連なる長さ2.5cmほどの平行沈線が4条延びる。胴部中位には長さ6.0cmほどの4条1単位の沈線による山形文が描かれ、上下区画されている。胴部下半にも波状文が施されている。沈線は細く、器面の風化もあり、非常に不鮮明である。具象的なものではなく、抽象的な文様と考えられる。

75～78・80～85は高坏である。75・76は全形の



第462図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（４）

知れるものである。75・76は大きく直線的に開く坏部に、高さのあるハの字形の脚部が付くものである。最下位に粘土が若干貼付されて不明瞭な稜が表現されている。75の坏端部は丸く収められ、76は内傾する面を持つ。脚部との接合はホゾ接合である。径1.1cm程度の透孔が三孔外側から開けられている。脚端部は丸く収められている。坏部外面は刷毛目後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きである。76の脚部外面はヘラナデである。76の胎土には片岩を含む。

77・78も同様の大きな坏部のものである。脚部が抜けた状態のものである。77は口縁端部が摘まれて外反している。調整は内外面とも密なヘラ磨きである。

81は埦形の坏部に裾広がりの脚部の付くもので、小型高坏の可能性もある。坏部は内外面ともヘラ磨きで、端部は丸く収められている。最下端に粘土が若干貼付されて不明瞭な稜が表現されている。ホゾ接合で、接合部は厚みを持っている。脚部は大きく広がり、外面はヘラ磨き、内面はヘラナデで、天井部のみナデが加えられている。

80・82～85は脚部である。いずれもホゾ接合である。82・83は端部が若干内湾し、84は接合部が細く大きく外反し、85は外反するが、あまり広がらない。端部はいずれも面を持つ。径1.2cmの透孔が82は3箇所、83は二孔一対のものが2箇所、84は4箇所、外側から開けられている。85は穿孔されないものである。外面の調整は83がヘラケズリである他は刷毛目後ヘラ磨きである。内面には刷毛目もしくはヘラナデが施されている。

79は装飾器台の器受部である。大きく外反して開き、鍔が短いものである。透穴は現存している範囲では認められなかった。器受部の外面は刷毛目後ヘラ磨き、内面は上段が刷毛目、下段がヘラナデである。

88～90は坩である。いずれも扁平な体部である。口縁部が遺存するものは88のみだが、直線的なものである。内外面ともヘラ磨きが施されている。体部の外面はいずれもヘラ磨きである。89は底部の外周にヘラケズリを加えている。内面はヘラナデである。88は器面の風化が進み、調整が不明瞭である。89は底面にわずかに木葉痕が残る。

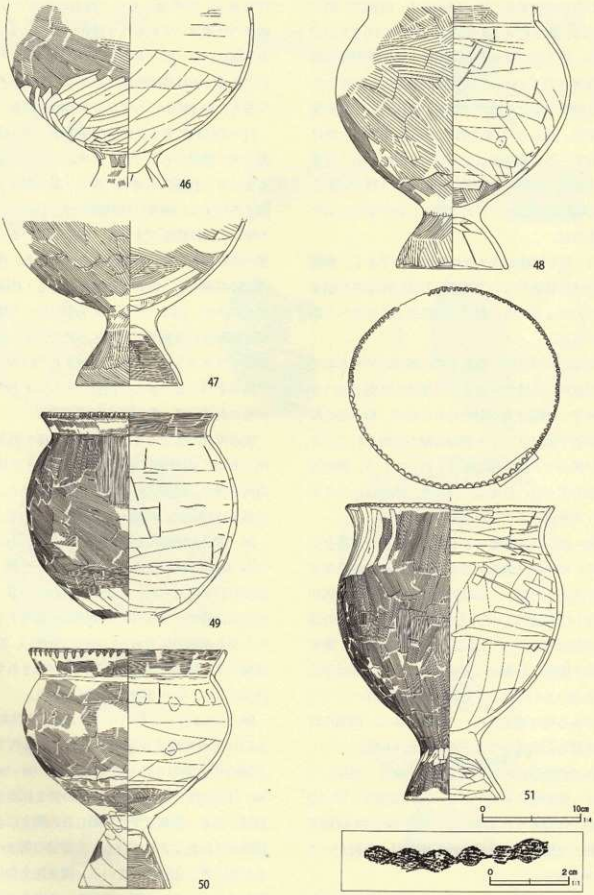
91～93は鉢である。91は口縁部横ナデ、体部外面がナデ調整のもので、ミニチュアのような印象を受ける。底面に木葉痕が残る。92・93は大型で、短く外反する口縁部に球形胴が付くもので、器肉が厚い。92は底部が大きく、突出している。口縁部は面を持ち、浅い沈線状になっている。体部外面は92が刷毛目、93がヘラ磨きである。内面は92がヘラナデ、93はヘラナデ後上半にはヘラ磨きが、見込み部分には刷毛目が加えられている。93の底面はヘラケズリ後ヘラ磨きが施されている。

94は手づくねである。指頭によるナデとオサエが施されている。底面に木葉痕が残る。

95は単孔の甑である。内湾する体部で底部は突出しない。内外面に刷毛目後ヘラ磨きが施され、器肉も薄く、精製されている印象を受ける。穿孔は推定径1.6cmで、内側から開けられている。

96・97は古墳時代中期のものである。96は中膨らみの柱状の脚部である。外面はヘラナデ、内面は絞り目が認められ、ナデが施されている。裾部の内面は横ナデである。97は口縁がまっすぐに立ち上がる埦形の坏である。器肉は分厚い。口縁部は横ナデ、体部外面はヘラケズリが施されている。底面に「X」のヘラ記号が認められる。

98～101は吉ヶ谷系のものである。弥生時代のものに比べて縄文が細かく、施文が乱れており、古墳時代前期のものと考えられる。98・99は壺、100・101は甕である。98は中位の張る算盤玉形の胴部である。胴部上半に単節LRの縄文による文様帯が3段施文されている。文様帯の間はヘラ磨きが施され、赤彩されている。縄文施文後にヘラ磨きされている。内面は丁寧なヘラ磨きに近いヘラナデが施され、平滑である。内面の下半にはお



第463図　第79号溝跡４トレンチ出土遺物（５）